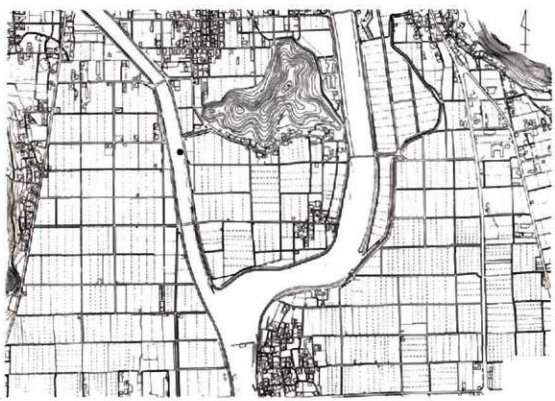
兵庫県埋蔵文化財調査報告　第147冊

氷上郡氷上町所在

犬岡（イヌオカ）遺跡

1995・3

兵庫県教育委員会



犬岡遺跡遠景

出土土器

出土木製品

例　　言

1．本書は永上郡永上町大岡に所在する大岡遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は一級河川葛野川河川改修事業に伴い、兵庫県柏原土木事務所の委託により、兵庫県教育委員会が実施した。

3．発掘調査は昭和52年１月（第１次調査・第２次調査）と昭和63年３月（第３次調査）・平成元年３月（第４次調査）の４次にわたって実施した。

なお、第１次調査・第２次調査の遺跡調査番号は770002、第３次調査の遺跡調査番号は870061、第４次調査の遺跡調査番号は880040である。

4．現地での調査は、第１次・第２次調査が兵庫県教育委員会社会教育文化財課　池田正男、渡辺　昇が、第３次調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉識雅仁、山田清朝が、第４次調査は岡長谷川真、山田清朝が担当した。

5．現地の調査については第１次ー第３次調査が直接執行で、第４次調査は池田建設株式会社と委託契約を結び、実施した。

6．調査は永上町内の１級基準点をもとに国土座標を求め、これを基準とした。なお、調査地は第Ⅴ系に位置する。

7．遺構の実測・写真撮影は調査員および調査補助員が行った。

8．整理作業は、平成２年度と平成５・６年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

9．遺物の接合・復元・実測・トレースは整理作業班で行い、遺物写真については㈱吉田カメラ商会に委託した。なお、巻首図版に使用した航空写真は永上町教育委員会より提供を受けたものである。

10．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに統一している。

11．本書の編集は山田が行った。

12．本書に用いた方位は、座標北を示す。また標高は、東京湾平均海水準を基準とした。

13．本報告にかかる遺物は兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

14．第３次・４次調査にあたっては、永上町教育委員会國井和哉氏から、航空写真の提供等を含めて多大な援助をいただいた。また、立命館大学非常勤講師青木哲哉氏には、現地にて地形および土層の分析について助言をいただき、玉稿をいただいた。記して感謝する次第である。

目　　次

第1章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境 …… 山田　1

第2節　歴史的環境 …… 長谷川　5

第2章　調査に至る経緯

第1節　発掘調査の経緯

1．第1次調査（昭和52年度） …… 渡辺　9

2．第2次調査（昭和52年度） …… 渡辺　9

3．第3次調査（昭和62年度－確認調査） …… 山田　10

4．第4次調査（昭和63年度－全面調査） …… 山田　10

第2節　整理作業の経緯 …… 山田　11

第3章　第1次・2次調査の結果

第1節　調査の経過と調査組織 …… 渡辺　13

第2節　調査結果 …… 渡辺　13

第3節　出土遺物 …… 渡辺　17

第4章　第3次・4次調査の結果

第1節　第3次調査の結果 …… 山田　17

第2節　第4次調査の結果

1．調査の方法 …… 山田　17

2．調査の結果 …… 山田　18

第5章　科学的分析の結果

第1節　犬岡遺跡出土木器の樹種 …… 島地　謙　75

第2節　兵庫県永上郡、犬岡遺跡における地形環境 …… 青木哲哉　79

第6章　ま　と　め

第1節　土器について …… 山田　89

第2節　調査の成果 …… 山田　121

挿 図 目 次

第1図　犬岡遺跡の位置（Ⅰ）…… 1
第2図　犬岡遺跡の位置（Ⅱ）…… 2
第3図　由良川・加古川の道…… 3
第4図　犬岡遺跡と水分かれ…… 4
第5図　周辺主要遺跡…… 6
第6図　調査位置…… 9
第7図　第1・2次調査出土土器（1）…… 14
第8図　第1・2次調査出土土器（2）…… 15
第9図　第1・2次調査出土土器（3）…… 16
第10図　調査区内地区割図…… 17
第11図　平面図・断面図…… 19
第12図　土器出土位置（1）…… 20
第13図　土器出土位置（2）…… 21
第14図　中期の土器…… 23
第15図　縄目土器(1)…… 34
第16図　後期の土器　壺形土器（1）…… 37
第17図　後期の土器　壺形土器（2）…… 38
第18図　後期の土器　壺形土器（3）…… 39
第19図　後期の土器　壺形土器（4）…… 40
第20図　後期の土器　甕形土器（1）…… 44
第21図　後期の土器　甕形土器（2）…… 45
第22図　後期の土器　甕形土器（3）…… 46
第23図　後期の土器　甕形土器（4）…… 47
第24図　後期の土器　甕形土器（5）…… 48
第25図　後期の土器　甕形土器（6）…… 49
第26図　後期の土器　甕形土器（7）…… 50
第27図　後期の土器　甕形土器（8）…… 51
第28図　後期の土器　甕形土器（9）…… 52
第29図　後期の土器　甕形土器（10）…… 53
第30図　後期の土器　鉢形土器（1）…… 55
第31図　後期の土器　鉢形土器（2）…… 56
第32図　後期の土器　高坏形土器（1）…… 58
第33図　後期の土器　高坏形土器（2）…… 59
第34図　後期の土器　器台形土器（1）…… 61
第35図　後期の土器　器台形土器（2）…… 62
第36図　後期の土器　蓋形土器…… 63
第37図　古墳時代の土器…… 64
第38図　土　錘…… 64
第39図　出土木製品（1）…… 65
第40図　出土木製品（2）…… 66
第41図　出土木製品（3）…… 67
第42図　出土木製品（4）…… 68
第43図　樹種同定写真（1）…… 77
第44図　樹種同定写真（2）…… 78
第45図　水上盆地南部の地域概念図…… 80
第46図　水上盆地南部の地形分類図…… 81
第47図　犬岡遺跡付近の
　　微地形分類予察図…… 82
第48図　水上盆地南部ボーリング柱状図…… 83
第49図　調査区内パネルダイヤグラム…… 85
第50図　地形環境の模式的な変遷…… 87
第51図　出土土器の器種構成…… 89
第52図　地域タイプ別出土量…… 114
第53図　地域タイプ別器種構成…… 115
第54図　関係遺跡分布図…… 116

表　目　次

第１表　周辺主要遺跡一覧表 …… 7
第２表　壺形土器の分類（1）…… 25
第３表　壺形土器の分類（2）…… 26
第４表　甕形土器の分類（1）…… 27
第５表　甕形土器の分類（2）…… 28
第６表　鉢形土器の分類 …… 29
第７表　椀形土器の分類 …… 30
第８表　高坏形土器の分類 …… 31
第９表　器台形土器の分類 …… 32
第10表　蓋形土器の分類 …… 33
第11表　第３・４次調査出土土器観察表
　中期 …… 69
第12表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（1）…… 69
第13表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（2）…… 70
第14表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（3）…… 71
第15表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（4）…… 72
第16表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（5）…… 73
第17表　第３・４次調査出土土器観察表
　後期（6）…… 74
第18表　大岡遺跡出土木製品の樹種一覧 … 76
第19表　編年対象表 …… 90
第20表　遺跡別出土型式一覧表（1）…… 92
第21表　遺跡別出土型式一覧表（2）…… 93
第22表　遺跡別出土型式一覧表（3）…… 96
第23表　遺跡別出土型式一覧表（4）…… 97
第24表　遺跡別出土型式一覧表（5）…… 100
第25表　遺跡別出土型式一覧表（6）…… 101
第26表　遺跡別出土型式一覧表（7）…… 104
第27表　遺跡別出土型式一覧表（8）…… 105
第28表　型式別消長表（1）…… 106
第29表　型式別消長表（2）…… 107
第30表　壺形土器の地域性 …… 109
第31表　甕形土器の地域性 …… 111
第32表　鉢形土器・高坏形土器の
　地域性 …… 112
第33表　器台形土器・蓋形土器の
　地域性 …… 113
第34表　地域タイプ別型式一覧表 …… 114
第35表　関係遺跡一覧表 …… 117

図　版　目　次

巻首図版１
　大岡遺跡遠景

巻首図版２
　出土土器
　出土木製品

図版1　遺　跡
　犬岡遺跡遠景（南から）
図版2　遺　跡
　犬岡遺跡近景（南東から）
　犬岡遺跡近景（北東から）
図版3　遺　跡
　犬岡遺跡近景（西から）
　犬岡遺跡近景（南西から）
図版4　第1・2次調査
　調査地全景（南から）
　G 4 東壁
　G 5 杭列
図版5　第1・2次調査
　G 6 東壁
　G 6 北壁
　G 6 杭列
図版6　第4次調査
　全景（南から）
　落ち込み断面（南から）
図版7　第4次調査
　土器出土状況
　土器出土状況
図版8　第4次調査
　土器出土状況
　土器出土状況
図版9　第4次調査
　土器出土状況
　木製品出土状況
図版10　遺　物
　第1次調査出土土器
図版11　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版12　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版13　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版14　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版15　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版16　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版17　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版18　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版19　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版20　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版21　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版22　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版23　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版24　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版25　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版26　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版27　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版28　遺　物
　第3・4次調査出土土器
図版29　遺　物
　第4次調査出土木製品
図版30　遺　物
　第4次調査出土木製品
図版31　調　査

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

１．氷上町の位置

犬岡遺跡の所在する氷上郡氷上町は兵庫県のほぼ中央部のやや東側に位置する。北は同郡青垣町と、南側は同郡柏原町と、東側は同郡春日町及び市島町と接している。また西側は、旧播磨国の多可郡加美町と接している。これらの町とは山地が境となっており、氷上町はこれらの山地に囲まれた盆地を中心に形成された町である。そして、この盆地は氷上盆地と称されている。

氷上盆地は、青垣町北西部を源とする加古川の上流域にあたり、当盆地を南北に流れる加古川（佐治川）および、北西部から南部に流れる葛野川を中心に開けている。南北に約４km、東西に約２kmの南北に細長い盆地である。盆地中央部における標高は90mである。

第１図　犬岡遺跡の位置（Ⅰ）

２．犬岡遺跡の位置

犬岡遺跡は、氷上盆地南部の葛野川沿いに所在する。葛野川は加美町との境をなす舟坂峠を源とし、東流し氷上盆地に注ぎ込み、盆地内では加古川の西側を南流し、氷上盆地の南端部で加古川と合流している。そしてこの合流地点を葛野川に沿い約600m上流部に遡った地点に犬岡遺跡が所在する。犬岡遺跡の所在する地点の標高は約93mである。また、当遺跡の北東部には氷上盆地の中央部に独立してある明治山がある。おそらくこの明治山が、北側からの加古川と葛野川による洪水に対する防御となっていたのではないかと考えられる。逆に、この利点を選んで当地に犬岡遺跡が形成されたのではないかと考えられる。

なお、氷上盆地内における犬岡遺跡の立地の詳細については、第５章における青木哲也氏の地形分析を参照されたい。（第５章第２節）

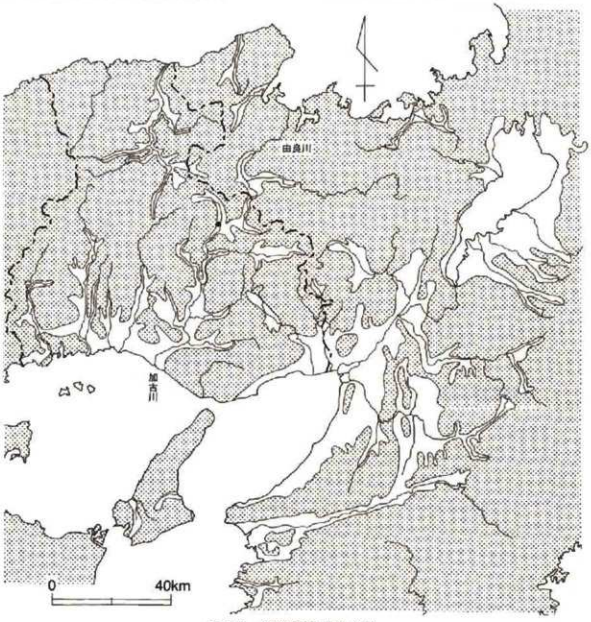
3．加古川・由良川の道

本遺跡の性格を考える上で欠かすことのできないのは、本遺跡の所在する氷上盆地が「加古川・由良川の道」のほぼ中間地点に位置していることである。

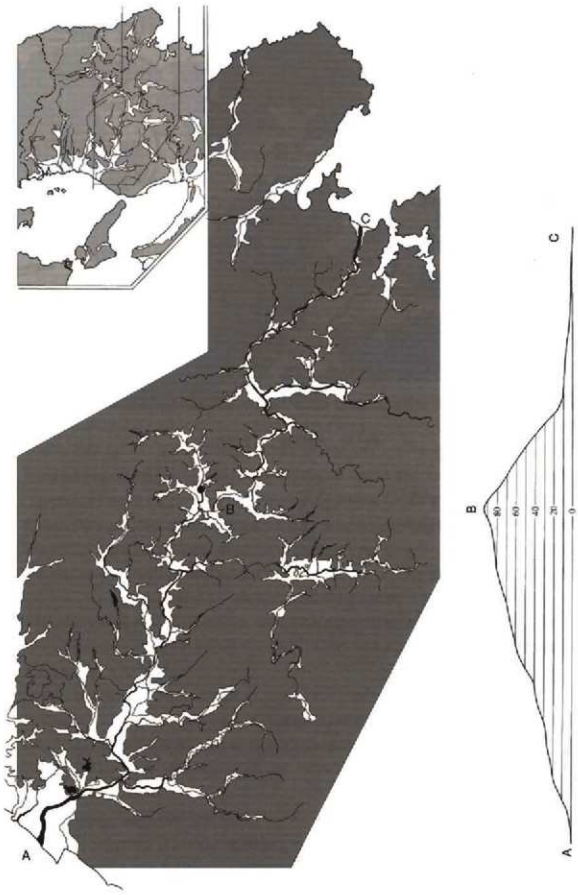
「加古川・由良川の道」とは、氷上盆地の南東部の「水分（みわかれ）」を境に、北側は由良川水系が日本海に、南側は加古川水系が瀬戸内海に流れ込み、中国山地を東西に横断する丹波山地を貫く自然の道である。由良川水系は、水分から黒井川が竹田川に、竹田川が土師川に、土師川が由良川に合流し、舞鶴湾に注いでいる。一方加古川水系は、水分から高谷川が柏原川に、柏原川が加古川に合流し、瀬戸内海に流れ込んでいる。

この水分は標高約90ｍと、日本海側と太平洋側（瀬戸内海）をわける谷中分水嶺としては日本で最も低い所に立地していることで知られている。

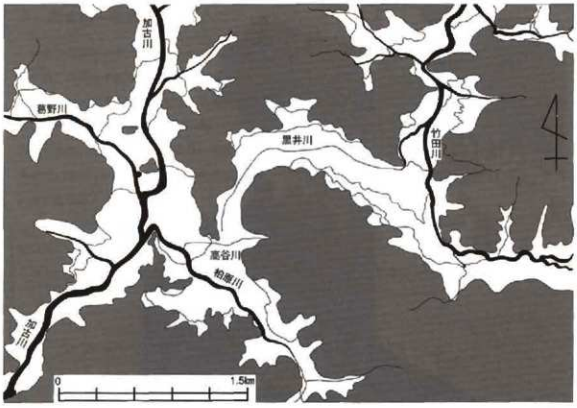
以上のように太平洋側と日本海側を結ぶにあたっての自然の障害がない、つまり地理的な条件にめぐ



第２図　犬岡遺跡の位置（Ⅱ）



第3図　由良川・加古川の道



第４図　犬岡遺跡と水分かれ

まれたため、この「加古川・由良川の道」は、古代以来主要な交通路として位置付けられてきている。古代以前においては、佐原　真氏[1]・種定淳介氏[2]などが、土器・石器の流れをもとに分析を行っている。古代においては、古代山陰道が当地を通っており、青垣町北部の遠坂峠を境とする但馬地方との交通路の要衝の地でもあったようである。また、近世においては、瀬戸内海側から高瀬船が加古川と葛野川の合流地点に所在する本郷まで遡上り、ここで荷をおろし、陸路日本海側へ運ばれたことが明らかとなっている。そして犬岡遺跡は、この集落とはわずか500ｍしか離れていない距離にある。

このように、犬岡遺跡を考えていく上ではこの「加古川・由良川の道」を必ず考慮に入れなければならないと言えよう。

〔註〕

(1)　佐原　真「大和川と淀川」『古代の日本　近畿』　1967

(2)　種定淳介「加古川と由良川」『横山浩一先生退官記念論文集１　生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会　1989

第２節　歴史的環境

水上盆地には数多くの遺跡が分布するが、今回調査した犬岡遺跡を中心として東西７㎞強×南北12㎞の範囲には、約80の遺跡が知られている。

これらの遺跡のうち、調査が実施されその性格等が明らかになっている遺跡はわずかであるが、ここでは、犬岡遺跡の存続時期の古墳時代までで、調査の行われた遺跡を中心に、犬岡遺跡の周辺の歴史的環境を考えてみたい。

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡としては鴨内遺跡（５）があげられる。鴨内遺跡では、明確な遺構は確認されていないが、縄文時代後期の遺物群が出土している。土器は、桑飼下式の深鉢（磨消縄文・条痕文系）が大半であるが、その中に胎土の精良な一乗寺Ｋ１式・北白川上層式の深鉢があり、近畿中央部から搬入された可能性が指摘されている。また、石皿や礫石錘も出土しており、周辺丘陵部での生活が想定されている。

弥生時代の遺跡は、今回報告する犬岡遺跡（34）の他には、鴨内遺跡・稲畑遺跡（69）が知られているにすぎない。犬岡遺跡は、従前から弥生時代中期から後期にかけての土器が出土しており、詳細は報告に譲るが、住居跡等の遺構は検出されなかったものの、今回の調査でも同時期の土器・木器が多量に出土し、特に、弥生時代後期後半から末の遺物が大半を占めた。稲畑遺跡では、住居跡は検出されなかったが、多量の土器とともに弥生時代中期の溝が検出されており、弥生時代中期の大集落跡の可能性が強い。しかしながら、遺跡は弥生時代後期には継続しない。また、鴨内遺跡の調査では、弥生時代後期の遺物が面的に拡散し、ある程度の集落の存在が想定できる。

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代同様、前述の３遺跡が知られているにすぎない。犬岡遺跡は、弥生時代中期から古墳時代後期前半まで継続する遺跡であるが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭を中心とする遺跡である。一方、稲畑遺跡は、５世紀中葉から後半にかけての時期に始まり、６世紀中葉から後半にそのピークをむかえ、古代まで継続する遺跡である。また、鴨内遺跡は、稲畑遺跡よりは若干おくれ５世紀末頃から始まり６世紀中葉には最盛期をむかえ、稲畑遺跡同様古代まで続く。

調査例は少ないものの、弥生時代から古墳時代の集落遺跡の調査例をみると、集落の営まれ始めた時期やその最盛期に、各遺跡ごとで微妙なずれがあり、当時の生活形態や集団関係を考えるうえで、興味深い事例と言えよう。

また、集落遺跡以外の古墳時代の遺跡としては、多数の古墳が存在する。古墳は、大きく分けて、佐治川上流域、佐治川下流域、葛野川流域、柏原川流域、黒井川流域に各々分布する。調査された古墳は少なく、また、分布する古墳の大半は横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳と推定される。前期古墳としては、長野木戸古墳群（25）、横田山古墳（42）、観王塚北野古墳群（49）に含まれる観王塚古墳、瓜谷山古墳（50）等が知られている。

瓜谷山古墳は、銅鏃・鉄剣・鉄鏃を副葬する箱式石棺をもつ古墳で、石棺内には40歳位の男性人骨が遺存していた。石棺は、長さ1.67ｍ、幅は頭部で36㎝、脚部で28㎝位を測る。横田山古墳も瓜谷山古墳同様箱式石棺をもつ古墳で、長辺12ｍ、短辺７ｍ程度の長方形に区画された墳丘を持っている。棺内には、成人男性骨がきわめて良好な状況で遺存していた。また、棺内に鉄剣、ヤリガンナ、鉄鏃が副葬されていた。

第5図　周辺主要遺跡

第1表　周辺主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	No.	遺跡名	所在地	種別
1	山田ノ上古墳	永上郡永上町栗住野山田ノ上	古墳	38	市道古墳群	永上郡永上町市道	古墳
2	梅ノ木畑古墳	永上郡永上町栗住野梅ノ木畑	古墳	39	野山城砦跡	永上郡春日町野山南場	城跡
3	栗住野城跡	永上郡永上町栗住野下山	城跡	40	野山古墳	永上郡春日町野山南	古墳
4	独楽寺跡	永上郡永上町栗住野下山	寺院跡		大野古墳	永上郡春日町河内氏亀	古墳
5	鴨内遺跡	永上郡永上町鴨内	集落跡	41	山田大山古墳	永上郡春日町山田大山	古墳
6	鴨内２号墳	永上郡永上町鴨内	古墳		山田井上古墳	永上郡春日町山田大山	古墳
7	伊佐口古墳	永上郡永上町伊佐口東山	古墳	42	横田山古墳	永上郡永上町横田	古墳
8	東山古墳	永上郡永上町伊佐口東山	古墳	43	石生古墳群	永上郡永上町石生	古墳
9	香良古墳	永上郡永上町香良円勝寺下	古墳	44	石生遺跡	永上郡永上町石生	集落跡
10	新堀古墳	永上郡永上町津中新堀	古墳	45	坂古墳群	永上郡春日町坂北カリ尾	古墳
11	今寺古墳	永上郡永上町津中今寺	古墳	46	歌道谷古墳	永上郡春日町歌道谷北の木	古墳
12	津中古墳群	永上郡永上町津中新堀	古墳	47	歌道寺跡	永上郡春日町歌道谷道立	寺院跡
13	鍋山古墳群	永上郡永上町鍋山北地	古墳	48	歌道寺跡	永上郡春日町歌道谷西墓市	寺院跡
14	南田井古墳群	永上郡永上町加茂南田井	古墳	49	親王塚北野古墳群	永上郡永上町北野	古墳
15	桃数古墳群	永上郡永上町桃数	古墳	50	瓜谷山古墳	永上郡永上町石生	古墳
16	北油良古墳群	永上郡永上町北油良魂ヶ谷他	古墳	51	新郷古墳群Ａ支群	永上郡永上町新郷赤井野	古墳
17	上新庄古墳	永上郡永上町上新庄ニシヤマ	古墳	52	新郷古墳群Ｂ支群	永上郡永上町新郷赤井野	古墳
18	下新庄古墳群	永上郡永上町下新庄妙法寺他	古墳	53	新郷古墳群Ｃ支群	永上郡永上町新郷赤井野	古墳
19	雷楽古墳群	永上郡永上町雷楽	古墳	54	新郷古墳群Ｄ支群	永上郡永上町新郷赤井野	古墳
20	北油良古墳群	永上郡永上町南油良	古墳	55	母呼城跡	永上郡柏原町母呼東山	城跡
21	牛河内足立古墳	永上郡春日町牛河内下地	古墳	56	後谷城跡	永上郡永上町谷村後谷	城跡
22	牛河内下地古墳	永上郡春日町牛河内下地	古墳	57	谷村古墳群	永上郡永上町谷村西野久能	古墳
23	牛河内窯跡	永上郡春日町牛河内明谷	窯跡	58	油利百塚古墳群Ａ支群	永上郡永上町油利小原	古墳
24	白田廃寺古墳	永上郡春日町山田寺山	古墳	59	油利百塚古墳群Ｂ支群	永上郡永上町油利西山・北山	古墳
25	長野木戸古墳群	永上郡永上町長野木戸	古墳	60	下油利古墳群	永上郡永上町下油利カイダチ	古墳
26	柿柴古墳群	永上郡永上町柿柴	古墳	61	朝堀古墳群	永上郡永上町朝堀寺山	古墳
27	天王石原古墳群	永上郡春日町長王石原	古墳	62	小野北古墳群	永上郡永上町朝堀小野	古墳
28	宝珊幢寺跡	永上郡春日町長王石原	寺院跡	63	笹野古墳群Ａ支群	永上郡永上町笹野宮裏他	古墳
29	天王澤古墳	永上郡春日町長王澤	古墳	64	笹野古墳群Ｂ支群	永上郡永上町笹野宮裏他	古墳
	天王澤奥古墳	永上郡春日町長王澤	古墳	65	朝堀古墳	永上郡永上町朝堀辺田	古墳
	天王古墳	永上郡春日町長王塚の越	古墳	66	福岡古墳群	永上郡永上町福岡	古墳
	天王脇薬古墳群	永上郡春日町長王奥山	古墳	67	脇畑古墳群	永上郡永上町福畑岡田	古墳
	天王中ノ口古墳	永上郡春日町長王中の口	古墳	68	高見山城跡	永上郡永上町高見	城跡
	天王脇荷古墳	永上郡春日町長王中の口	古墳	69	脇畑遺跡	永上郡永上町福畑	集落跡
	鼻見古墳群	永上郡春日町長見脇荷山	古墳	70	七ツ塚古墳群	永上郡柏原町大新屋今谷奥	古墳
30	長見窯跡	永上郡春日町長見脇荷山	窯跡	71	山根古墳群	永上郡柏原町大新屋山根	古墳
31	長野古墳群	永上郡永上町長野	古墳	72	池上古墳群	永上郡柏原町大新屋	古墳
32	上成松古墳群	永上郡永上町上成松	古墳	73	大新屋古墳	永上郡柏原町大新屋	古墳
33	黒田古墳群	永上郡永上町黒田	古墳	74	神田古墳群	永上郡柏原町下町神田	古墳
34	大岡遺跡	永上郡永上町大岡	集落跡	75	三原古墳群	永上郡柏原町北中三原	古墳
35	明治山山頂古墳	永上郡永上町大岡	古墳	76	南多田古墳群	永上郡柏原町南多田	古墳
36	寺辺遺跡	永上郡永上町市辺	散布地	77	久原４号墳	永上郡柏原町久原	古墳
37	横田遺跡	永上郡永上町横田	散布地	78	石田大歳神社古墳	永上郡柏原町石田	古墳

この他、人骨を埋葬した箱式石棺を持つ古墳としては、大岡遺跡の北東の独立丘陵上に位置する古墳時代前半の造営と推測される明治山山頂古墳（35）があげられる。この古墳は、1969年に丘陵頂上部を三角点設置のために掘削を行った際発見され、応急の調査の後埋戻されたが、墳丘と考えられる封土は全く認められなかった。箱式石棺は、長さ1.75m、幅は頭部で50cm、脚部で32cmを測る。石棺は、深さ85cmの墓壙を掘って構築され、蓋石６、７枚を重ねるようにして置き、周辺は割石で覆われていた。石棺内からは、ヤリガンアナの副葬とともに、頭骨、大腿骨、下肢骨の遺存が確認されており、歯の特徴から青年ないしは壮年期の女性の可能性が強いことが指摘されている。大岡遺跡との位置関係及び存続期間の重なりなどを考えあわせると、同一集団の集落跡と墳墓の可能性もあり、古墳の立地としては注目すべきものであろう。

また、前期古墳の中には、1991年５月に土地所有者によって墳丘の大分部が削平されてしまった親王塚古墳がある。この古墳は竪穴式石室を持つ円墳で、２段に築成の墳丘は径約42m、高さ約7.5mを測る。出土遺物には、大阪府紫金山古墳・奈良県新山古墳・山口県長光寺山古墳の出土鏡と同型鏡とされている三角縁三神三獣鏡が含まれている。その築造場所が、瀬戸内海に注ぐ加古川の上流にあたる佐治川と、日本海に流れる由良川上流域の黒井川の分水嶺付近に位置し、主要な交通路として古くから重要な地点であったことを考え併せると、この地域の盟主墳と考えられる。

長野木戸古墳群は調査の行われた数少ない古墳群で、1988－89年にかけての調査で、18基の古墳と２基の箱式石棺墓が調査された。古墳は、径10－15mの円墳及び長さ12－15mの方墳が中心であるが、１号墳は径18mの円墳で長さ6.5mの造出を持ち、13号墳には弧状溝と外護列石が巡っていた。主体部は箱式石棺が主であるが、刳竹形木棺や組合式木棺もある。出土遺物には、玉類をはじめ100点余りの鉄製品がある。築造時期は、古墳時代前期中頃から後期前半頃と想定される。

古墳時代の遺跡の調査例は少ないが、今後の調査の進展に伴い、大岡遺跡と明治山山頂古墳との関係のように、生活の場としての集落跡と墳墓としての古墳との関係を考え得る例も増加し、より鮮明に当時の状況が解明されることであろう。

なお、奈良・平安時代以降の遺跡は、寺院跡と推定される極楽寺跡（４）・宝珊廃寺跡（28）・慶徳寺跡（47）・歌道寺跡（48）や官衙遺跡の可能性のある鴨内遺跡・市辺遺跡（30）・稲畑遺跡、集落遺跡と考えられる横田遺跡（37）・石生遺跡（44）、生産遺跡である牛河内窯跡（23）などが知られているが、古墳と比べるときわめて少なく、また、調査例もほ場整備事業に伴うものが少数あるだけで、詳細は不明である。しかしながら、律令期の『和名抄』に見える丹波国氷上郡内の郷名17郷のうち、石負・伊中・賀茂・氷上・石前・葛野・沼貫の７郷が現在の氷上町域に含まれる。氷上郡全体の郷数は、全国１郡内郷数平均の約2.6倍で、古代以来人口が多かったことが注目されるが、これらの集落の存在を考古学的資料によって立証することも今後の課題と言えよう。

今後、北近畿豊岡自動車道の建設に伴い市辺遺跡や横田遺跡、石生遺跡の調査が行われる予定であるので、その成果によって、大岡遺跡を含むこの地域の歴史がより明らかになることを期待する。

第２章　調査に至る経緯

第１節　発掘調査の経緯

１．第１次調査

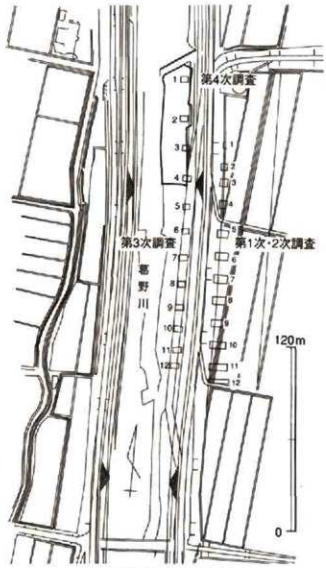
氷上盆地を南流して流れる佐治川は氷上町本郷で葛野川と合流する。佐治川と葛野川に挟まれた部分が犬岡で、北側に独立丘陵である明治山が位置し、U字形に河川が合流する閉塞した地形となっている。合流地点から葛野川にかけて広く遺物が散布することは、地元ではよく知られていた。地元研究者によって多量の遺物が採集されていた。大水が出ることによって遺物が地表に顔を覗かせていたようである。

この地域に河川改修計画が策定され、順次下流部から工事が実施されることとなり、昭和47年度から工事が着手された。工事中に地元高校生により遺物が採集され、広く遺跡として認識されることになった。その一部については経過とともに山本三郎氏によって紹介されている。

さらに工事は上流部に向かって計画されていることから、兵庫県教育委員会文化財保護課と兵庫県柏原土木事務所の間で再三協議を重ねてきた。河川改修事業の性格から、遺跡を保護することは困難であると判断され、今後は事業に先立ち確認調査を実施することとなった。

昭和52年度に、次年度以降に計画されている犬岡の集落の西方の河川改修部分についての確認調査を実施することとなった。延長約180ｍの工事区間を対象として確認調査を行った。調査は水位の最も下がる冬季に実施した。昭和53年１月23日から２月９日までの実働12日間氷上郡教育委員会の協力を得て調査を実施した。

調査地の地目は水田で、葛野川の現河



第６図　調　査　位　置

道の堤防の外側（東側）にあたる。現葛野川の河床で包含層が確認されているレベルを勘案すると地表面から深いことが予想されたので、安全面や調査効率からも重機を使用して確認調査を行うこととした。また、犬岡の水田は昭和初期の土地改良によって旧地形を残していないことからも重機を使用した。調査区は180×14mの三角形を呈していることから、位置によりトレンチの長さは異なっている。基本的には、10m間隔に幅5mのトレンチを計12箇所設定して調査を行った。

その結果、疎密な包含層は全地点で確認されたが、濃密な包含層はNo.3からNo.6トレンチの約60mの間に広がっていることが明らかとなった。性格の明らかな遺構が検出されなかったことから、部分的に調査区を拡張した。調査終了時の現場での打合せでは、それ以外の地点および現堤防下についても調査方法はともかく調査が必要なことを伝えた。しかし、本体工事が数年間行われなかったことから、引き継ぎがなくなり、当該部分については未調査となっている。行政間の連絡ミスであるが、惜しまれる。そのため、便宜的に一部拡張した部分を第2次調査とする。

2．第2次調査（昭和52年度）

No.4～No.6トレンチの間で里道を除く部分について、全面調査を実施した。当面工事に必要な部分と現在使用されている里道の下を調査するためには、周辺部の調査が必要なことから、道周辺の余剰帯を除いて調査を行った。包含層直上まで重機によって除去した。積雪や凍結に悩まされつつも小面積の調査を実施した。

第1次・2次調査の調査組織は以下の通りである。

調査組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	社会教育・文化財課	課　長	水野　俊一
		副課長	田中　幹雄
		課長補佐兼管理係長	久保田幸雄
		事務職員	堀　　洋
		事務職員	山崎　桂子
		埋蔵文化財係長	是川　　長
		主　　査	村上　紘揚
		主　　任	松下　　勝
		技術職員	井守　徳男
調査担当	社会教育・文化財課	技術職員	池田　正男
		技術職員	渡辺　　昇

3．第3次調査

昭和62年度に実施した。葛野川左岸堤防沿いの河川敷部分を対象とした確認調査である。第2次調査を実施した地点を参考に、2×4mのトレンチを計12箇所（No.1－No.12トレンチ）に設定し、調査を

実施した。

調査の結果、どのトレンチにおいても明確な遺構を確認することはできなかった。しかし、No.2トレンチにおいて多量の土器の出土を確認した。また、No.3トレンチにおいても土器の出土を確認した。両トレンチにおいて土器が出土した層は、いずれも黒灰色シルトを中心とする層である。このため、土器が出土しなかったNo.1・4トレンチにおいても同様な層が認められ、土器が包含されている可能性も考えられることから、No.1トレンチからNo.4トレンチの範囲に土器を包含する層が広がっているものと推定された。

調査体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課
調査担当　吉識　雅仁・山田　清朝
調査補助員　西本　寿子・上田　英則

4．第4次調査

昭和63年度に実施した。第3次調査において推定できた土器を包含する層あるいはそれとほぼ同じと考えられる層が広がる範囲について全面調査を実施することとなった。

調査体制は以下の通りである。

調査主体　兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課
調査担当　長谷川　真・山田　清朝
調査補助員　西本　寿子・上田　英則
室内作業員　石川　信枝・松山　真理

第２節　整理作業の経緯

第３次・第４次調査出土遺物を中心に、平成２年度および平成５年度と６年度の３年度にわたり実施した。平成２年度においては、出土土器の接合作業を実施した。平成５年度においては、木製品の実測、土器の実測・復元、遺物写真撮影を実施した。そして平成６年度には、土器実測図・遺構図のトレース・レイアウト・編集作業を行い、刊行へと至った。また、これと平行して木製品の保存処理も実施した。

各年度の整理体制は以下の通りである。

平成２年度

整理主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
事務担当	整理普及課	課　長	松下　勝
整理担当	整理普及課	主　任	岸本　一宏
		嘱託員	茉木恵美子・香川フジ子・水谷　幸子・前田千栄子・西野　淳子
			杉本　淳子
保存担当	整理普及課	主　任	別府　洋二

平成５年度

整理主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
事務担当	整理普及課	課　長	小川　良太
整理担当	整理普及課	主　任	山下　史朗
		嘱託員	岡崎　暉子・杉本　淳子・真田美恵子・中山　春子
保存担当	整理普及課	主　任	村上　賢治

平成６年度

整理主体	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
事務担当	整理普及班	班　長	山本　三郎
		主　査	吉識　雅仁
整理担当	整理普及班	主　任	中川　浄
		嘱託員	岡崎　暉子
保存担当	整理普及班	主　任	藤田　淳

第３章　第１次・２次調査の結果

第１節　調査の経過と調査組織

前記の調査経緯で記したように、第１次・２次調査は昭和52年度に実施した。兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県柏原土木事務所と委託契約を結んで調査を行った。当初から水位の下がる冬季に調査を実施するよう協議がなされていたことから、１月の厳寒期に調査を開始した。

第２節　調査結果

検出された遺構は少ない。杭列・木組が数地点で確認されたにとどまる。杭列はNo.５・６トレンチの１個所で、木組はNo.６トレンチで確認された。No.５トレンチの杭列は２列になっており、９本確認している。面取りを施した加工木を主に使用している。水田に伴う畦畔の可能性が高い遺構と思われる。No.６トレンチの杭列は自然木を使ったもので２本検出している。間隔も1.8ｍと開いている。

木組は、自然木を半裁したものと角材の両者を使って井桁状に組んでいる。シルト質の中に組んでいることから、基礎のようなものかもしれない。

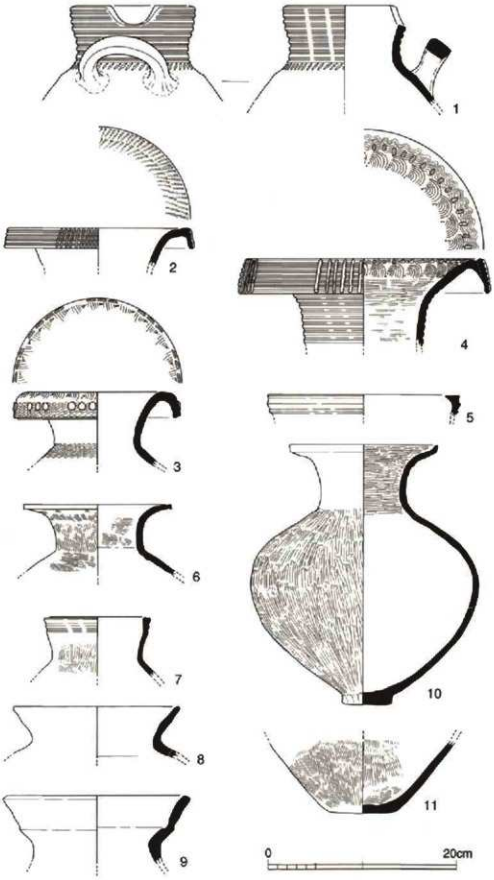
それ以外の遺構は土層断面で時期不明の小畦畔を確認している。

堆積土は、葛野川の氾濫による砂礫層とシルト層から成っている。下層はシルト層ばかりである。遺物は包含層である黒褐色シルトから出土している。No.５トレンチでは古墳時代初頭の土師器が集中して出土している。遺物の集中はあるものの、層序的な堆積は認められなかった。大きく時期的に分層は出来るものの細かい堆積はしていないようである。すなわち、古墳時代前期と後期にそれぞれ堆積したのではないかと思われる。

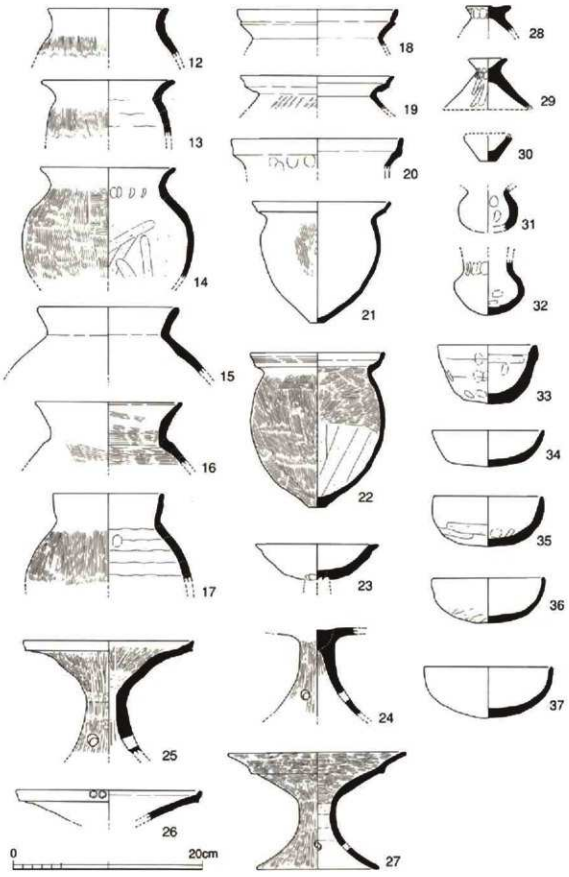
上層の砂礫土から奈良～平安時代の遺物が少量出土しているが、磨滅が著しく２次堆積と思われ、遺構は認められなかった。

第３節　出土遺物

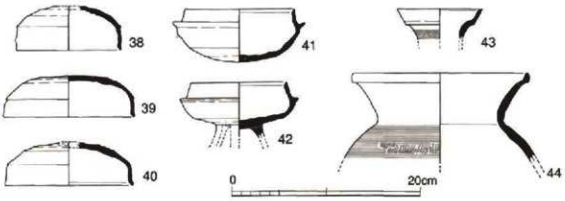
遺物の総量はコンテナ30箱余りである。弥生時代中期から平安時代までの遺物がみられる。最も多いのは古墳時代前期の土師器で、次いで古墳時代後期の須恵器が多く出土している。弥生土器は中期のものは播磨の影響を強く受けている。加古川流域であることから当然かもしれないが、扇形文・波状文・突帯文で飾られた壺も出土している。後期以降の土器は山陰の影響を受けているのは、周辺遺跡と同様である。



第7図　第1・2次調査出土土器 (1)



第8図　第1・2次調査出土土器（2）



第9図　第1・2次調査出土土器（3）

第４章　　第３次・第４次調査の結果

第１節　第３次調査の結果

計12箇所のトレンチ調査の結果、No.２トレンチにおいて多量の土器の出土を確認した。このトレンチは、現河床をなす礫層以下が黒灰色シルト層となっており、この層を中心に土器が出土した。また、当トレンチの北と南に掘削したNo.１トレンチ及びNo.４トレンチにおいても、No.２トレンチと同様の黒灰色シルト層が認められた。

以上の結果をもとに、遺物包含層と埋解した黒灰色シルト層の広がりが認められたNo.１トレンチからNo.４トレンチの範囲について全面調査をすることとなった。なお、この確認調査においては、明確な遺構は確認されなかった。むしろ、これらの地区は、湿地性の堆積層と考えられる黒灰色シルト層が広がることから、大岡遺跡の縁辺部にあたる後背湿地に近い立地条件のもとにあるものと考えた。そして、この層から出土した多量の土器については、当地に一括廃棄されたものと考えた。

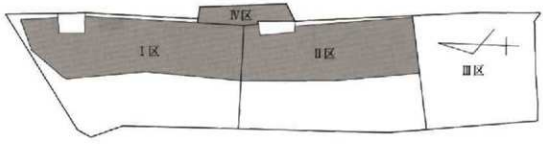
第２節　第４次調査の結果

１．調査の方法

調査地は、葛野川の河川敷であり、一部は現河川も含まれる。また、調査時期が３月と、融雪による増水期と重なる。このように、調査地は絶えず水没する危険のある状態にあるため、堤防側を除く周囲に鋼矢板を打ち込み、調査条件の確保を図った。

鋼矢板打設後、重機により河床をなす礫層および遺物を包含する層の直上まで掘削していった。

機械掘削後、調査地はⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区の３地区に分割（第10図）し、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区の順に調査を進めていった。また、各地区間にはセクションを設定し、土層の観察を行った。さらにこれら３地区の調査終了後、土器が多量に出土した地点を中心に、安全確保のため掘削を行わなかった法面部分（Ⅳ区）についても調査を追加した。



第10図　調査区内地区割図

2．調査の結果

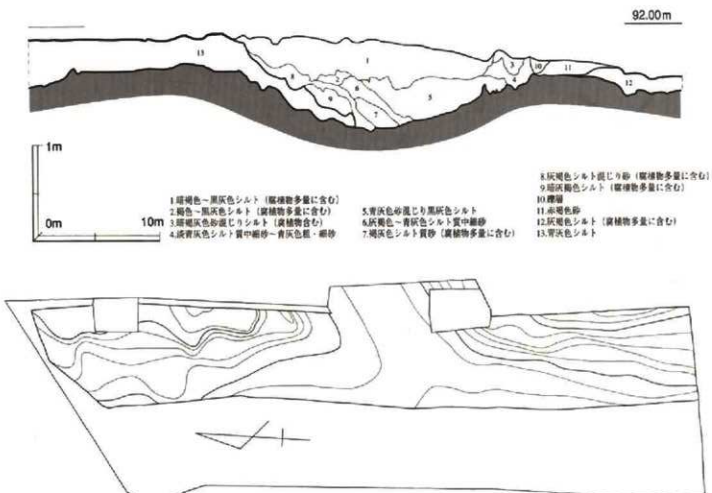
(1) 基本層序と遺構

先述した通りⅠ区からⅡ区の順に調査を行っていったのであるが、機械掘削終了後、調査区東側壁面の土層を観察したところ、確認調査で確認した遺物を包含する黒灰色シルト層は、全面調査範囲の各確認トレンチに共通する層ではなく、調査区全面には広がらないことが明らかとなった。

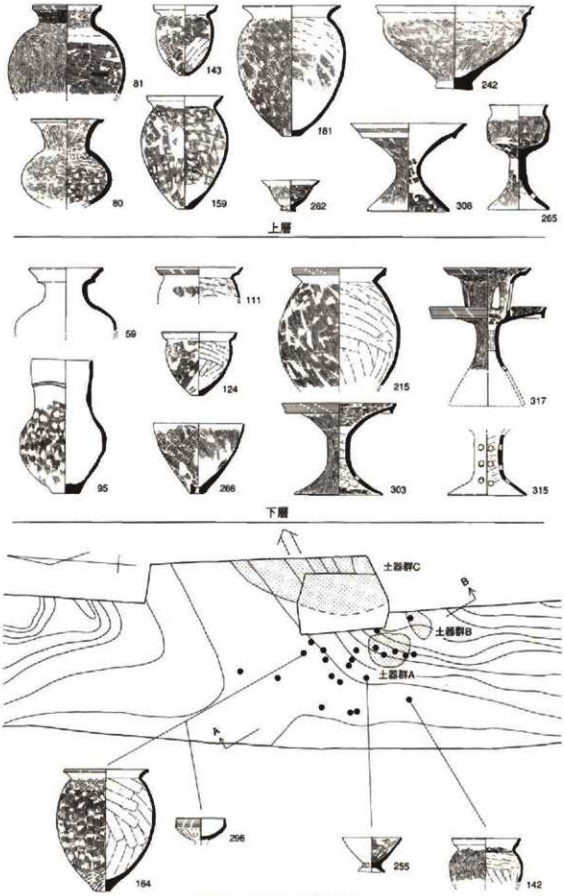
調査の結果、遺物を多量に包含する黒灰色シルト層は、Ⅰ区とⅡ区にまたがる範囲に限られ、東北から南西方向にのびる溝状遺構ないしは旧河道の埋土であることが明らかとなった。そして、Ⅰ区とⅢ区で認められた黒灰色シルト層は、この溝状遺構の基盤層となる青灰色シルト層と同一層あるいはその下層にあたる層であることが明らかとなった。

以上の状況から、調査の対象となったのは、Ⅰ区とⅡ区の境を中心とした範囲である。Ⅲ区については、以上のことが明らかとなった時点で調査を終了させた。

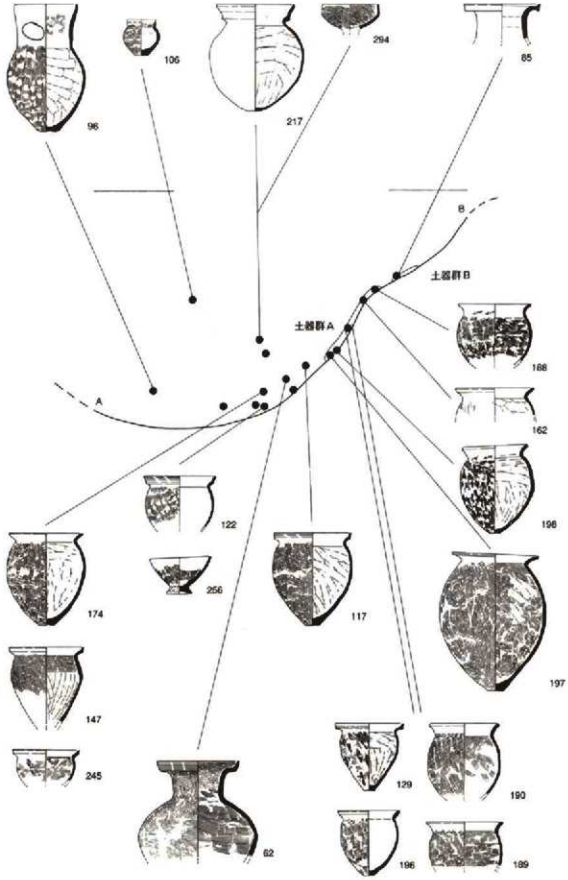
また、調査区内の土層は、湿地性堆積物であり、かつ浸水が激しい状況にあったため、平面的に溝状のプランを確認することはできなかった。さらに、遺物を包含する黒色シルト層と同質のシルト層が何層にも重なっていたため、明確に埋土を識別して調査することができなかった。このため、調査が終了した段階で溝状の遺構であることに初めて気付いた状態である。したがって、遺構の正確な断面図等の記録もできなかった。


92.00m
1m
0m
10m
1.暗褐色～黒灰色シルト（腐植物多量に含む）
2.褐色～黒灰色シルト（腐植物多量に含む）
3.暗褐灰色砂混じりシルト（腐植物含む）
4.淡青灰色シルト質中細砂～青灰色粗・細砂
5.青灰色砂混じり黒灰色シルト
6.灰褐色～青灰色シルト質中細砂
7.褐灰色シルト質砂（腐植物多量に含む）
8.灰褐色シルト混じり砂（腐植物多量に含む）
9.暗灰褐色シルト（腐植物多量に含む）
10.腐植
11.赤褐色砂
12.灰褐色シルト（腐植物多量に含む）
13.青灰色シルト

第11図　平面図・断面図



第12図　土器出土位置（1）



第13図　土器出土位置 (2)

(2) 遺物の出土状況

遺物は、溝状遺構に一括廃棄された状態で出土している。ただし、先述したように、層位的にみて少なくとも3層に分かれることと、土器の形式自体に年代幅をもつことから、何度かにわたって廃棄されたものと考えられる。ただし、遺物の取上げに際しては、層位的にとりあげていったが、遺構内の堆積が複雑であるため、明確に土器を分けることはできなかった。したがって、以下報告していくにあたっては、出土した土器を一括して扱っていくことにする。

(3) 出土遺物

出土遺物は、大きく土器と木製品そして土製品とに分けられる。ただし、量的には土器が大多数を占める。以下、土器を中心に報告していく。

Ⅰ. 土　　器

形式的にみて、弥生時代中期と弥生時代後期、そして須恵器を伴う古墳時代の3時期に大きく分けられる。これらのなかで弥生時代後期の土器が圧倒的多数を占める。そこで、弥生時代中期と古墳時代の土器については、個々に報告していくことにするが、弥生時代後期の土器については、先に分類をおこない、各分類ごとに報告していくことにする。また、弥生後期の土器については、多くの時期幅を内包するようであるが、詳しいことについては第6章第1節で検討することにし、本章では一括して扱うことにする。

A. 弥生時代中期の土器

壺・甕・高坏が出土している。

壺　45の無頸壺、46・47の広口壺、48・49の底部が出土している。

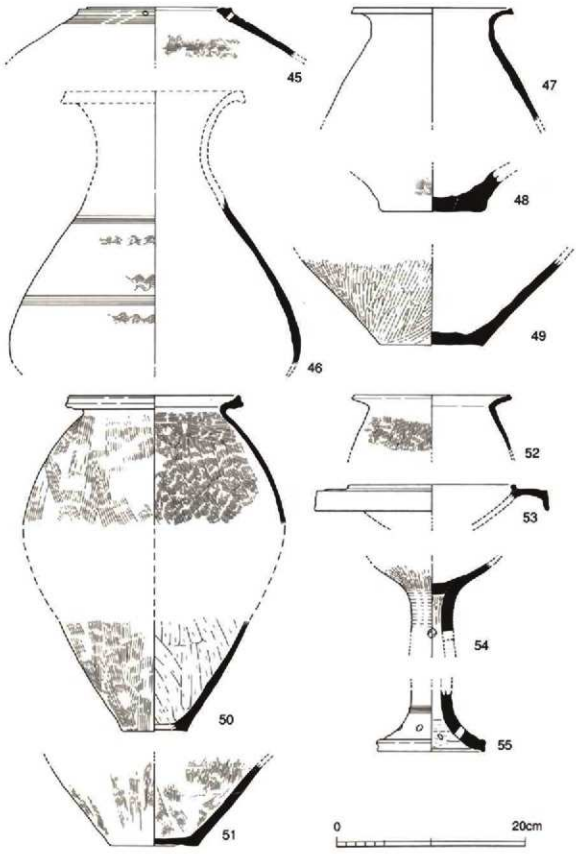
45は、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げ、外面には凹線を施している。体部外面はナデ調整により、内面はハケ調整により仕上げられている。46は、体部中位から肩部にかけて残存する。外面には櫛描直線紋2帯と櫛描波状紋3帯が施されている。47は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。器表面の残存状況はよくないが、肩部に櫛描波状紋の痕跡がわずかに認められる。48は、ナデと指押さえにより仕上げられている。49は、外面をヘラミガキにより、内面をハケおよびナデ調整により仕上げている。

甕　50・51の大型甕、52の小型甕が出土している。

50は体部中位を欠くが、1個体の土器である。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。体部上半は内外面ともハケ調整により仕上げられている。体部下半は外面をハケ調整により、内面を下から上方向のヘラ削りにより仕上げられている。51は内外面ともハケ調整により仕上げられている。

高坏　53の坏部と、54・55の脚部が出土している。

54の脚部外面には擬凹線が認められる。残存する坏部外面にはヘラ描きが施されている。



第14図　中期の土器

B．弥生後期の土器

出土器種

壺・甕・鉢・椀・高坏・器台・蓋の各器種が出土している。

土器の分類

分類にあたっては、器種ごとに分類し、各形式ごとに細分類していくことにする。細分類にあたっては、形態的特徴または技法的特徴あるいは両者を基準とした。法量についても、その都度考慮に入れていくことにした。

壺：主に形態的特徴を中心に分類する。

〔壺A〕いわゆる二重口縁壺。口縁部と頸部の形態から細分する。

A１：二次口縁が大きく外反するもの。また頸部が大きく外反する。

A２：二次口縁が直線的で直立あるいは内傾するもの。頸部は短く外反する。

A３：二次口縁が短く立ち上がるもの。頸部は直立する。

〔壺B〕いわゆる広口壺。口縁部の形態を中心に細分する。

B１：口縁端部を上下に拡張するもの。

B２：外反する口縁部の端部をわずかに上方に拡張するもの。

B３：直立する頸部に外反する口縁部がつき、端部を上下方向にわずかに拡張するもの。

〔壺C〕いわゆる直口壺。

〔壺D〕いわゆる短頸壺。

D１：口縁部が「く」字形を呈するもの。

D２：頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部を斜上方につまみ出すもの。

D３：いわゆる短頸直口壺に分類されるもの。

〔壺E〕いわゆる長頸壺。

E１：体部に対して頸部が短いもの。

E２：壺E１に対して頸部が直線的で長いもの。

〔壺F〕いわゆる細頸壺。

〔壺G〕無頸壺に脚がつくもの。口頸部における擬凹線の有無により細分する。

G１：擬凹線を施すもの。

G２：擬凹線を施さないもの。

〔壺H〕小型丸底壺である。典型的なものとその類型とに細分する。

H１：王墓形の体部に直線的な口縁部がつくもの。

H２：祖形と考えられるもの。

〔壺I〕ミニチュア壺。

第2表　壺形土器の分類 (1)

壺 A	A1		壺 C		
	A2		壺 D	D1	
	A3			D2	
壺 B	B1			D3	
	B2		壺 E	E1	
	B3			E2	

第３表　壺形土器の分類（2）

壺F		98	壺I		106
壺G	G1	103	壺H	H1	101
	G2	105		H2	100

甕　形態的特徴と体部内面の調整法の組合せを基準に分類する。

〔甕A〕複合口縁を有する甕で、いわゆる「月後型」甕を基本形態とするもの。

Ａ１：二次口縁外面に擬凹線を施し、体部内面をヘラ削りにより仕上げるもの。

Ａ２：二次口縁外面に擬凹線を施し、体部内面をハケ調整により仕上げるもの。

Ａ３：二次口縁外面に擬凹線を施し、体部内面をナデ調整により仕上げるもの。

Ａ４：二次口縁をナデ調整、体部内面をヘラ削り調整により仕上げるもの。

Ａ５：二次口縁をナデ調整、体部内面をヘラ削り後ハケ調整により仕上げるもの。

Ａ６：二次口縁をナデ調整、体部内面をハケ調整により仕上げるもの。

Ａ７：二次口縁をナデ調整、体部内面をナデ調整により仕上げるもの。

〔甕B〕甕Aと甕Cの中間形態をなすもの。

Ｂ１：口頸部が外反傾向にあるもの。

Ｂ２：口頸部が直立傾向にあるもの。

〔甕C〕「く」字形口縁を基本形態とするもの。いわゆるＶ様式甕を基本形態とするもの。

Ｃ１：典型的な「く」字形口縁をなすもので、内面をヘラ削りにより仕上げるもの。

Ｃ２：Ｃ１と同タイプで、内面をナデとハケ調整で仕上げ、ヘラ削り痕が認められないもの。

Ｃ３：端部をつまみ上げるか、つまみ上げを意識したナデを施すもの。内面にヘラ削りを施す。

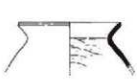
Ｃ４：Ｃ３と同タイプで、内面をハケとナデ調整で仕上げ、ヘラ削り痕が認められないもの。

Ｃ５：甕Ｃ３と同じ特徴を有するもので大型のもの。

第4表　甕形土器の分類（1）

甕 A	A1	117	甕 A	A7	154
	A2	121	甕 B	B1	160
	A3	122		B2	161
	A4	132	甕 C	C1	181
	A5	145		C2	188
	A6	159		C3	197

第5表　壺形土器の分類 (2)

甕	C4		甕D	D2	
	C5		底部	A	
	C6			B	
	C7			C	
甕D	D1				

C６：口縁部がわずかに受口状を呈するか、それを意識したナデ調整により仕上げるもの。

C７：口縁端部を拡張し端面を形成し、端面に擬凹線を施すもの。内面をハケ調整により仕上げる。

［甕D］いわゆる山陰系の甕。

D１：搬入されたもの、あるいはその可能性が高いもの。

D２：D１を形態的に模倣したもの。

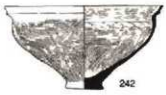
底部　甕の底部を、形態的特徴をもとに分類する。

〔底部A〕わずかに平底を呈するもの。

〔底部B〕明確な平底を呈するもの。

〔底部C〕丸底に近い形態をなすもの。

第6表　鉢形土器の分類

鉢 A	A1	 242	鉢 E	263
	A2	243	鉢 F	264
鉢 B		245	鉢 G	265
鉢 C		251	鉢 H	270
鉢 D		254		

鉢　形態的特徴と法量を中心に分類する。

〔鉢A〕複合口縁を有する鉢。

Ａ１：大型のもの。

Ａ２：小型のもの。

〔鉢B〕いわゆる小型丸底鉢

〔鉢C〕口縁部が直口する小型の鉢。

〔鉢D〕台付のもの。

〔鉢E〕台付の球形の体部に、「く」字形に屈曲する口縁部がつくもの。

〔鉢F〕浅い体部に短い脚が付くもの。

〔鉢G〕「く」字形に屈曲する口縁部を有する体部に長い脚が付くもの。

〔鉢H〕砲弾形をなし、尖底ないし平底の底部を穿孔するもの。

第７表　椀形土器の分類

椀	A	276	椀	B	277

椀　形態的特徴と技法的特徴をもとに分類する。

〔椀A〕坏形態に近いもの。外面をヘラミガキにより仕上げる。

〔椀B〕口径に対して深い傾向にあるもの。外面をハケ調整により仕上げる。

高坏　形態的特徴・技法的特徴・法量的特徴をもとに分類する。

〔高坏A〕複合口縁を有するもの。

Ａ１：二次口縁外面に擬凹線を施すもの。

Ａ２：二次口縁外面をナデ調整により仕上げるもの。

Ａ３：わずかに複合口縁をなすもの。

〔高坏B〕体部が坏形のもの。

Ｂ１：口縁部が短く外反気味に立ち上がるもの。

Ｂ２：口縁部がＢ１に比べて長く、外反気味に立ち上がるもの。

Ｂ３：口縁部が浅く、小型のもの。

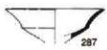
〔高坏C〕坏部が椀形のもの。

Ｃ１：典型的な椀形のもの。

Ｃ２：口縁部を外側に屈曲させるもの。

Ｃ３：小型で、精良な胎土のもの。

第8表　高坏形土器の分類

高坏A	A1	279	高坏B	B3	286
	A2	278	高坏C	C1	289
	A3	280		C2	292
高坏B	B1	284		C3	293
	B2	 287			

第９表　器台形土器の分類

器台A	A1		器台D	
	A2		器台E	
器台B			器台F	
器台C				

器台　主に形態的特徴をもとに分類する。

〔器台A〕複合口縁を有するもの。

　Ａ１：口縁端部を上下に拡張し、外面に擬凹線を施すもの。

　Ａ２：端部を大きく外反させ二次口縁をなすもの。

〔器台B〕体部が「く」字形に屈曲し、複合口縁をもたないもの。

〔器台C〕器台Bに対して体部が屈曲せず、外反するもの。

〔器台D〕体部が筒形をなすもの。

〔器台E〕いわゆる装飾器台。

〔器台F〕いわゆる小型器台。

第10表　蓋形土器の分類

蓋 A	A1	322	蓋 B	326
	A2	327		

蓋　形態的特徴をもとに分類する。

〔蓋A〕天井部が短く、体部が直線的にひらくもの。

　A1：大型のもの。

　A2：小型のもの。

〔蓋B〕天井部が長いもの。

土器の説明

a．壺

〔壺A〕

A1は、56・57・59・60の4個体である。60を除く3個体は、口頸部を内外面ともナデ調整により仕上げている。これに対して60は、口縁部外面は横方向のナデ調整により仕上げられているが、内面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。また、頸部は外面を縦方向のハケ調整の後横方向のヘラミガキにより、内面を横方向のハケ調整により仕上げられている。この他、二次口縁外面は強い横ナデ調整の結果、擬凹線状になっている。

56と59は口縁端部を強い横方向のナデ調整を施すことによって端面をなす。これに対して、57・60は丸く収められている。

A2は、58と61の2個体である。2個体とも口縁部内外面を横方向のナデ調整により仕上げ、端部を丸く収めている。しかし、細部において両者は異なる。

58は二次口縁が大きく内傾する。そして、頸部を指押さえにより整形している。一方、61は二次口縁がほぼ直立気味である。頸部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。また、体部は内面を横方向のヘラ削りにより、外面は左上がり方向から縦方向の後横方向のハケ調整により仕上げられている。

A3は、62～67の6個体である。本型式については、62・63のように直立する頸部に複合口縁が水平に取りつく大型のもの（壺A3a）、64～66のように壺A3aに対して小型のもの（壺A3b）、67のよ

うに外傾する頸部に複合口縁がつくもの（Ａ３ｃ）の３タイプに細分できる。

Ａ３ａは、大きくつまみあげるようなナデ調整により二次口縁を作り出している。二次口縁外面に擬凹線を施す。以下の外面は丁寧なヘラミガキが施されている。体部中位付近は横方向であるが、他は縦方向が主体である。内面は、口縁部を横方向のヘラミガキにより、体部を横方向のハケ調整により仕上げられている。

Ａ３ｂは、強いナデにより複合口縁を作り出している。口縁部外面に擬凹線を施すもの（64・65）と施さないもの（66）とに分類できる。64は、口頸部内面をナデ調整により仕上げる。外面は、頸部以下を縦方向のハケ調整により仕上げる。65は、頸部外面を叩き整形の後縦方向のハケ調整により、内面を横方向のヘラミガキにより仕上げられている。これに対して66は、頸部内面をナデ調整及び外面を縦方向のハケ調整後、内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。さらに、部分的ではあるが、口縁部内外面にも横方向のヘラミガキが施されている。

Ａ３ｃも、強い横方向のナデ調整により複合口縁を作り出している。67は、頸部内面も横方向のハケ調整により仕上げられている。

〔壺Ｂ〕

Ｂ１は、68～73の６個体である。外反する頸部に口縁部が取りつくもの（Ｂ１ａ）と、直立する頸部に口縁部が水平方向に取りつくもの（Ｂ１ｂ）とに細分できる。

Ｂ１ａは69の１個体である。口縁部内面を横方向の、頸部から体部外面を縦方向のヘラミガキにより仕上げている。

Ｂ１ｂは68・71－73の４個体である。口縁部の形態に個体差が認められる。68・71・73は上下方向に等しく拡張しているのに対して、72は上方を主体に拡張している。さらに71は端面に波状紋を施しているのに対して、73は無紋である。一方72の端部には波状紋が施されている。また調整方法については、４個体とも体部内面はハケ調整、外面はヘラミガキにより仕上げている。しかし、口頸部の調整方法を見ると、68・71・73が内面を横方向、外面を縦方向のヘラミガキで仕上げられているのに対して、72は内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。したがって、Ｂ１ｂをより細分するならば、68・71・73と72に分類が可能である。72の頸部下端部に刻目突帯を貼り付けている点も、68・71・73とは異なる。74についても、口縁部が残存しないため明確にできないが、頸部から体部にかけての形態的特徴から当タイプに分類されるものと考えられる。また74には篦目が認められる。（第15図）

第15図　篦目土器（74）

Ｂ２は、「く」字形口縁の端部を強い横ナデ調整により上方に拡張するもの（77・78－Ｂ２ａ）、外反気味にのびる口縁端部を斜上方につまむような横ナデ調整を施し端面をつくるもの（79・81－Ｂ２ｂ）の２タイプに細分できる。

Ｂ２ａは、口頸部を内外面とも横ナデ調整により仕上げる。体部上半まで残存する77は、内外面をハケ調整により仕上げられている。

Ｂ２ｂは、細部においては３個体とも特徴を異にするが、ヘラミガキにより仕上げる点で共通している。79は口頸部外面をナデ調整により、内面をハケ調整後横方向のヘラミガキにより仕上げる。80は、口頸部内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。体部は、内面をハケ調整とヘラ削り（上半）により、外面をヘラミガキにより仕上げられている。81は、口頸部内面をヘラミガキ、外面をハケ調整で仕上げられている。体部は、内面をハケ調整、外面をヘラミガキで仕上げられている。

Ｂ３は、82～85の４個体である。82～84は、頸部内外面ともハケ調整後、特に外面を中心に部分的なナデ調整により上げられている。85は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。また、82の口縁部端面には２条の擬凹線が、84の口縁部端面には波状紋が施されている。

〔壺Ｃ〕

80の１個体である。一般的な直口壺とは異なり、口縁端部を横ナデによりつまみあげている。口頸部内外面ともヘラミガキにより仕上げられている。体部内面は下半をハケ調整上半をヘラ削りで、外面はヘラミガキで仕上げられている。

〔壺Ｄ〕

Ｄ１は、88・89・91・92の４個体である。当タイプについては、形態的に甕に近いものであるが、体部径に対して頸部径が小さいことや、92のように外面をヘラミガキにより仕上げていることなどから、壺に分類した。口縁端部の形態により、端部を横ナデによりわずかにつまみ出すもの（88・89－壺Ｄ１ａ）、端部を丸く収めるもの（91－壺Ｄ１ｂ）、端部を外方から押さえることにより端面をもつもの（92－壺Ｄ１ｃ）の３タイプに細分できる。

Ｄ１ａは、口縁部がハケと横ナデ調整により仕上げられる。Ｄ１ｂは、口縁部から体部上半までナデ調整により仕上げられる。Ｄ１ｃは、口縁部内面を横方向のヘラミガキで、外面にはヘラ描きによる波状紋を暗文状に施している。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

Ｄ２は93の１個体のみである。大きく外反する頸部から口縁部がのび、強い横ナデにより端部を斜上方につまみ出している。口頸部内外面をナデ調整により仕上げ、体部外面をハケ調整、内面をヘラ削りで仕上げている。

Ｄ３は86・87・90・94の４個体である。形態により、口縁部をヨコナデにより受口状にするもの（壺Ｄ３ｂ）としないもの（壺Ｄ３ａ）とに細分できる。

Ｄ３ａは、86・87の２個体である。86は、口頸部内外面と体部外面をヘラミガキにより仕上げられる。また、体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。87は、口頸部内外面をハケ調整により、体部外面を叩き成形により、内面をヘラ削りにより仕上げられている。

Ｄ３ｂは90と94の２個体である。この２個体については、頸部の長さが異なり、さらに細分が可能である。94は、口頸部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は、叩き成形後部分的に縦方向のハケ調整、さらに下半を中心に縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面は、下方から上方へのヘラ削りによって仕上げられている。体部外面下半に煤の付着が認められることから、甕として使用されたことも考えられる。

〔壺E〕

E1は95と96の2個体である。95は、口縁部上半がわずかに内湾傾向にある。口縁部内外面および体部内面をナデ調整により、体部外面を縦方向のハケ調整により仕上げている。また、口縁部外面にヘラ描き沈線による2条の沈線が認められる。

96は、口縁部上端がわずかに内湾傾向にある。ただし95より体部が楕円形に近い。口縁部外面はナデ調整により、内面はハケ調整の後ナデ調整により仕上げられている。体部内面はヘラ削りにより、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。口縁部外面にはヘラ描き沈線が楕円形状に描かれている。

E2は、97の1個体である。口縁部は壺E1と異なり頸部から直線的で、端部を丸く収められている。口縁部上半内外面はナデ調整により仕上げられている。口縁部内面はハケ調整の後ナデ調整により、外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

〔壺F〕

98の1個体のみである。口縁部のみが残存する。口縁端部は強い横ナデ調整により薄く収められている。外面は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。頸部に断面三角形の凸帯が付く。

〔壺G〕

G1は102と103の2個体である。頸部以下の外面は丁寧なヘラミガキで仕上げられている。内面は下半をハケ調整後横ナデ調整により仕上げられる。胴部外面もヘラミガキで仕上げられている。

G2も104と105の2個体である。擬凹線を施さない点を除けば、G1とほぼ同様な調整方法により仕上げられている。ただし104については、外面をハケ調整後ヘラミガキで仕上げるが、ヘラミガキは丁寧とはいえずハケ目が顕著に認められる。壺G1に比べて体部が薄く仕上げられている。

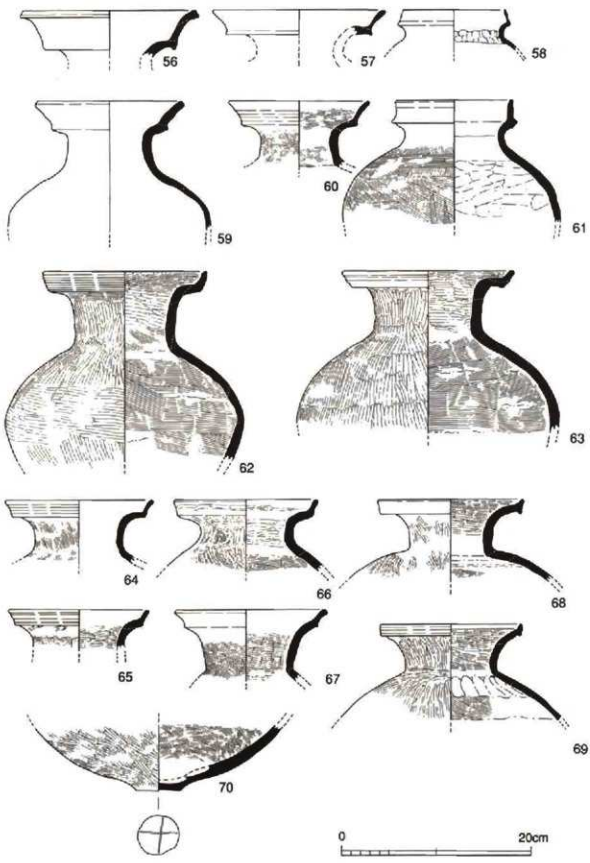
〔壺H〕

H1は101の1個体のみである。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面にはハケ調整を施し、部分的にナデ調整を加えている。内面はナデ調整により仕上げられている。

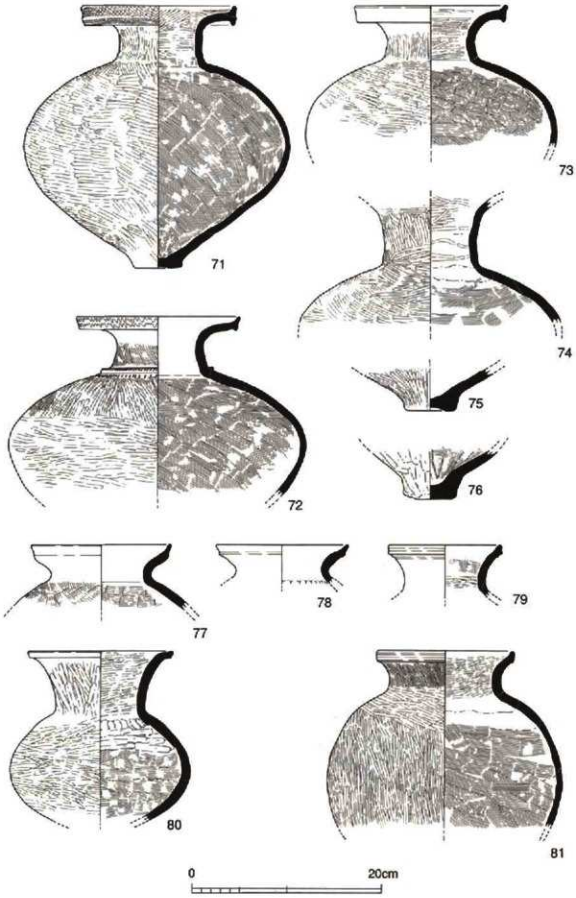
H2は99と100の2個体である。両個体ともH1の祖形と考えられるものであるが、個体差が目立つ。99は体部に対して緩やかに外反する口縁部がつく。口縁部から体部上半までナデ調整により仕上げられている。100は体部に対して斜外方に真っ直ぐのびる口縁部がつく。口縁部から体部にかけての外面はナデ調整により仕上げられている。内面は、体部から口縁部下半までヘラ削りにより、口縁部上半は横方向のナデ調整により仕上げられている。

〔壺I〕

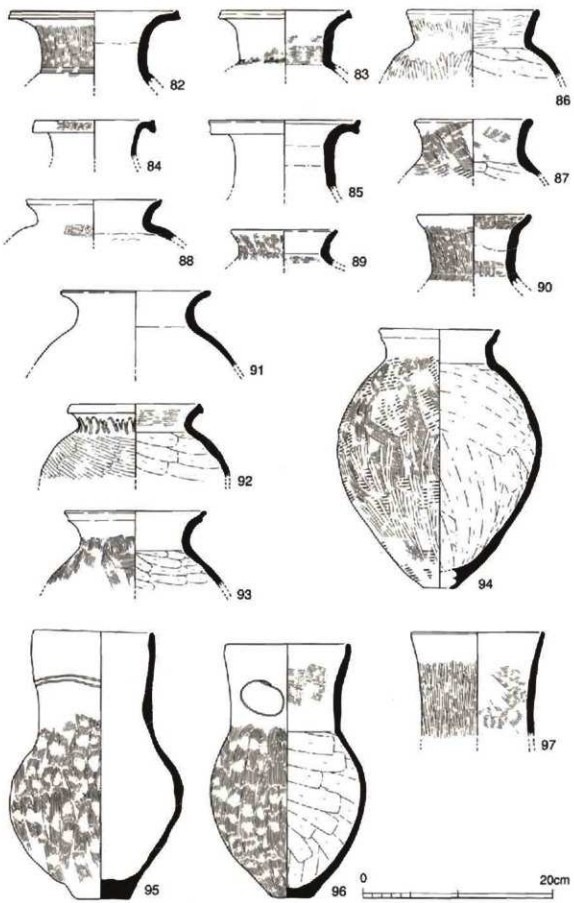
106の1個体である。口縁部上半を欠くが、短頸壺あるいは直口壺のミニチュアと考えられる。残存する頸部から体部にかけての外面はヘラミガキによって仕上げられている。内面については、口頸部は横方向のヘラミガキにより、体部はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。



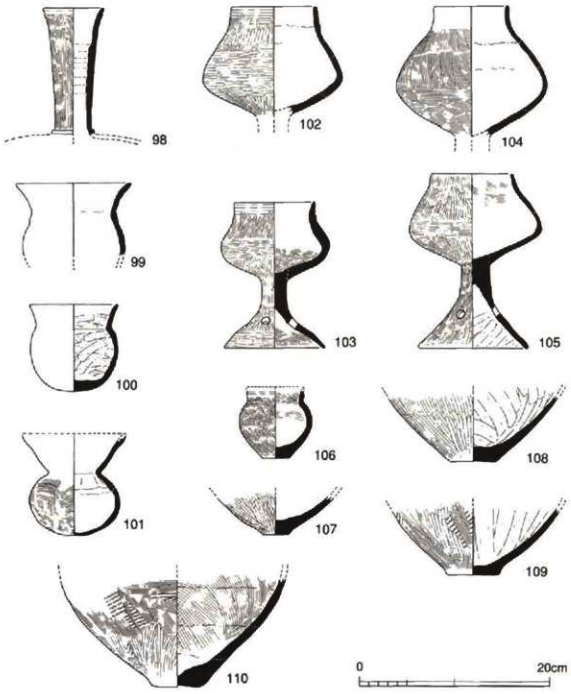
第16図　後期の土器　壺形土器（1）



第17図　後期の土器　壺形土器 (2)



第18図　後期の土器　壺形土器 (3)



第19図　後期の土器　壺形土器（4）

b．甕

〔甕A〕

A１は111から120の10個体である。口縁部はいずれも内外面を横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は、111・113・117に叩き成形痕が認められ、113・117はその後部分的にハケ調整により仕上げられている。この他114・119・120は叩き成形痕は認められないが、ハケ調整により仕上げられている。他の土器はナデ調整により仕上げられている。体部内面のヘラ削りは縦方向（下→上）ないし左方向が多いが、113・114・120のように右上がり方向を主体とするものも認められる。ただしこの３個体についても頸部付近は左上がり方向のヘラ削りによって仕上げられている。なお、底部の形態を明らかにできるのは117の１個体に限られる。これによると、尖底傾向ではあるがわずかに平底をなしている。

A２は121の１個体のみである。口縁部の整形方法についてはA１と全く同じである。体部は左上がり方向のハケ調整により仕上げられている。

A３も122の１個体のみである。口縁部は甕A１・甕A２同様、内外面をナデ調整により仕上げられている。体部外面は左上がり方向を主体とするハケ調整により仕上げられている。底部まで残存するものは認められない。

A４は123～142の20個体である。口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げるものであるが、二次口縁を引き上げにより成形するもの（A４a）と、端部を強い横ナデ調整によりつまみ出すもの（A４b）に細分できる。

A４aは123～130が該当する。体部外面は、叩き成形後縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。内面のヘラ削りについては、左もしくは左上がり方向が多いが、123・128のように逆のものも認められる。底部の形態については、底部まで残存する124・128・129から判断すると、甕A１と同形態で、わずかな平底をなす。

A４bは131－134・136～142が該当する。体部外面の仕上げは、131・132・139のように縦方向を主体とするハケ調整によるもの、133～134・136～138・140のように叩き成形後縦方向のハケ調整によるもの、141のようにナデ調整によるもの、そして142のようにヘラミガキによるものとに分けられる。内面のヘラ削りについては、141を除いて全て左もしくは左上がり方向に施されている。また135は、頸部内面付近をハケ調整により仕上げられている。

なお142については、外面にヘラミガキを施しているため、甕に分類できるかどうか疑問が残ったが、本報告では当タイプの甕に分類した。

A５は135・143・145～147・149の５個体が該当する。135については、ヘラ削りとハケ調整の前後関係を判断することはできなかったが、当タイプに分類する。これらは口縁部の形態は同じであるが、147のみ体部の形態が異なり、体部のラインが直線的である。また、体部外面の調整も若干異なる。147は、叩き成形後上半をハケ調整により、下半をナデ調整により仕上げる。これに対して、147以外の土器は、叩き成形後外面全体を縦方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。ただし、ハケ調整は丁寧なものではなく、部分的に施されている程度である。

底部の形態は、甕A１・甕A４と同形態でわずかに平底をなす。143のように丸底に近いものも認められる。

A６は144・148・156～159の６個体である。完形に復元される156・159を除く土器については、体部上半までしか残存しないこともあり、A５に分類される可能性も否定しきれない。

口縁部は、甕Ａ４と同様、Ａ４ａのように引き上げるもの（Ａ６ａ－144・148）と甕Ａ４ｂのように強い横ナデによりつまみあげるもの（Ａ６ｂ－156～159）の２タイプが認められる。外面の調整については、148のようにナデ調整により仕上げるもの、144・156・157のように叩き成形により仕上げるもの、158・159のように叩き成形後ハケ調整により仕上げるものの３タイプが認められる。底部の形態については、底部まで残存する156・159から判断すると、他の甕Ａと同じくわずかに平底をなす。

Ａ７は150～155の６個体である。口縁部は、甕Ａ６同様、引き上げるタイプ（Ａ７ａ－151・152・154）と、つまみあげるタイプ（Ａ７ｂ－153・155）の２タイプに分類できる。体部外面は、150・152－154のように叩き成形により仕上げるものと、151・155のようにハケ調整により仕上げるものとの２タイプが認められる。底部の形態が判断できるのは154の一個体のみで、他の甕Ａと同じくわずかに平底をなす。

【甕Ｂ】

Ｂ１は、160・162・163の３個体である。口縁端部を強くナデ調整することにより、わずかに複合口縁状になっている。口頸部は内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。体部外面は、叩き成形後ハケ調整により仕上げられている。内面はヘラ削りにより仕上げられている。

Ｂ２は161の１個体である。基本的には甕Ｃ１と同じ手法により複合口縁状になっている。外面はハケ調整により、内面はヘラ削りにより仕上げられている。なお、外面にはハケ調整後一部ヘラ削りが施されている。

【甕Ｃ】

Ｃ１は164～185の22個体である。体部外面は、叩き成形後ハケ調整により仕上げられるものが大半であるが、172のようにナデ調整により仕上げられるものも認められる。なお193については、わずかにハケ調整の痕跡が認められる。体部内面は、ヘラ削りにより仕上げるものと、ヘラ削り後ハケ調整を加えるものとが認められる。底部の形態はわずかに平底をなすものが一般的であるが、なかには実底に近い形態のものも認められる。

Ｃ２は186～195の10個体である。体部外面は、Ｃ１同様、叩き成形後ハケ調整により仕上げられる。内面については、ナデ調整のみのもの（195）とハケ調整を施すもの（186～194）とが認められる。底部の形態については、底部まで残存するものが出土していないが、191が190と同一個体の可能性が高いことから判断すると、Ｃ１と同形態と判断される。

Ｃ３は、196～201・204の７個体である。ただし、端部の形態にはいくつかのバリエーションが認められる。197・204のように端部を明確につまみあげるものと、つまみ上げを意識したナデ調整がわずかに観察できるものである。また後者のタイプには、口縁部の形態が内湾気味のもの（199～201）も認められる。

体部外面は叩き成形を基本とし、その後ハケ調整を施すものが一般的である。内面はヘラ削りを基本とし、196・204のようにその後ナデ調整により仕上げるものも認められる。底部の形態は、残存するものはすべてわずかに平底をなすタイプである。ただし204については、指押さえにより底部を作り出しており、他と若干異なる。

Ｃ４は205～208の４個体である。205が内面を板ナデにより仕上げている以外は、ハケ調整により仕

上げられている。

C5は202・203の2個体である。内面をヘラ削りにより仕上げるもの（202）とナデ調整により仕上げるもの（203）と、個体差が認められる。

C6は209～211の3個体である。ただし、口縁部の形態について細かく観察すると、個体差が目立つ。体部外面は叩き成形を基本とし、その後ハケ調整により仕上げるもの（209・211）とナデ調整により仕上げるもの（210）とがある。内面についてはヘラ削りを基本とし、その後ハケ調整を施すもの（211）と施さないもの（209・210）とが認められる。底部の形態については、残存するものがないため明らかにしえない。

C7は212～216の5個体である。端部の形態については、212のように端部の拡張がわずかなものから215・216のように明確なものまで個体差が認められる。体部外面は、215以外は叩き成形後ハケ調整により仕上げられている。215についても叩き成形痕は認められないが、他と同様に仕上げられたものと考えられる。内面は、212・213のようにハケ調整により仕上げられるもの（C7a）と、214・215のようにヘラ削りを基本とするもの（C7b）とが認められる。216はその後ハケ調整により仕上げられている。ただし、212・213についても、頚部内面に稜線をもつことから、当初はヘラ削りにより成形されたのではないかと考えられる。当タイプについても、底部まで残存するものがないため、その形態を明らかにすることはできない。

〔壺D〕

D1は217の1個体のみである。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、内面中央部に稜をもつ。また、複合部外面にも鋭い稜をもつ。体部内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面は、上半を横方向のハケ調整後一部縦方向のハケ調整により、以下はナデ調整により仕上げられている。底部は丸底に近いがわずかに平底をなしている。この土器については、一見したところ、山陰地方に一般的な土器と同じ特徴が認められる。ただし、胎土分析を行えなかったため、断定はできない。

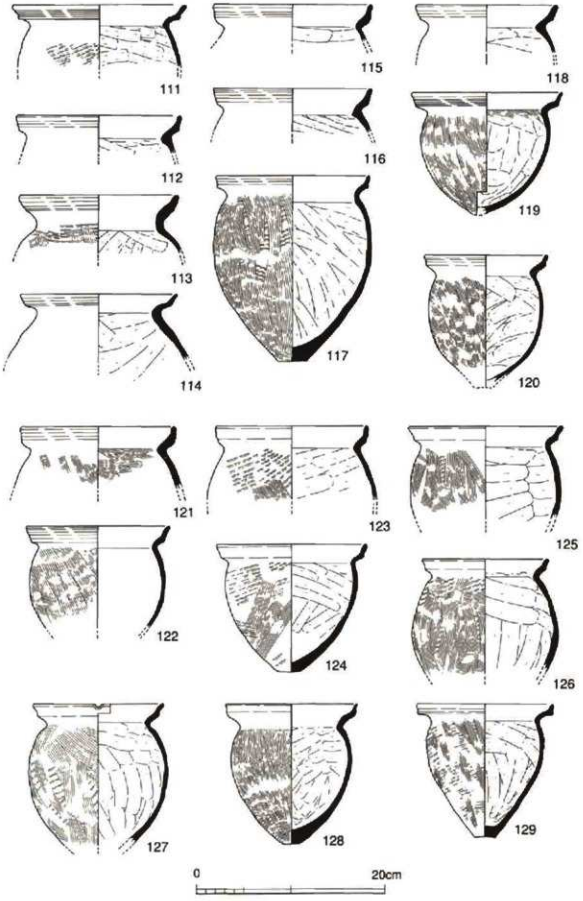
D2は218と219の2個体である。口縁部の調整法は基本的にはC1と同じであるが、複合部外面の稜にシャープさを欠く点が大きく異なる。また体部についても、内面においてはヘラ削り痕が認められずハケ調整により仕上げられている点も異なる。さらに、胎土についても、C1とは明らかに異なり、当遺跡出土の他の土器と類似している。

〔底部〕

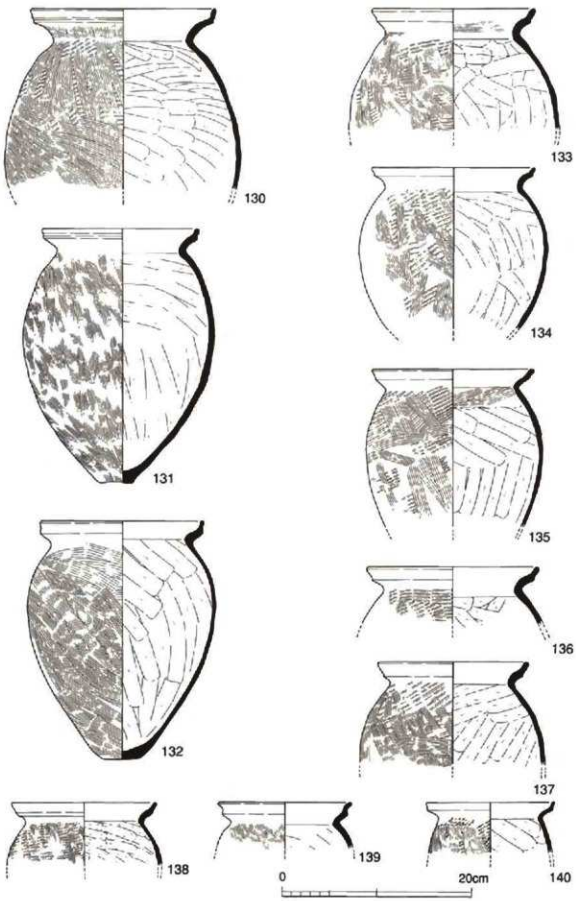
底部Aは220～229の10個体である。外面を叩き成形後ハケ調整により仕上げられている。内面は、ヘラ削りにより仕上げられるものと、ハケ調整により仕上げられるものがある。

底部Bは230～238の9個体である。外面を叩き形成により、内面をハケあるいはナデ調整により仕上げている。

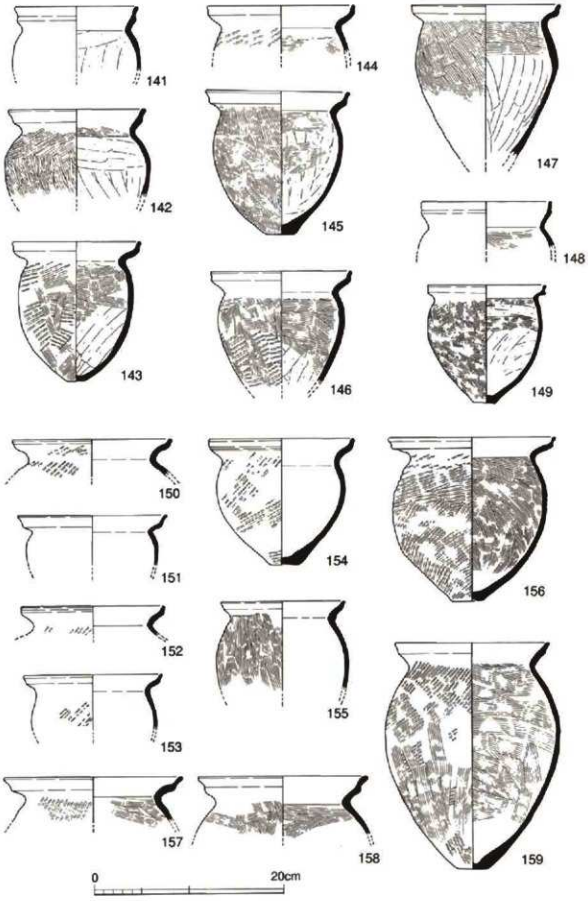
底部Cは239～241の3個体である。外面をハケ調整ないし叩き成形により、内面をハケあるいはナデ調整により仕上げている。



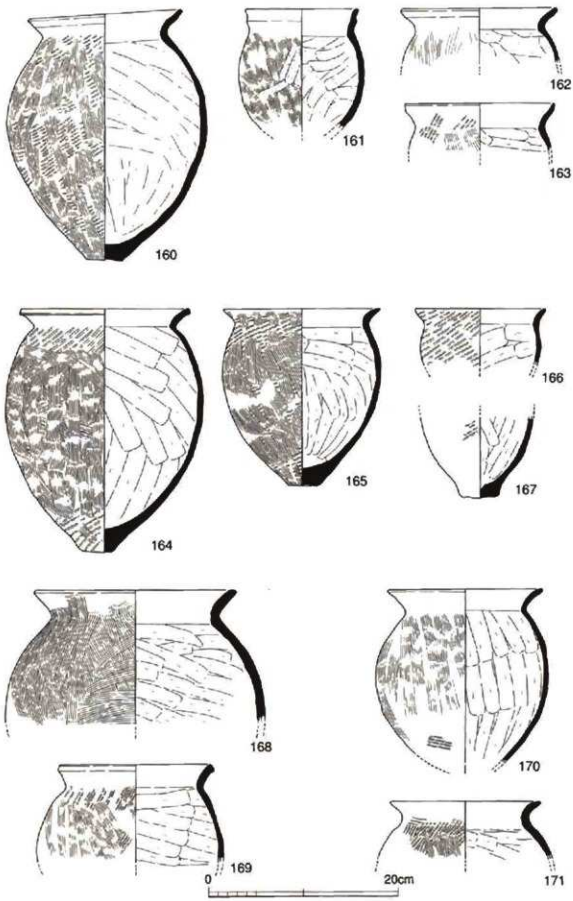
第20図　後期の土器　壺形土器（1）



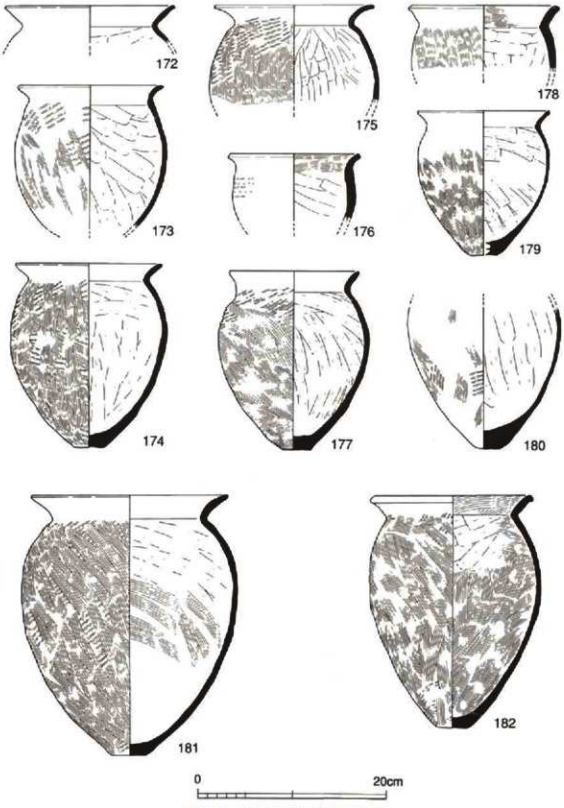
第21図　後期の土器　壺形土器 (2)



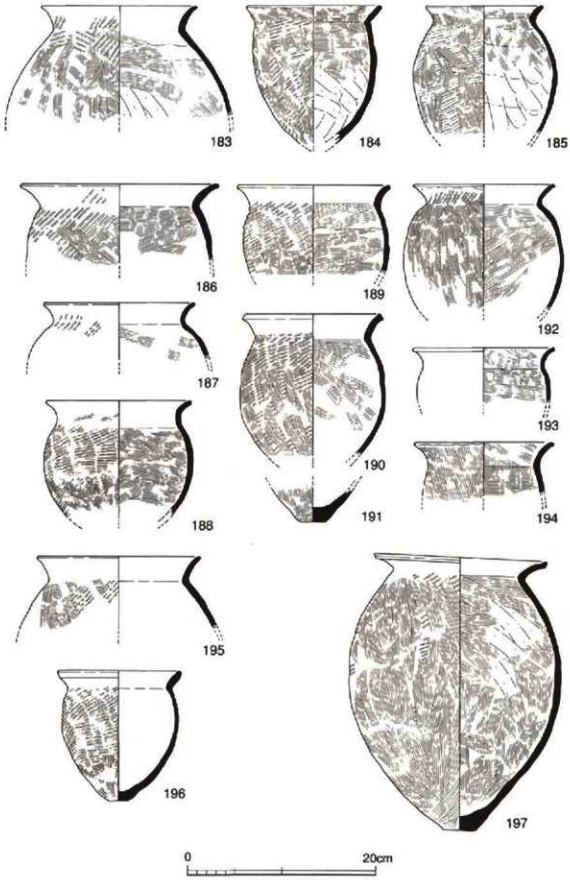
第22図　後期の土器　甕形土器（3）



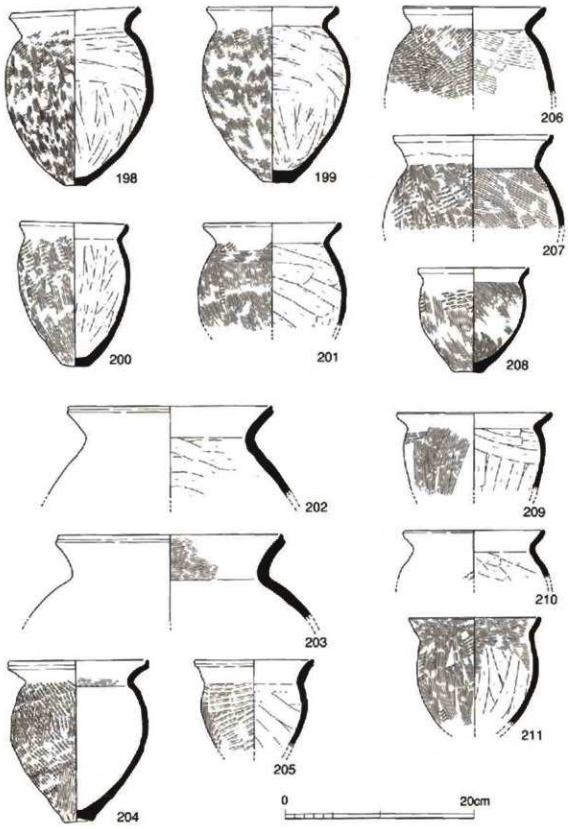
第23図　後期の土器　壺形土器 (4)



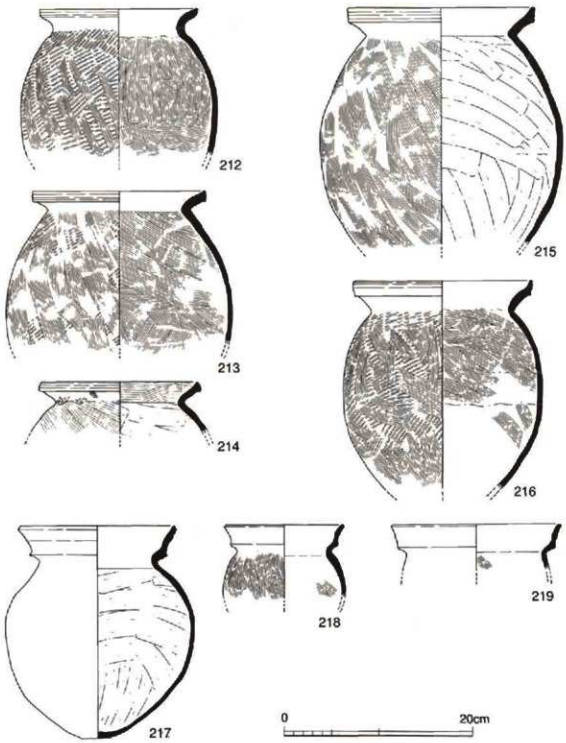
第24図　後期の土器　甕形土器 (5)



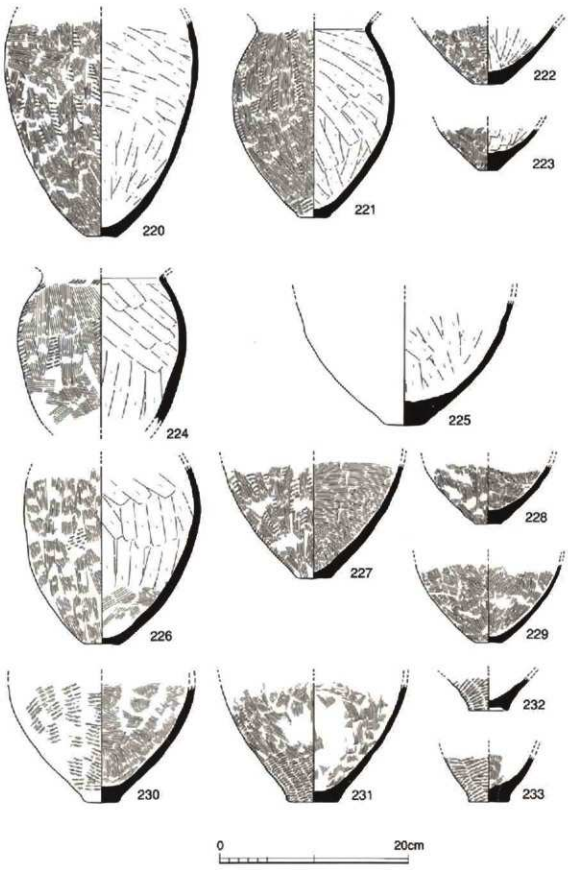
第25図　後期の土器　壺形土器 (6)



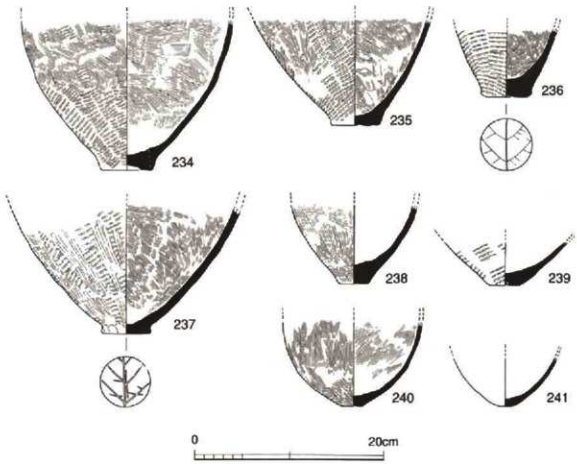
第26図　後期の土器　甕形土器 (7)



第27図　後期の土器　壺形土器 (8)



第28図　後期の土器　甕形土器 (9)



第29図　後期の土器　変形土器 (10)

c．鉢

［鉢A］

A１は242の１個体である。口縁部外面はナデ調整により、内面は横方向のヘラミガキによって仕上げられている。体部は、内外面ともハケ調整の後、下半を縦方向、上半を横方向のヘラミガキによって仕上げられている。また、頸部内面上半付近はヘラ削りによって仕上げられている。底部は突出した平底である。なお、馬蹄形を呈する把手の剥離痕が、体部上半の相対する２箇所に認められる。

A２は243－249・252の８個体である。250についても、口縁部を欠くため明確に判断しがたいが、当タイプに分類できるものと考えられる。口縁部の形態から、明瞭に複合口縁をなすもの（鉢A２a－243－247・252）と不明瞭なもの（鉢A２b－248・249）とに細分できる。

A２aは、口縁部内外面を横ナデ調整による仕上げを基本とするが、252はヘラミガキにより仕上げられている。体部は、内外面ともヘラミガキにより仕上げられるもの（243・246・252）、内外面ともハケ調整により仕上げられるもの（244・245）、内面をヘラ削り外面をヘラミガキにより仕上げられるもの（247）の３タイプが認められる。ただし244は、体部内面はヘラ削り後ハケ調整により仕上げられている。

A２bは、口縁部外面はナデ調整により、内面はヘラミガキにより仕上げられている。体部は、外面を叩き成形後ヘラミガキにより仕上げられている。内面については、248はヘラ削り後ヘラミガキにより、249はヘラミガキにより仕上げられている。

底部は、鉢A２a・鉢A２bともにわずかな平底をなしている。全体的に中央が窪む傾向にある。

〔鉢B〕

253の1個体のみである。口縁部から頸部にかけて残存する個体で、口縁部は複合口縁をなし、明瞭な段をもつ。内外面とも横方向のヘラミガキによって仕上げられている。

〔鉢C〕

251の1個体のみである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を薄く収めている。外面は叩き成形により、底面はナデ調整により仕上げられている。底部は平底であるが底部輪台技法により高台状になっている。口径7.40cm、器高6.70cmの小型品である。

〔鉢D〕

254～262の9個体である。体部から口縁部にかけて斜方向に直線的にのびるもの（D1－254～261）、体部に対して口縁部がわずかに外方に屈曲するもの（D2－262）とに細分できる。D1は、体部から口縁部の調整において、内外面をハケ調整により仕上げるもの（254～259）とヘラミガキにより仕上げるもの（260・261）の2タイプが認められる。台部はいずれも手捏ねにより成形されている。

〔鉢E〕

263の1個体である。形態的には壺形土器に類似する。しかし、体部内面をヘラミガキにより仕上げていること、口径が体部径に比べて大きいことから本型式に分類した。口縁部内面を横ナデ調整により仕上げる他は、ヘラミガキにより仕上げられている。台部は手捏ねにより高台状に成形されている。

〔鉢F〕

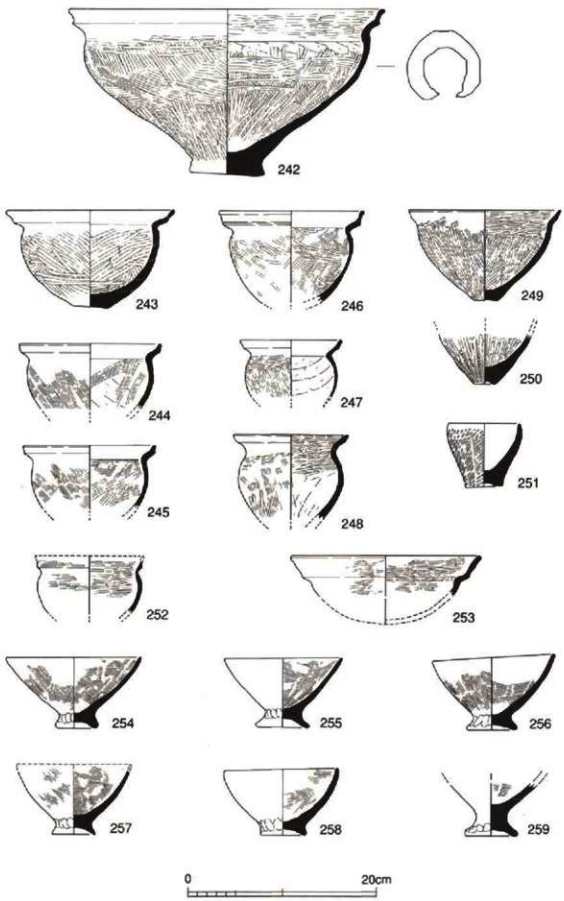
264の1個体である。形態的には高坏と類似するが、脚部が短いことと体部が浅いことから鉢の1型式として分類した。体部は内外面ともヘラミガキにより、脚部は内外面ともナデ調整により、それぞれ仕上げられている。

〔鉢G〕

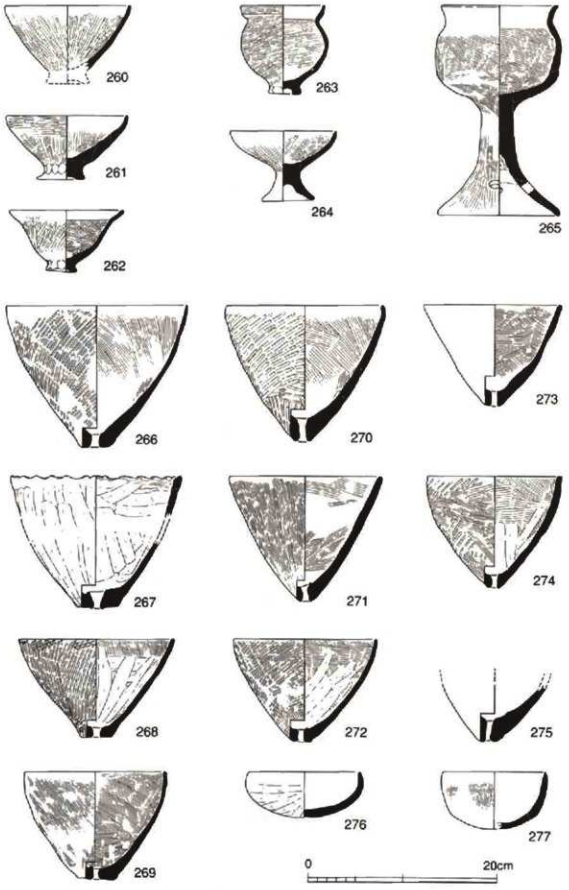
265の1個体である。口縁部は内外面とも横ナデ調整により、体部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。脚部は縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。脚部中央に透穴が穿孔されている。残存するのは3穴であるが、本来は4箇所に穿たれていたものと推定される。

〔鉢H〕

266～275の10個体である。底部の穿孔は全て焼成前に行われ、下方から穿孔されている。形態的には、底部から口縁部にかけて直線的あるいはわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部を薄く収める。内外面の調整法により幾つかのタイプに分類できる。外面を叩き成形により仕上げ内面をハケ調整により仕上げるもの（266・270）、外面を叩き成形により仕上げ内面をハケ調整後下半にヘラ削りを施すもの（268・272・274）、内外面ともハケ調整により仕上げるもの（269・271）、内外面ともヘラ削りにより仕上げるもの（267）、外面をナデ調整により内面をハケ調整により仕上げるもの（273）、内外面ともナデ調整にり仕上げるもの（275）の6タイプである。



第30図　後期の土器　鉢形土器 (1)



第31図　後期の土器　鉢形土器 (2)

d．椀

〔椀A〕

276の1個体のみである。不安定な底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部を直立させ、端部を薄く収める。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はヘラ削りにより、内面はナデ調整により仕上げられている。

〔椀B〕

277の1個体のみである。丸底に近い底部から口縁部にかけて大きく立ち上がり、端部を薄く収める。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はハケ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。また、底部外面は強いヘラナデ調整により仕上げられている。

e．高坏

〔高坏A〕

A1は279の1個体のみである。口縁部内外面とも横方向のナデ調整により仕上げ、外面に擬凹線を施している。体部内外面は、縦方向のヘラミガキにより仕上げられている。

A2も278の1個体である。口縁部は、強い横ナデにより外方につまみ出すようにして二次口縁をなしている。その後、内面を横方向のヘラミガキにより仕上げている。体部内外面および脚部外面もヘラミガキによって仕上げられている。

A3も280の1個体である。体部の上端部を内湾気味につまみ出すように強い横ナデを施し、複合口縁を形成している。このため、内面に明瞭な稜が認められる。体部内外面にわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。

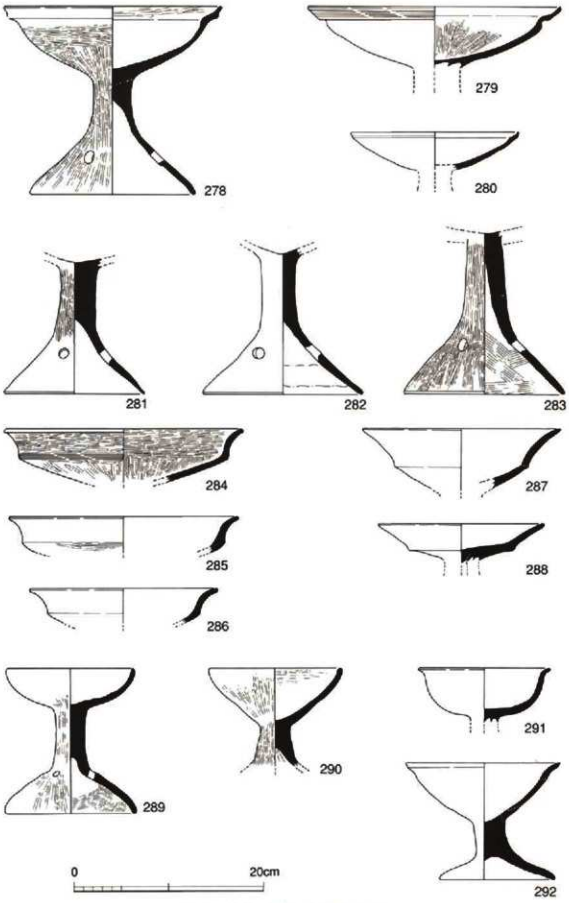
この他、281～283の脚部についても、口縁部から体部を欠くため、対応する細分型式を明確にすることは困難である。ただし、その形態が他の遺跡出土の278と同タイプの高坏の脚部に類似することから、高坏Aに分類されるものと判断した。外面はヘラミガキによって仕上げられている。ただし、282については磨滅が顕著なため調整痕は観察できなかった。

〔高坏B〕

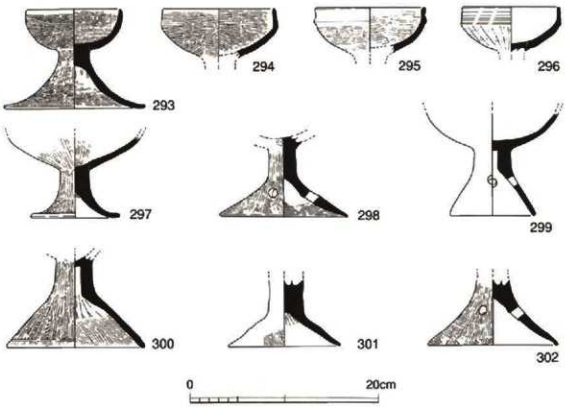
B1は284～286の3個体である。体部に外反傾向にある短い口縁部が付くものである。残存状況の最も良好な284は、口縁部・体部とも内外面をヘラミガキによって仕上げている。体部から口縁部への変換部外面には2条の擬凹線が施されている。また、口縁端部および体部から口縁部にかけての屈曲部外面には朱の付着が認められる。

B2は287の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

B3も288の1個体である。口縁部の立ち上がりは直線的である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。



第32図　後期の土器　高坏形土器 (1)



第33図　後期の土器　高坏形土器 (2)

［高坏C］

C１は289と290の２個体である。ただし、両個体は坏部から脚部にかけての形態が大きく異なる。289（高坏C１a）は皿形を呈する。残存状態は良好とはいえないが、内外面ともヘラミガキにより仕上げられているようである。直線的な脚部に対して坏部は外湾傾向にある。外面はヘラミガキにより仕上げられている。290（高坏C１b）は体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに屈曲し端部を丸く収める。鉢形を呈する。口縁部は、横ナデ調整後内面をヘラミガキにより仕上げられている。体部は、内面をナデ調整により、外面をヘラミガキにより仕上げられている。脚部は完存しないが、高坏C１aより短いものと考えられる。外面をヘラミガキにより仕上げている。なお当個体については、口縁部内面に煤の付着が認められ、蓋に転用された可能性も考えられる。

C２も291と292の２個体であるが、個体差が顕著で２タイプに細分できる。291（高坏C２a）は、体部が坏形を呈する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。292（高坏C２b）は、体部が鉢形を呈する。内外面ともナデ調整により仕上げられている。脚部から裾部にかけては歪みが著しい。脚部外面をヘラミガキにより仕上げる他はナデ調整により仕上げられている。

C３は293－296の４個体である。いくつかの個体差が認められる。

293は、外反しながら広がる脚部に坏形の体部が付くものである。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、外面に１条の擬凹線が施されている。体部は内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。脚部外面はヘラ削り調整後ハケ調整が施され、体部同様丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。内面についてもヘラミガキにより仕上げられている。

294は、内湾気味に立ち上がる体部に口縁部が内傾気味かつ直線的に立ち上がるものである。口縁部から体部にかけて内外面とも丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。この後、口縁部内外面に横ナ

デ調整を加えている。

295は内湾気味に立ち上がる体部に対して、強い横ナデ調整により上方につまみ上げ口縁部を形成するものである。このため、口縁部と体部の境界部外面には明瞭な稜が認められる。口縁部内面および体部内外面をヘラミガキにより仕上げている。

296は内湾気味に立ち上がる体部に対して、口縁部を上方に引き上げることによって作り上げている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられ、外面には3条の擬凹線が施されている。体部外面は縦方向のヘラ削りにより、内面はナデ調整により仕上げられている。

【脚部】

297～302の6個体を図化した。高坏については体部から口縁部の形態を中心に分類したため、脚部のみではどのタイプに分類されるのかについては明確にできない。301を除き、外面はヘラミガキにより仕上げられている。

f．器台

【器台A】

A1は303～306の4個体である。二次口縁を除く外面を縦方向の、口縁部内面を横方向のヘラミガキにより仕上げる。また体部内面を横方向のヘラ削りにより仕上げている。裾部には円孔が穿たれている。

A2も308～311の4個体である。二次口縁外面に擬凹線を施すもの（器台A2a－308）と、施さないもの（器台A2b－309～311）の2タイプに細分できる。ただし、両タイプに共通して裾部には円孔が穿たれていない。

A2aは、口縁部外面の擬凹線はA1に比べてその施す範囲がわずかである。外面はA1同様にヘラミガキにより仕上げられている。内面は、口縁部から体部にかけてを横ナデ調整により、体部以下をハケ調整により仕上げられている。また、裾部には透穴は穿たれていない。

A2bは、309のように内外面をナデ調整により仕上げるものと、310・311のようにヘラミガキにより仕上げるものとがある。また、二次口縁のとりつけ方において、309と310・311とは異なる。

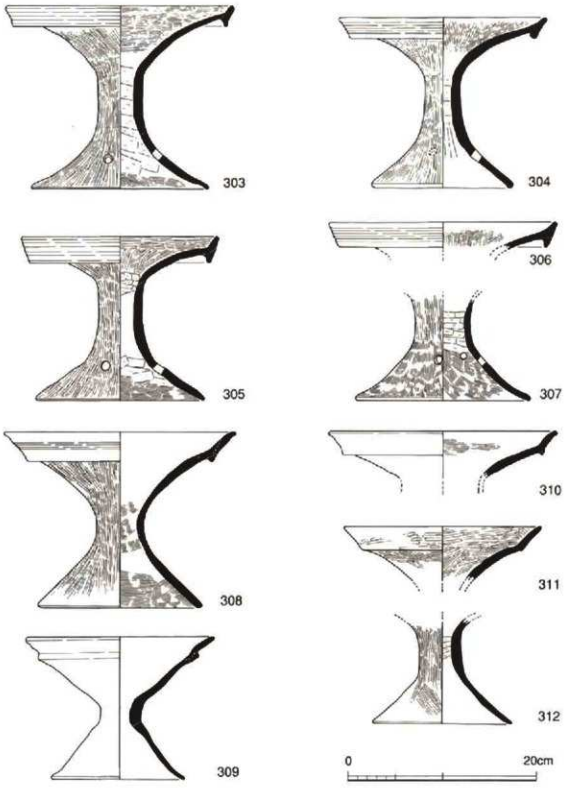
ところで、307と312についてであるが、その形態から器台Aに分類されるものである。そして、前者については裾部に円孔が認められることから、A1に分類できるものと判断した。逆に312には透穴が穿たれていないことから、A2に分類できるものと判断した。

【器台B】

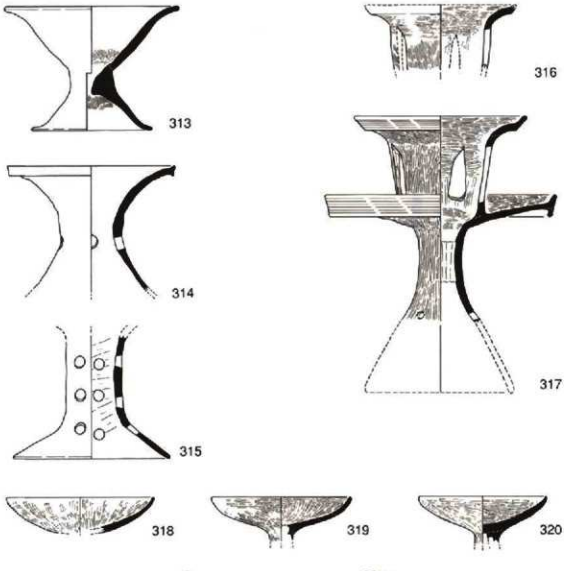
313の1個体である。口縁部および裾部内外面とも、ハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。円孔は認められない。

【器台C】

314の1個体のみである。口縁端部をわずかに上方につまみ上げる。外面にわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。内面の調整痕については観察できない。



第34図　後期の土器　器台形土器 (1)



第35図　後期の土器　器台形土器 (2)

〔器台D〕

315の1個体のみである。体部には3段にわたって4方に円孔が穿たれている。体部内面をヘラ削りにより仕上げる以外は、ナデ調整により仕上げている。

〔器台E〕

316・317の2個体である。316は上段口縁部の一部がわずかに残存する個体である。口頸部は内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキにより仕上げられている。頸部以下は、外面をハケ調整、内面をヘラミガキにより、それぞれ仕上げられている。わずかに逆涙滴状の透かしの一部が2箇所に認められる。口縁部外面に擬凹線は認められない。

317は、脚部下半部を欠くものの、比較的良好に残存する個体である。上段口縁部外面を除いては丁寧なヘラミガキにより仕上げられている。口縁部外面には擬凹線が施されている。5箇所に逆涙滴状の透かしが穿たれている。下段口縁部内外面もヘラミガキにより仕上げられている。口縁部は端部を上下

に拡張し、外面には振回線が施されている。また、上段と下段口縁部の接合部内面はハケ調整により仕上げられている。脚部外面は縦方向のヘラミガキにより、内面はナデ調整により仕上げられている。3箇所に円孔が穿たれている。316・317の2個体とも胎土は他の土器と比べ精良で、比較的丁寧に仕上げられている。

〔器台F〕

318～320の3個体である。いずれも口縁部のみの残存で、脚部を欠く。3個体とも同じタイプのものである。ただし、3個体は内外面をヘラミガキによって仕上げているが、その方向は異なる。318は、内外面とも縦方向に、319は内外面とも横方向後、内面を縦方向に、320は内外面とも横方向に、それぞれ仕上げている。

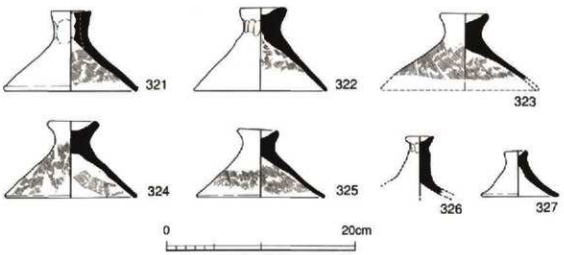
g．蓋

〔蓋A〕

蓋A1は321－325の5個体、蓋A2は327の1個体である。いずれも天井部を指押さえによって成形し、口縁部にかけてほぼ直線的にのびる。321と322は、内面をハケ調整により、外面をナデ調整により仕上げられている。323～325は内外面ともハケ調整により仕上げられている。327は内外面ともナデ調整により仕上げられている。

〔蓋B〕

326の1個体である。口縁部を欠くため、全体の形態は明らかにしえない。天井部は指押さえにより、他はナデ調整により仕上げられている。



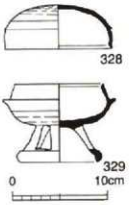
第36図　後期の土器　蓋形土器

C．古墳時代の土器

須恵器の坏蓋・高坏が出土している。溝状の落ち込みがほぼ完全に埋没した面の上の層から出土している。

坏蓋（328）は、口径11.2cm、器高4.6cmを測る。天井部の3/4は丁寧にヘラ削りが施され、他はヨコナデにより仕上げられている。高坏（329）は、口径9.3cm、器高8.2cm、脚高3.9cmを測る。坏部外面3/4には、ヘラ削りが施されている。

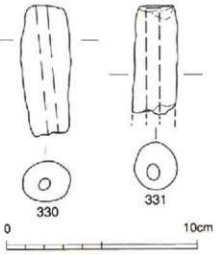
これら須恵器の示す時期は、口縁端部の形態から判断して若干の時期差があるようであるが、概ね6世紀前半と考えられる。



第37図
古墳時代の土器

D．その他の遺物

土錘2点（330・331）が出土している。出土地点は、Cの須恵器とほぼ同じである。2点とも同じタイプに分類されるものである。330は一方を欠き、残存長5.7cmを測る。また最大径2.2cm、孔径0.7cmを測る。331はほぼ完存する。全長6.9cmを測り、最大径は2.7cm、孔径は0.5cmである。



第38図　土　　錘

Ⅱ．木　製　品

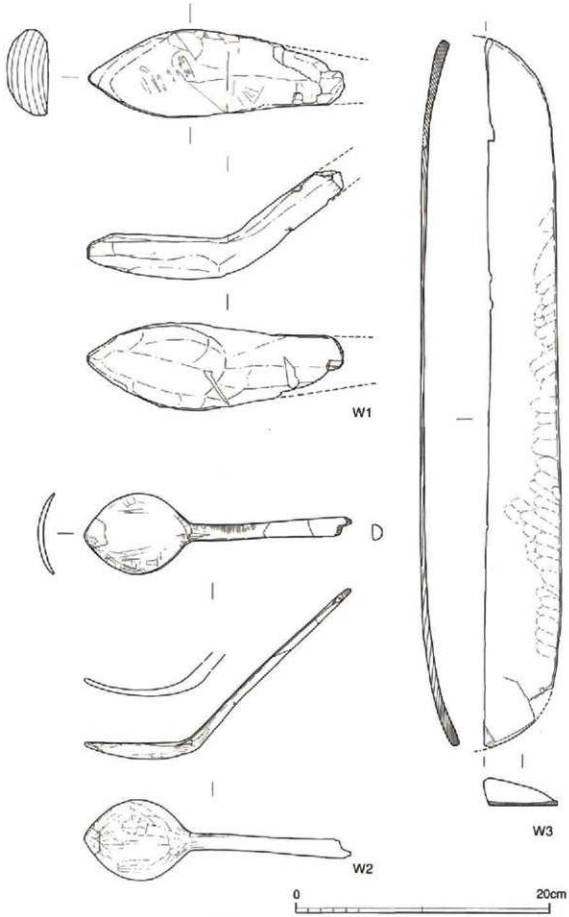
製品・未製品を含めて図化したのは10点である。いずれも、溝状の落ち込みの下層、つまり弥生時代末～古墳時代初頭に位置付けられる土器を伴って出土している。なお、木製品の製品名および各部名称については『木器集成図録　近畿原始篇』（奈良国立文化財研究所　1993）による。類例についても当書による。

W1は、鍬の一部である。身と柄の一部が残存する。身は先端部を尖らせている。身の上面は平坦となっている。身の外面には削り痕が比較的顕著に認められる。身幅6.8cm、最大厚3.2cmを測る。また身と柄のなす角度は約142°である。樹種はサカキである。

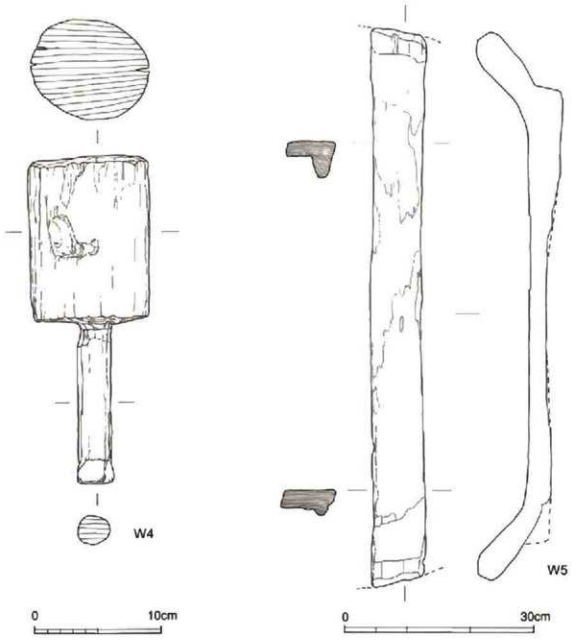
W2も鍬である。柄の先端部を欠くが、他は完存する。全体に丁寧に仕上げられ、削りの単位は身外面に一部認められる程度である。身は、先端部はやや尖り気味に仕上げられ、内面は皿状に抉り込まれ、全体的に薄くかつ平滑に仕上げられている。身の断面は薄い三日月状をなし、端部は薄く仕上げられている。中心部における厚さは0.4cmである。また、身幅は6.3cm、身長は8.35cmである。

柄は0.75cm×1.2cmの断面蒲鉾形をなす。身と同様に丁寧にかつ平滑に仕上げられている。身と柄のなす角度は約135°である。樹種はカヤである。

W3は楯の一部と考えられる。全体の一部が残存するのみである。全体的には方形ないし長方形をなすものと考えられるが、その一辺と両側のコーナー部分が残存する。残存する一辺はほぼ直線的で、コーナーは丸く仕上げられている。全体的に板状をなすが、縁側へ内湾しかつ厚くなる傾向が認められ、その厚さは、中央部で0.3cm、縁側で0.7cmを測る。また縁側を中心に削りの単位がわずかに観察できるが、全体的に内外面とも平滑に仕上げられている。そして、内外面には朱の塗布が認められる。残存長56cmを測り、樹種はカヤである。



第39図　出土木製品(1)

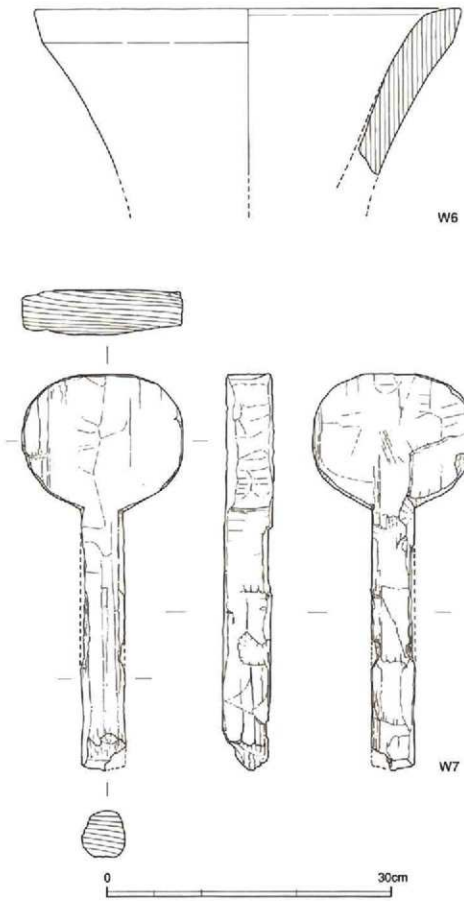


第40図　出土木製品(2)

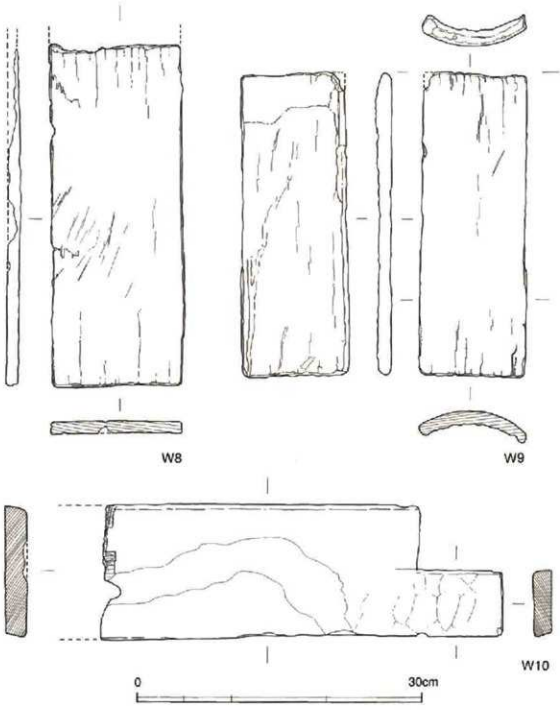
なお、当製品については楯の一部と考えた。形態的には中久世遺跡出土例に近い。しかし、類例では木釘孔が認められるが、当製品にはその痕跡が全く認められない。したがって、現段階では、当製品を楯と断定することはできない。

W4は横槌で、ほぼ完存する。身はかなり使い込まれたようで、断面形が楕円形をなす。断面の現模は9.3cm×7.9cmを測り、その長さは13.3cmである。また柄は、身に対して極端に細く、その径は2.2cm×2.5cmである。また長さは12.6cmである。樹種はアカガシ亜属である。

W5は、盤の一部と考えられる。残存する形態から判断して、平面楕円形をなすものと考えられる。中心よりややずれた部分が残存するためその径を明確にすることはできないが、残存長は86.5cmと比較的大型である。底部は平坦で、口縁部の立ち上がりは底部から11.3cmである。底部は、残存状況は良好とは言いがたいが、平高台状をなす。底部の厚さは4.4cmである。樹種はスギである。



第41図　出土木製品(3)



第42図　出土木製品(4)

W6は臼の口縁部の一部と考えられる。口縁端部は、わずかに内傾気味の上垣面と同じく内傾気味の外端面をなす。わずかしか残存しないため、径は誤差を考慮に入れる必要があるが、口径45.0cmと復元される。樹種はトチノキである。

W7は不明品である。平面楕円形の厚い板に柄がつく形態をなす。楕円形の規模は17.1cm×14.4cmで、その厚さは4.9cmである。柄の先端を欠くが、残存長41.8cmを測る。断面形は、残存状況は良好ではないが、方形ないし長方形をなす。樹種はアカガシ亜属である。

本製品については、楕円形部分の中心を切り抜くと、鍬柄となることから、この身製品とも考えられる。しかし、当該期のこのような類例は認められないため、断定することはできない。

W８は板状の不明品である。平面長方形をなし、その一端を欠く。幅13.8cmを測り、厚さは全体的にほぼ一定で1.3cmである。残存長は36.1cmである。樹種はスギである。

W９も不明品である。W８同様板状をなすが、全体的に樋状に湾曲する。内面の一端から約3.5cmの位置にわずかに稜が認められる。製物樋の一部とも考えられる。類例としては江上Ａ遺跡出土例があげられる。平面32.3cm×10.9cmを測り、厚さは1.8cmである。樹種はスギである。

W10も板状の不明品である。平面は長方形をなすが、一端は6.9cm×9.1cmの範囲で鍵形に抉れ、その反対側は欠損している。残存長42.4cm、幅13.4cmを測り、厚さは1.9cmである。樹種はヒノキである。

第11表　第３・４次調査出土土器観察表　中期

No.	器種	法量（cm）						残存率	色調	特徴・備考
		口径	頸径	腹径	底径	器高	脚高			
45	壺	(14.4)		—	—	4.7	—	口縁部1/6	淡灰褐	
46	壺	—	—	(31.0)	—	18.1	—	体部－頸部1/3	黄橙	
47	壺	(16.7)	(13.2)	—		12.0	—	口頸部1/3	淡橙	
48	壺	—	—	—	(11.2)	4.4	—	底部3/5	淡黄	
49	壺	—	—	—	(11.0)	9.1	—	底部2/3	にぶい黄橙	
50	甕	(17.9)	(14.9)	—	(6.8)	—	—	口縁部1/4	灰白	体部中位を欠損
51	甕	—	—	—	9.5	8.7	—	底部4/5	浅黄	
52	甕	(16.4)	(13.4)	—	—	5.8	—	口縁部1/5	浅黄橙	
53	高坏	(17.3)	—	—	—	2.7	—	口縁部1/6	灰白	
54	高坏	—	—	—	—	7.4	—	脚部2/3	浅黄橙	
55	高坏	—	—	—	(11.0)	6.5	—	脚部1/4	灰白	

※下線付の器高を残存高。（　）付の径は反転復元による。

第12表　第３次・４次調査出土土器観察表　後期（1）

No.	器種	法量（cm）						残存率	色調	特徴・備考
		口径	頸径	腹径	底径	器高	脚高			
56	壺・Ａ１	(18.4)	—	—	—	5.0	—	口縁部1/6	淡黄橙	
57	壺・Ａ１	(17.2)	—	—	—	2.6	—	口縁部1/4	淡黄褐	
58	壺・Ａ２	(10.8)	10.4	—	—	4.3	—	口縁部1/2	淡黄橙	
59	壺・Ａ１	(15.2)	(8.8)	(21.6)	—	13.6	—	口縁部1/3	淡黄	
60	壺・Ａ１	(14.8)	(8.6)	—	—	6.8	—	口縁部1/6	淡橙	
61	壺・Ａ２	12.2	10.4	22.2	—	12.9	—	口頸部完存	淡橙	
62	壺・Ａ３ａ	17.2	10.5	25.3	—	19.9	—	口頸部1/3	明褐灰－灰白	
63	壺・Ａ３ａ	17.9	11.2	27.9	—	17.7	—	口縁部1/4	にぶい黄橙	
64	壺・Ａ３ｂ	(15.3)	(9.4)	—	—	6.7	—	口縁部1/6	明橙	
65	壺・Ａ３ｂ	(14.6)	(9.8)	—	—	4.2	—	口縁部1/4	淡橙	
66	壺・Ａ３ｂ	15.0	10.0	—	—	7.5	—	口縁部7/8	にぶい黄橙	
67	壺・Ａ３ｃ	15.9	9.9	—	—	8.0	—	口縁部7/8	浅黄橙	
68	壺・Ｂ１ｂ	(15.2)	(8.7)	—	—	8.7	—	口縁部4/5	灰～灰白	
69	壺・Ｂ１ａ	15.0	(9.9)	—	—	10.1	—	口頸部完存	にぶい黄橙	
70	壺・Ｂ１	—	—	—	4.5	6.9	—	底部完存	暗灰色	
71	壺・Ｂ１ｂ	16.1	8.7	28.3	5.0	27.5	—	ほぼ完存	淡橙～暗灰	
72	壺・Ｂ１ｂ	17.2	9.2	31.6	—	18.9	—	口頸部完存	にぶい橙	
73	壺・Ｂ１ｂ	(16.0)	(9.8)	(26.4)	—	15.0	—	口縁部5/6	にぶい黄橙	

第13表　第３次・４次調査出土土器観察表　後期 (2)

No.	器　種	法　量 (cm)						残存率	色　調	特徴・備考
		口径	胴径	頸径	底径	器高	脚高			
74	壺・B 1	——	(9.8)	——	——	12.2	——	胴部1/3	灰白～灰黄	櫛目残存
75	壺	——	——	——	5.2	4.4	——	底部完存	灰白～明褐灰	
76	壺	——	——	——	5.6	5.0	——	底部完存	にぶい橙	
77	壺・B 2 a	(14.6)	(10.5)	——	——	6.9	——	口縁部1/4	灰白	
78	壺・B 2 a	(13.9)	(9.9)	——	——	4.1	——	口縁部1/6	橙	
79	壺・B 2 b	(11.8)	(8.6)	——	——	5.5	——	口縁部1/3	淡黄灰	
80	壺・C	(15.3)	(9.4)	(19.2)	——	17.9	——	口縁部2/3	灰白	
81	壺・B 2 b	(14.2)	(11.6)	24.9	——	13.6	——	口縁部完存	にぶい黄橙	
82	壺・B 3	17.6	11.0	——	——	7.8	——	口縁部完存	灰白～淡黄	
83	壺・B 3	(13.4)	7.8	——	——	6.7	——	口縁部1/4	淡黄	
84	壺・B 3	(12.6)	8.8	——	——	4.1	——	口縁部1/4	橙	
85	壺・B 3	(16.0)	(10.7)	——	——	7.5	——	口縁部3/5	淡黄～灰白	
86	壺・D 3 a	13.6	12.4	——	——	7.1	——	口縁部1/2	淡橙	
87	壺・D 3 a	(11.6)	(10.8)	——	——	6.0	——	口縁部1/2	浅黄橙	
88	壺・D 1 a	14.2	(11.8)	——	——	3.9	——	口縁部完存	灰白	
89	壺・D 1 a	(11.0)	7.6	——	——	3.8	——	口縁部1/3	淡黄橙	
90	壺・D 3 b	11.9	8.6	——	——	7.6	——	口縁部5/6	灰白～橙	
91	壺・D 1 b	(15.2)	(12.2)	——	——	8.1	——	口縁部1/12	淡赤橙～橙	
92	壺・D 1 c	13.6	(11.9)	——	——	7.6	——	口縁部2/3	灰白	
93	壺・D 2	(14.7)	(11.4)	——	——	8.2	——	口縁部1/4	明褐灰	
94	壺・D 3 b	12.4	11.0	21.6	(3.1)	27.3	——	口縁部2/3	灰白	
95	壺・E 1	12.3	11.9	17.9	5.4	28.4	——	口縁部1/2	灰白	
96	壺・E 1	12.7	11.5	11.5	3.9	26.9	——	ほぼ完存	灰白	
97	壺・E 2	(13.9)	——	——	——	10.8	——	口縁部1/12	灰白	
98	壺・F	6.2	4.4	——	——	13.2	——	口頸部完存	淡黄橙	
99	壺・H 2	(12.0)	9.0	(10.0)	——	7.7	——	口縁部1/3	淡橙	
100	壺・H 2	(9.2)	8.0	9.0		9.1	——	口縁部1/4	明橙	
101	壺・H 1	——	(5.6)	(9.6)		10.5	——	口頸部1/4	灰白～浅黄橙	櫛円線６条
102	壺・G 1	8.9	9.9	14.4	——	11.6	——	口縁部1/2	灰白～浅黄橙	櫛円線４条
103	壺・G 1	8.4	8.7	11.5	10.6	15.3	7.0	ほぼ完存	淡黄～灰白	
104	壺・G 2	(7.6)	8.0	(15.8)	——	13.0	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	
105	壺・G 2	8.4	9.2	13.9	11.2	18.4	9.3	ほぼ完存	橙～浅黄橙	
106	壺・I	——	6.0	7.1	2.7	7.1	——	口縁部以外1/2	淡黄褐	
107	壺底部	——	——	——	2.7	4.0	——	底部完存	浅黄橙～明褐	
108	壺底部	——	——	——	4.8	6.8	——	底部完存	にぶい黄橙	
109	壺底部	——	——	——	5.5	7.1	——	底部完存	淡赤橙～灰白	
110	壺底部	——	——	——	5.3	11.2	——	底部完存	灰白～灰	
111	甕・A 1	18.2	14.8	(17.4)	——	6.5	——	口縁部ほぼ完存	淡黄灰	外面煤付着
112	甕・A 1	(17.2)	(15.4)	——	——	3.8	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	外面煤付着
113	甕・A 1	16.5	13.8	——	——	6.1	——	口縁部ほぼ完存	にぶい黄橙	
114	甕・A 1	16.5	13.2	——	——	7.2	——	口縁部1/2	橙	外面煤付着
115	甕・A 1	(16.7)	(14.6)	——	——	3.9	——	口縁部1/2弱	灰白	外面煤付着
116	甕・A 1	16.7	14.6	——	——	4.5	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
117	甕・A 1	16.0	14.0	16.8	3.0	19.5	——	口縁～底部2/3	にぶい黄橙	外面煤付着
118	甕・A 1	14.7	12.4	——	——	4.9	——	口縁部1/2	灰白	外面煤付着
119	甕・A 1	(15.8)	(12.7)	13.7	——	12.8	——	口縁部1/4	灰黄	外面煤付着
120	甕・A 1	12.8	10.6	12.0	——	13.1	——	口縁部3/4	明黄褐	外面煤付着
121	甕・A 2	(16.1)	(14.4)	——	——	8.5	——	口縁部1/4	灰白	外面煤付着
122	甕・A 3	15.0	12.6	14.4	——	10.7	——	口縁部1/3	淡橙	外面煤付着
123	甕・A 4 a	15.7	14.4	——	——	7.8	——	口縁部1/3	灰白	外面煤付着
124	甕・A 4 a	15.6	13.4	14.0	2.3	13.3	——	ほぼ完存	灰白	外面煤付着

第14表　第３次・４次調査出土土器観察表　後期（3）

No.	器　種	法　量（cm）						残存率	色　調	特徴・備考
		口径	最大径	底径	器高	脚高				
125	壺・A 4 a	(14.9)	(13.6)	(15.3)	——	9.6	——	口縁部1/7	灰黄	外面煤付着
126	壺・A 4 a	13.2	11.1	15.5	——	12.1	——	口縁部1/3	にぶい黄橙	外面煤付着
127	壺・A 4 a	15.7	(10.8)	14.8	——	19.9	——	口縁部ほぼ完存	灰白～灰黄	外面煤付着
128	壺・A 4 a	13.8	11.0	12.8	1.6	9.7	——	口縁部1/3	にぶい黄橙	外面煤付着
129	壺・A 4 a	14.4	11.6	12.6	2.7	19.0	——	口縁部1/2	褐	外面煤付着
130	壺・A 4 a	19.2	14.8	25.9	——	19.0	——	口縁部1/3	灰黄～灰白	外面煤付着
131	壺・A 4 b	16.3	13.4	19.6	3.5	26.7	——	ほぼ完存	暗褐	外面煤付着
132	壺・A 4 b	16.8	14.2	19.7	4.0	25.2	——	口縁部2/3	灰白	外面煤付着
133	壺・A 4 b	17.0	14.0	——	——	12.8	——	口縁部1/2強	灰白	
134	壺・A 4 b	17.0	14.5	20.0	——	17.0	——	口縁部ほぼ完存	浅黄橙～浅黄	外面煤付着
135	壺・A 5	(16.7)	(14.0)	18.7	——	16.5	——	口縁部1/4	灰白	外面煤付着
136	壺・A 4 b	(16.0)	(14.6)	——	——	6.3	——	口縁部1/5	淡黄～灰白	
137	壺・A 4 b	15.5	13.2	——	——	11.2	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
138	壺・A 4 b	15.1	12.7	(16.5)	——	6.6	——	口縁部完存	褐	外面煤付着
139	壺・A 4 b	(14.0)	(11.6)	——	——	4.9	——	口縁部1/4	橙	
140	壺・A 4 b	(13.5)	(11.0)	——	——	5.3	——	口縁部1/6	灰白	外面煤付着
141	壺・A 4 b	(12.9)	(11.6)	13.7	——	6.8	——	口縁部1/3	灰白～浅黄橙	
142	壺・A 4 b	14.2	12.3	15.3	——	5.3	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
143	壺・A 5	(13.2)	(10.3)	(12.2)	1.9	14.7	——	口縁部1/6	灰白	
144	壺・A 6 a	(15.4)	(12.8)	——	——	5.1	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	
145	壺・A 5	15.0	12.2	13.6	3.2	15.1	——	ほぼ完存	灰白～浅黄橙	外面煤付着
146	壺・A 5	(14.7)	(12.0)	13.4	——	11.9	——	口縁部1/3	黄橙	
147	壺・A 5	15.6	13.2	(15.0)	——	16.3	——	口縁部ほぼ完存	にぶい黄橙	外面煤付着
148	壺・A 6 a	(13.6)	(12.2)	——	——	4.9	——	口縁部1/4	橙～灰白	
149	壺・A 5	12.3	11.0	11.8	2.2	12.3	——	ほぼ完存	褐	外面煤付着
150	壺・A 7	(16.7)	(13.5)	——	——	3.9	——	口縁部1/4	淡橙	外面煤付着
151	壺・A 7 a	(15.8)	(12.8)	(14.0)	——	5.3	——	口縁部1/4	灰白～浅黄橙	
152	壺・A 7 a	(15.1)	(12.6)	——	——	3.0	——	口縁部1/4	灰白	外面煤付着
153	壺・A 7 b	14.6	12.0	13.4	——	4.8	——	口縁部ほぼ完存	橙	
154	壺・A 7 a	15.1	12.2	13.7	3.1	13.3	——	ほぼ完存	淡橙	
155	壺・A 7 b	12.9	11.2	(14.1)	——	9.4	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
156	壺・A 6 b	17.5	11.2	15.8	3.2	17.3	——	ほぼ完存	淡黄灰	外面煤付着
157	壺・A 6 b	(18.6)	(14.3)	——	——	4.8	——	口縁部1/5	浅黄橙	
158	壺・A 6 b	(17.3)	(14.2)	——	——	6.3	——	口縁部1/5	にぶい橙	外面煤付着
159	壺・A 6 b	(15.9)	(13.3)	(18.4)	2.4	24.2	——	口縁部1/6	灰白	外面煤付着
160	壺・B 1	15.8	13.2	21.1	3.8	25.8	——	ほぼ完存	灰白	外面煤付着
161	壺・B 2	11.6	11.2	(13.2)	——	12.7	——	口縁部ほぼ完存	橙	外面煤付着
162	壺・B 1	16.1	13.1	——	——	5.8	——	口縁部3/4	浅黄橙	外面煤付着
163	壺・B 1	(15.7)	(13.8)	——	——	5.0	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	煤付着
164	壺・C 1	17.3	15.0	20.6	2.9	25.7	——	口縁部3/4	灰白	
165	壺・C 1	(16.6)	(14.3)	(16.7)	2.9	18.6	——	口縁部1/5	灰白	外面煤付着
166	壺・C 1	13.7	12.3	12.8	——	5.9	——	口縁部4/5	灰白	
167	壺・C 1	——	——	——	3.9	8.5	——	底部完存	灰白	外面煤付着
168	壺・C 1	(20.6)	(17.6)	(27.6)	——	14.1	——	口縁部1/8	褐灰～黄橙	外面煤付着
169	壺・C 1	15.6	14.2	19.7	——	10.3	——	口縁部ほぼ完存	浅黄橙	
170	壺・C 1	16.6	12.8	18.2	——	18.2	——	口縁部ほぼ完存	淡橙	外面煤付着
171	壺・C 1	(15.7)	(13.3)	——	——	6.1	——	口縁部1/4	灰白	
172	壺・C 1	(17.8)	(14.4)	——	——	3.9	——	口縁部2/3	にぶい橙	外面煤付着
173	壺・C 1	15.0	13.2	16.0	——	15.3	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
174	壺・C 1	15.3	12.7	16.6	3.3	19.3	——	ほぼ完存	灰白～黄橙	外面煤付着
175	壺・C 1	15.6	12.8	17.9	——	10.4	——	口縁部1/2	明褐灰～橙	外面煤付着

第15表　第３次・４次調査出土土器観察表　後期 (4)

No.	器　種	法　量 (cm)						残存率	色　調	特徴・備考
		口径	脚径	腹径	底径	器高	胴高			
176	壺・C 1	(13.4)	(12.4)	(13.1)	——	7.1	——	口縁部1/5	灰白	
177	壺・C 1	13.6	12.0	16.2	2.9	18.8	——	ほぼ完存	褐	外面煤付着
178	壺・C 1	(15.1)	(13.7)	(15.2)	——	6.9	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	
179	壺・C 1	(14.2)	(12.0)	(14.0)	2.6	15.2	——	口縁部わずか	褐	外面煤付着
180	壺・C 1	——	——	15.6	2.5	15.0	——	口縁部ほぼ完存	淡白	外面煤付着
181	壺・C 1	(20.4)	(16.2)	(22.9)	3.4	27.3	——	口縁部2/3	にぶい黄橙	外面煤付着
182	壺・C 1	16.3	13.7	17.9	3.3	24.5	——	口縁部5/6	明赤灰	外面煤付着
183	壺・C 1	(16.2)	(14.0)	——	——	11.6	——	口縁部1/3	橙	
184	壺・C 1	13.7	12.1	13.2	——	14.5	——	口縁部5/6	灰白	
185	壺・C 1	12.2	10.7	15.2	——	13.5	——	口縁部5/6	灰白	外面煤付着
186	壺・C 2	(20.1)	(16.7)	——	——	8.2	——	口縁部1/5	にぶい橙	
187	壺・C 2	(15.7)	(13.8)	——	——	6.0	——	口縁部1/3	橙	外面煤付着
188	壺・C 2	15.0	13.0	(15.6)	——	12.4	——	口縁部ほぼ完存	にぶい橙	外面煤付着
189	壺・C 2	16.0	14.2	16.0	——	9.3	——	口縁部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
190	壺・C 2	(14.2)	(12.2)	(15.4)	——	15.1	——	口縁部3/4	灰黄褐～黄橙	外面煤付着
191	壺・C 2	——	——	——	2.3	3.6	——	底部完存	明褐灰	外面煤付着
192	壺・C 2	(14.6)	(12.1)	16.9	——	13.2	——	口縁部1/3	にぶい橙	外面煤付着
193	壺・C 2	14.7	12.8	14.2	——	5.8	——	口縁部2/3	黄橙	外面煤付着
194	壺・C 2	(14.3)	(11.9)	——	——	5.6	——	口縁部1/2	灰白～淡黄	外面煤付着
195	壺・C 2	(17.0)	(14.6)	——	——	7.6	——	口縁部1/6	橙	
196	壺・C 3	12.8	11.2	12.4	1.8	13.8	——	ほぼ完存	暗黄褐	外面煤付着
197	壺・C 3	18.2	13.5	22.5	3.5	28.7	——	ほぼ完存	にぶい黄橙	外面煤付着
198	壺・C 3	13.5	12.0	16.8	2.2	18.5	——	完存	褐	外面煤付着
199	壺・C 3	13.8	11.8	16.6	3.2	18.5	——	ほぼ完存	黄褐	外面煤付着
200	壺・C 3	11.0	9.9	11.8	3.0	15.1	——	完存	灰白～淡黄	
201	壺・C 3	(14.4)	(12.1)	15.7	——	10.9	——	口縁部1/6	灰白	外面煤付着
202	壺・C 5	(21.6)	(17.8)	——	——	9.7	——	口縁部1/8	灰白	
203	壺・C 5	(23.6)	(20.8)	——	——	9.2	——	口縁部1/3	灰白	
204	壺・C 3	(14.7)	12.2	14.5	(2.6)	16.9	——	口縁部わずか	にぶい黄橙	
205	壺・C 4	(12.4)	(10.6)	13.1	——	9.3	——	口縁部1/4	灰白	外面煤付着
206	壺・C 4	15.1	12.5	——	——	9.2	——	口縁部2/3	橙	
207	壺・C 4	16.7	14.0	(19.2)	——	9.8	——	口縁部1/2	灰白	外面煤付着
208	壺・C 4	11.6	10.5	11.3	3.1	11.0	——	口縁部1/2	灰白	外面煤付着
209	壺・C 6	(16.0)	(14.2)	(14.9)	——	8.2	——	口縁部1/2強	灰白	
210	壺・C 6	(14.6)	(12.8)	——	——	5.1	——	口縁部1/4	にぶい橙	外面煤付着
211	壺・C 6	13.8	12.4	12.8	——	11.4	——	口縁部3/4	にぶい黄橙	外面煤付着
212	壺・C 7 a	(16.6)	(14.4)	(20.8)	——	15.6	——	口縁部2/3	にぶい黄橙	外面煤付着
213	壺・C 7 a	18.3	15.2	24.0	——	16.1	——	口縁部3/4	灰白	外面煤付着
214	壺・C 7 b	16.5	13.7	——	——	5.4	——	口縁部2/3	灰白	外面煤付着
215	壺・C 7 b	19.4	16.0	25.8	——	25.0	——	口縁部完存	灰白	外面煤付着
216	壺・C 7	18.8	15.0	21.0	——	21.9	——	口縁部5/6	淡橙	外面煤付着
217	壺・D 1	16.2	12.6	20.4	2.8	22.4	——	ほぼ完存	淡褐	外面煤付着
218	壺・D 2	(12.2)	(10.0)	(13.0)	——	7.8	——	口縁部2/5	黄橙～灰褐	外面煤付着
219	壺・D 2	(17.6)	(14.8)	——	——	4.8	——	口縁部1/8	灰白	外面煤付着
220	壺・底部A	——	——	(20.5)	3.2	22.8	——	体部～底部2/3	浅黄橙～灰白	外面煤付着
221	壺・底部A	——	12.1	17.2	3.4	20.8	——	体部1/2	にぶい橙	外面煤付着
222	壺・底部A	——	——	——	3.0	6.2	——	底部完存	にぶい橙	外面煤付着
223	壺・底部A	——	——	——	(2.0)	4.5	——	底部2/3	灰白	外面煤付着
224	壺・底部A	——	13.6	17.9	——	16.0	——	体部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
225	壺・底部A	——	——	——	4.2	13.2	——	底部完存	灰白～淡黄	
226	壺・底部A	——	——	18.7	3.6	18.6	——	底部完存	灰白	外面煤付着

第16表　第３次・第４次調査調査出土土器観察表　後期 (5)

No.	器種	法量 (cm) 口径	頸径	胴径	底径	器高	脚高	残存率	色調	特徴・備考
227	甕・底部A	——	——	——	(3.6)	12.0	——	底部1/2	灰白－灰黄	外面煤付着
228	甕・底部A	——	——	——	2.6	6.2	——	底部ほぼ完存	灰白	外面煤付着
229	甕・底部A	——	——	——	(2.7)	8.2	——	底部完存	灰黄褐－褐色	外面煤付着
230	甕・底部B	——	——	——	3.6	12.4	——	底部完存	浅黄橙－灰白	
231	甕・底部B	——	——	——	5.7	12.4	——	体部－底部1/3	褐灰－灰白	外面煤付着
232	甕・底部B	——	——	——	4.0	3.5	——	底部完存	にぶい橙	
233	甕・底部B	——	——	——	(4.1)	5.0	——	底部2/3	灰白	
234	甕・底部B	——	——	(22.4)	(5.6)	15.7	——	底部ほぼ完存	にぶい橙	外面煤付着
235	甕・底部B	——	——	——	5.0	11.1	——	底部完存	灰白	外面煤付着
236	甕・底部B	——	——	——	(5.4)	7.2	——	底部ほぼ完存	灰白	
237	甕・底部B	——	——	——	5.2	13.5	——	底部完存	灰白	
238	甕・底部B	——	——	——	3.2	5.2	——	底部2/3	灰白－暗灰	
239	甕・底部C	——	——	——	3.0	4.6	——	底部完存	灰白－浅橙	
240	甕・底部C	——	——	——	2.2	8.8	——	底部完存	灰白－灰黄褐	外面煤付着
241	甕・底部C	——	——	——		5.3	——	底部完存	淡橙－黄橙	
242	鉢・A 1	33.1	30.0	30.1	7.9	17.3	——	ほぼ完存	灰白－灰黄	
243	鉢・A 2 a	(17.4)	(14.1)	14.5	3.6	10.2	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	
244	鉢・A 2 a	(14.8)	(13.0)	(13.5)	——	6.9	——	口縁部1/8	浅黄橙	
245	鉢・A 2 a	(13.8)	(12.0)	(12.3)	——	6.7	——	口縁部1/3	にぶい黄橙	
246	鉢・A 2 a	15.1	12.4	13.2	——	9.7	——	口縁部1/5	灰白	
247	鉢・A 2 a	(10.7)	(8.6)	(9.8)	——	6.0	——	口縁部1/3	淡橙	
248	鉢・A 2 b	(12.0)	9.4	11.5	——	8.9	——	口縁部1/2	にぶい黄橙	外面煤付着
249	鉢・A 2 b	(15.8)	(14.1)		2.4	9.5	——	口縁部1/3	灰白	
250	鉢	——	——	——	2.0	5.3	——	底部完存	橙－灰白	
251	鉢・C	7.4	——	7.9	4.0	6.7	——	ほぼ完存	灰白－明褐灰	
252	鉢・A 2 a	——	(10.2)	(10.9)	——	5.2	——	体部上半1/5	にぶい橙	
253	鉢・B	(19.8)	(16.0)	——	——	4.2	——	口縁部1/6	灰白	
254	鉢・D 1	14.0	——	——	3.9	7.4	1.3	口縁部1/6	灰白	外面煤付着
255	鉢・D 1	12.3	——	——	5.2	7.2	1.6	口縁部5/6	浅黄橙	
256	鉢・D 1	12.7	——	——	5.0	7.5	1.3	口縁部1/2	灰白－明褐灰	
257	鉢・D 1	——	——	——	4.4	6.8	1.0	底部完存	灰白	
258	鉢・D 1	(11.9)	——	——	4.8	6.9	1.0	口縁部1/3	にぶい橙	
259	鉢・D 1	——	——	——	5.3	5.5	2.0	底部完存	灰白－黄橙	
260	鉢・D 1	(13.1)	——	——	——	6.8	——	口縁部1/3	淡橙－灰白	
261	鉢・D 1	(12.6)	——	——	4.4	6.7	1.2	口縁部1/4	灰白	
262	鉢・D 2	(11.8)	(9.8)	——	3.0	6.5	0.8	口縁部1/2	灰白－灰黄	
263	鉢・E	8.7	7.5	9.3	3.2	9.2	——	ほぼ完存	灰白－淡橙	炭化植物残存
264	鉢・F	(11.0)	2.5	——	5.5	7.4	2.3	口縁部1/2	灰白	
265	鉢・G	12.2	3.3	——	(12.5)	22.1	10.6	口縁部完存	淡橙	
266	鉢・H	(19.0)	——	——	2.6	14.8	——	底部完存	灰白	
267	鉢・H	(17.8)	——	——	4.2	14.8	——	口縁部1/4	灰白	
268	鉢・H	16.3	——	——	3.0	10.3	——	口縁部3/4	にぶい黄橙	
269	鉢・H	14.6	——	——	3.6	11.2	——	口縁部2/3	灰白	
270	鉢・H	(16.4)	——	——	1.4	14.3	——	口縁部1/6	灰黄	
271	鉢・H	(15.8)	——	——	1.0	13.1	——	口縁部1/4	灰黄	
272	鉢・H	15.0	——	——	1.6	10.8	——	口縁部3/4	にぶい黄橙	
273	鉢・H	14.4	——	——	0.9	10.7	——	ほぼ完存	灰白	
274	鉢・H	14.0	——	——	1.0	11.7	——	口縁部2/3	にぶい橙	
275	鉢・H	——	——	——	1.2	6.0	——	底部完存	灰白	
276	鉢・A	(11.7)	——	(12.6)	——	4.8	——	口縁部1/4	浅黄橙	
277	鉢・B	(10.8)	——	——	——	6.1	——	口縁部1/3	灰黄－明褐灰	

第17表　第３次・４次調査出土土器観察表　後期（6）

No.	器　種	法量（cm） 口径	頚径	胴径	底径	器高	脚高	残存率	色　調	特徴・備考
278	高坏・A２	(22.8)	(4.4)	——	(16.8)	19.6	12.0	口縁～脚部1/2	浅黄橙	
279	高坏・A１	26.5	4.9	——	——	6.5	——	口縁部1/2	淡橙	
280	高坏・A３	(17.6)	——	——	——	4.1	——	口縁部1/3	灰白	
281	高坏・A	——	3.9	——	14.7	14.1	12.8	脚部1/2	浅黄橙	外面煤付着
282	高坏・A	——	4.0	——	16.8	15.4	14.2	脚部1/2	浅黄橙	
283	高坏・A	——	4.2	——	(16.6)	16.8	15.6	脚部完存	灰白	
284	高坏・B１	(24.9)	——	——	——	5.6	——	口縁部1/4以下	灰白	
285	高坏・B１	(24.1)	——	——	——	4.0	——	口縁部1/4	灰白	
286	高坏・B１	(19.8)	——	——	——	4.1	——	口縁部1/5	にぶい黄橙	
287	高坏・B２	(20.6)	——	——	——	3.9	——	口縁部1/12	橙～淡橙	
288	高坏・B３	(17.1)	(3.8)	——	——	4.1	——	口縁部1/4	にぶい橙	
289	高坏・C１a	(13.2)	(3.7)	——	(13.6)	15.3	10.9	口縁部1/3	淡橙	
290	高坏・C１b	(13.9)	3.3	——	——	10.3	4.0	口縁部1/4	淡橙	
291	高坏・C２	(13.6)	(3.3)	——	——	5.6	——	口縁部1/2	にぶい橙～橙	
292	高坏・C２	16.1	3.3	——	(11.9)	12.3	6.1	口縁部完存	灰白	
293	高坏・C３	(9.7)	(3.3)	——	(14.9)	10.4	6.0	口縁～脚部1/3	淡黄	
294	高坏・C３	11.7	——	——	——	5.2	——	口縁部1/3	にぶい黄橙	
295	高坏・C３	(11.5)	——	——	——	4.7	——	口縁部1/4	にぶい橙～橙	
296	高坏・C３	10.2	3.0	——	——	4.6	——	口縁部2/3	灰黄褐	
297	高坏脚部	——	(3.0)	——	(9.2)	8.5	4.8	脚部ほぼ完存	明褐灰～灰白	
298	高坏脚部	——	2.8	——	13.4	8.4	7.1	脚部ほぼ完存	灰白	
299	高坏脚部	——	(3.9)	——	(8.7)	10.9	6.8	脚部1/3	浅黄橙～淡橙	
300	高坏脚部	——	4.0	——	14.2	9.3	9.3	脚部3/5	灰白	
301	高坏脚部	——	——	——	(11.8)	7.0	——	脚部3/5	橙～淡橙	
302	高坏脚部	——	——	——	(13.6)	6.8	——	脚部1/3	灰白～黄橙	
303	器台・A１	(23.6)	(5.1)	——	(18.8)	19.3	——	口縁～底部1/2	浅黄橙	
304	器台・A１	21.6	4.7	——	14.2	17.9	——	ほぼ完存	灰白～灰黄	
305	器台・A１	20.6	4.6	——	17.5	17.2	——	口縁部1/2	灰白	
306	器台・A１	(23.9)	——	——	——	2.8	——	口縁部1/5	灰白	
307	器台・A１	——	(5.9)	——	(18.2)	10.7	——	脚部1/4	にぶい橙	
308	器台・A２a	(24.2)	(5.0)	——	(16.4)	18.4	——	口縁部ほぼ完存	にぶい橙	
309	器台・A２b	19.5	4.4	——	(13.8)	14.9	——	口縁部1/2	橙	
310	器台・A２b	(23.8)	——	——	——	5.0	——	口縁部1/4	浅黄橙	
311	器台・A２b	20.6	——	——	——	5.7	——	口縁部1/8	灰白	
312	器台・A２	——	3.4	——	14.6	11.0	——	脚部1/3	灰白	脚端部煤付着
313	器台・B	(18.0)	4.7	——	12.4	13.0	——	口縁部1/3	橙～淡橙	
314	器台・C	——	6.5	——	(17.7)	13.3	——	口縁～脚部1/4	灰白	
315	器台・D	——	6.0	——	(16.3)	12.9	——	脚端部1/6	橙	
316	器台・E	(15.8)	——	——	——	6.8	——	口縁部1/4	浅黄橙～灰白	
317	器台・E	(17.8)	5.6	——	——	21.7	——	口縁部3/5	灰白	
318	器台・F	(15.5)	——	——	——	3.7	——	口縁部1/3	灰白	
319	器台・F	(14.6)	(2.5)	——	——	4.0	——	口縁部1/4	にぶい黄橙	
320	器台・F	13.3	2.5	——	——	5.0	——	口縁部2/3	にぶい黄橙	
321	壺・A１	(13.9)	——	——	(4.0)	8.4	——	口縁部1/6	にぶい黄橙	
322	壺・A１	13.9	——	——	4.4	8.7	——	ほぼ完存	浅黄橙	
323	壺・A１	——	——	——	4.6	6.9	——	つまみ基完存	灰白	
324	壺・A１	13.6	——	——	3.6	8.0	——	口縁部1/2	浅黄橙	
325	壺・A１	13.3	——	——	3.9	7.2	——	完存	灰白	
326	壺・B	——	——	——	2.4	6.1	——	つまみほぼ完存	灰白	
327	壺・A２	(7.9)	——	——	2.1	4.7	——	つまみほぼ完存	にぶい橙	

第５章　科学的分析の結果

第１節　犬岡遺跡出土木器の樹種

第5章 第1節は

公開していません

第２節　兵庫県氷上郡、犬岡遺跡における地形環境

立命館大学非常勤講師　青　木　哲　哉

人間は、自然環境に影響され、またこれを利用して生活してきた。中でも、地形は人間の生活舞台であり、この点からみて地形環境は、人間生活を解明する上での重要な研究対象と考えられる。近年、遺跡の発掘が盛んになり、その件数が増加してきた。こうした遺跡の発掘地域では、微地形ならびに地層などの詳細な観察を通じて、人間生活に見合った細かいオーダーの地形環境変化を捉えることができるこのような分析が、かつて人間が生活していた場所である遺跡の発掘地域においてなされることによって、人間生活と地形環境の関わり合いが考察でき、遺跡の立地や過去の人間生活がより鮮明に浮き彫りになると考えられる。

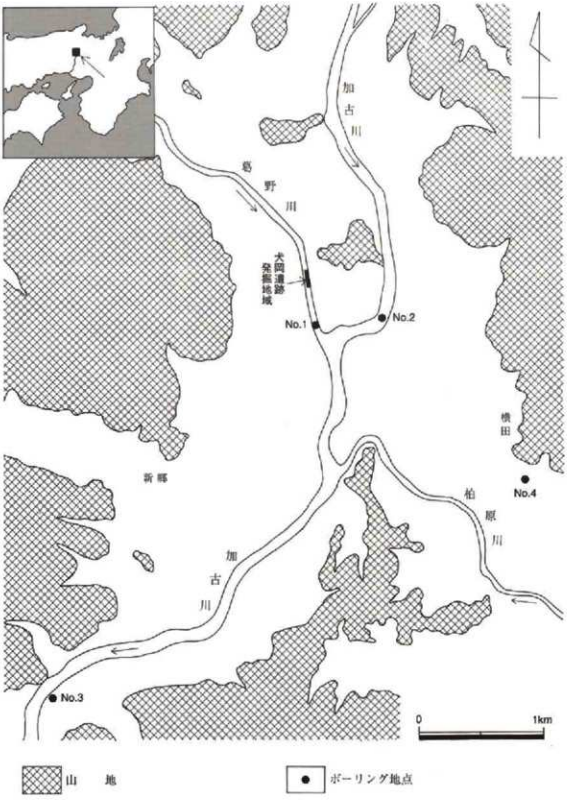
本稿では、こうした立場から犬岡遺跡付近における地形環境を明らかにしてみたい。考察に際しては、まず１万分の１空中写真の判読と現地観察によって地形分類図を作成し、また既存のボーリング柱状図から犬岡遺跡が位置する氷上盆地南部の地下地質を概観した。次に、犬岡遺跡の発掘地域において、微地形と地質断面を詳細に観察し、これらの分析に基づいて地形環境に関する考察を行った。

１．氷上盆地南部の地形

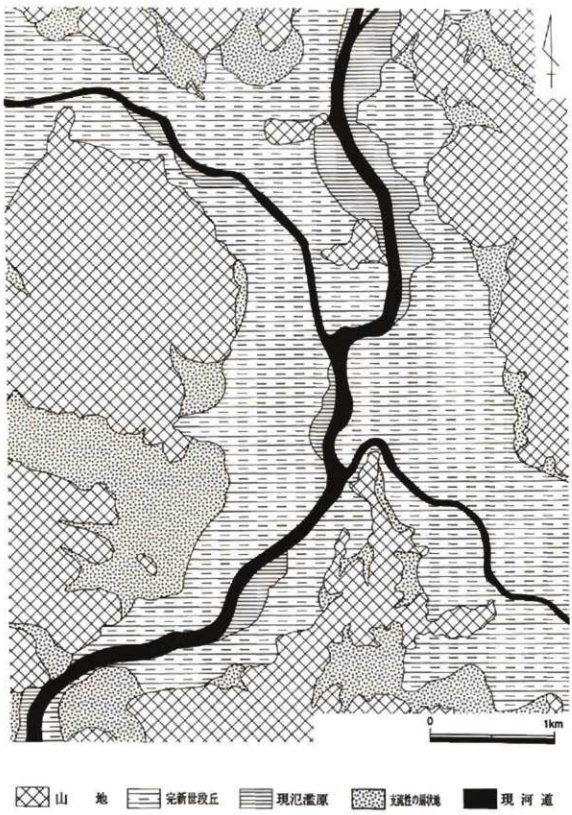
犬岡遺跡は、加古川の上流域にある氷上盆地の南部に位置する。氷上盆地は、ほぼ北から南へ流下する加古川に沿って細長く開けており、盆地の周辺には丹波山地が広がっている（第45図）。この山地は、盆地周辺において標高300～650ｍ程度と低く、起伏が小さい。盆地の南西部には、加古川水系と由良川水系の谷中分水界が存在する。ここは、標高およそ90ｍで、極めて低い分水界となっている。かつて由良川は、現在氷上盆地の西方を北流する竹田川の流路に沿って南流し、この谷中分水界を経て加古川に注いでいた。これが、３万年前以前に河川争奪され、現在の水系になったと考えられている[1]。こうした山地や谷中分水界が周囲にみられる氷上盆地には、沖積平野が広がり、そこには独立丘陵が点在している。

第46図は、氷上盆地の南部における地形分類図である。これによると、氷上盆地の南部では加古川に葛野川や柏原川などの支流が合流し、沖積平野は加古川およびその支流に沿って広がっていることが知られる。沖積平野は、完新世段丘、現氾濫原ならびに支流性の扇状地などに分けられる。完新世段丘は、氷上盆地の南部において最も広範囲にみられ、比高およそ30㎝の崖で現氾濫原と境される。ここは、扇状地が段丘化したものであり、段丘上には埋没中州と埋没旧河道が認められる（第47図）。埋没中州は網状を呈し、その間に紡錘形の埋没中州が数多く分布している。他方、現氾濫原は加古川とその支流沿いに点々とみられる。この地形は、完新世段丘の崖下に分布しており、河川が氾濫した場合冠水する場所にあたる。ここも、完新世段丘と同様に扇状地の性格をもっている。

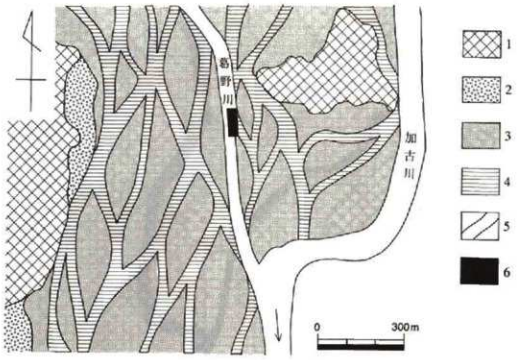
盆地周辺の山地に沿って分布する支流性の扇状地は、加古川、葛野川および柏原川の小規模な支流によって形成されたものである。これらは、上面の傾斜が比較的大きく、氷上盆地の南部において最も面積が大きい新郷付近の扇状地で約11.4‰、面積が小さい横田付近のものではおよそ133.3‰の傾斜を有



第45図　氷上盆地南部の地域概観図



第46図　氷上盆地南部の地形分類図



1.山地　2.支流性の扇状地　3.完新世段丘の堆没中州
4.完新世段丘の堆没旧河道　5.現河道　6.犬岡遺跡の発掘地域

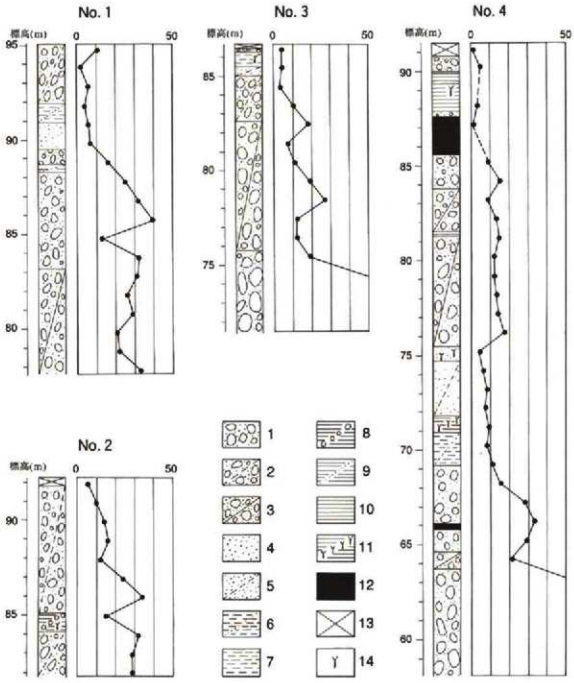
第47図　犬岡遺跡付近の微地形分類予察図

する。支流性の扇状地は、小規模な谷から延びるか、あるいは谷の中に発達しており、背後の山地から堆積物が供給されてできた地形と考えられる。

2．氷上盆地南部の地質

第48図は、氷上盆地の南部で実施されたボーリングの柱状図を示したものである。この図のNo.1とNo.2ボーリング柱状図は、氷上盆地南部のほぼ中央部における堆積物を表わしており（第45図）、これらをみると、ここでは砂礫の堆積が顕著であったことがわかる。両柱状図では、堆積物のN値が下部ほど大きくなっており、最下部にみられる粘土またはシルトが混じった砂礫層は、N値20～35程度を示す。No.1とNo.2のボーリング地点付近において、これらの層に対比される粘土混じり砂礫層は、他のボーリング柱状図でも観察され、N値はおよそ50に達するものもみられる。これらのN値に基づくと、氷上盆地南部の中央部における沖積層は、標高83～84m以深の粘土混じり砂礫層より上位にみられる堆積物と判断される。この付近の沖積層は、多くの場合N値30以下で緩く、層厚が8～12mと薄い。層相は、主に0.3～5cmの礫を主体とする褐灰～暗黄灰色の砂礫が中心で、ところどころに暗灰色の砂やシルト、粘土などの細粒堆積物がレンズ状に挟まれる。

第48図のNo.3ボーリング柱状図は、氷上盆地の最下流部におけるものである。最下部の砂礫層がN値50以上を示すことから、標高およそ76m以浅の堆積物が、この付近における沖積層と考えられる。盆地南部の中央部と同様、ここでも沖積層の主体は砂礫であり、層厚は約9.5mと薄い。砂礫は黄灰色を呈し、0.5～5cmの礫からなる。砂礫層以浅の現地表面付近には、暗灰～暗青灰色の砂やシルトが1.5m



第48図　氷上盆地南部ボーリング柱状図

くらいの厚さで認められ、場所によっては厚さ５ｍの腐植物混じり粘土層が、砂礫層を覆って堆積している。氷上盆地南部の中央部および最下流部でみられるこうした砂礫層は、河床勾配が大きい河川の上流域においてよく堆積しており、これは扇状地を構成する層と考えられる。

一方、第48図のNo. ４ボーリング柱状図は、加古川の支流にあたる柏原川流域のもので、氷上盆地西側の山麓付近の堆積物を示している。この付近では、Ｎ値50以上の砂礫層が標高64ｍ以深にみられ、そ

の上位に堆積している沖積層はおよそ27mの厚さをもつ。これは、盆地南部の中央部や最下流部における沖積層と異なっている[20]。同様に、この付近の沖積層はシルト質砂や粘土、泥炭などの細粒堆積物と砂礫との互層からなる。これらの堆積物からみて、この付近では扇状地が断続的に形成され、その間に柏原川の氾濫による砂や粘土の堆積、および湿地の形成などが行われたと推定される。

3．犬岡遺跡における埋没微地形と堆積物

加古川は、氷上盆地南部のほぼ中央部において葛野川と合流する。葛野川は、現在人工堤防によってその流れを固定されており、平水時の水量が乏しいため、堤外地には河川敷がみられる。本遺跡の発掘地域は、加古川と葛野川の合流点から約600m遡った現葛野川左岸の河川敷に位置している。

第49図は、発掘地域の北壁、東壁およびセクション断面を観察して描いたパネルダイヤグラムである。これをみると、発掘地域では最下部に砂礫層が認められ、この上を細粒堆積物を中心とした層が被覆していることがわかる。最下部の砂礫層は赤褐色を呈し、径0.5～5cmの亜角礫を主体とする。この層は、既存のボーリング資料（第48図のNo.2ボーリング）の最上部に記載されている砂礫層に相当すると考えられる。ただし、ボーリング調査では遺跡の発掘現場などにおける詳細な地質観察が困難である。このため、発掘地域の最下部で観察された砂礫層の下底が、No.2ボーリングにおける砂礫層の下底に相当するとは限らない。

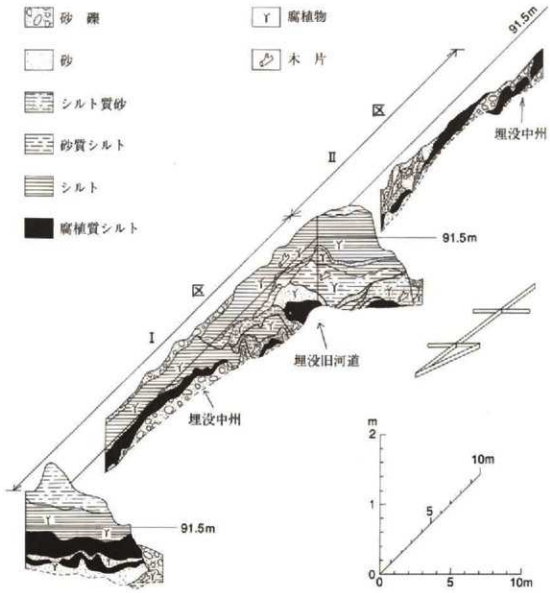
発掘地域では、この砂礫層が現地表面からおよそ0.6～1.5mの深さで観察され、上面の起伏は比較的大きい。発掘地域のⅠ区東部とⅡ区南部においては、砂礫層の上面が周囲より約1m高くなっており、ここは埋没中州となっている。Ⅰ区の埋没中州は西へ、またⅡ区のそれが北へ傾斜して検出される。これは、Ⅰ区の東側とⅡ区の南側に埋没中州の頂部があることを示しており、発掘地域ではこれらの中州の斜面が観察されたのである。

埋没中州上には、黒褐色の腐植質シルト層や腐植物を多く含む暗灰色のシルト層が、それぞれ20～50cmの厚さで堆積する。これらの層には、厚さ5～20cmの砂礫層や砂層、シルト質砂層などが挟まれている。このことから、中州が形成されて以降この付近は湿地となり、そこに間欠的に洪水がおよんだと考えられる。このような環境下で、中州は埋没していった。これらの堆積物のうち、発掘地域のⅡ区で観察される砂層中には、弥生時代中期の遺物が混入している。この砂層は、中州上にみられる腐植質シルト層に挟まれており、中州を覆った湿地が弥生時代の中期前後に形成されていたことを示す。

埋没中州間の凹地は、発掘地域のⅠ区南部からⅡ区の北部にかけて検出される。ここでは、埋没旧河道が認められる。埋没旧河道は、埋没中州上にみられる湿地堆積物のうち、最上位に位置する腐植物混じりシルト層から切り込まれており、湿地形成後に埋没中州間を流下した河跡と考えられる。埋没旧河道内では、上部と下部とで堆積物の様相およびその堆積状況が異なる。

下部では、埋没中州間に最初に形成された旧河道内に、灰褐色のシルト質砂層が認められる。さらに、このシルト質砂層を切って、旧河道が4回形成されている。これらの旧河道内には、古いものから順に、暗褐灰色のシルト層、灰褐色のシルト質砂層、暗灰褐色の腐植質シルト層と青灰色の砂層、および灰褐色の砂質シルト層が堆積する。シルト質砂層、シルト層、砂質シルト層には腐植物や木片が多く混入し、とくに腐植質シルト層が堆積する旧河道内は、湿地化していたと考えられる。

また、これらの旧河道は、新しく形成されたものほど河幅が小さい。埋没中州間に最初につくられた



第49図　調査区内パネルダイヤグラム

旧河道は、15m以上の幅をもつのに対して、5回目に流下した河跡は幅およそ7mである。これは、この埋没中州間を流れた河川の規模が、徐々に小さくなったことを示している。こうした旧河道をつくった河川は、周辺の微地形の分布状況からみて、北西から東南方向へ流れていたと推定される。以上のように埋没中州間の凹地では、河川が流下した後、その河道が細粒堆積物によって埋積されるといった現象が繰り返し行われた。2回目に形成された旧河道内の堆積物には弥生時代後期中頃の遺物が、また5回目につくられた旧河道内には、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺物が、完形の土器を含めて多数包含されている。これらのことから、5回におよぶ旧河道の形成と埋積は、弥生時代後期頃から古墳時代初頭までになされたと判断できる。

一方、埋没中州間にみられる旧河道内堆積物の上部には、暗灰褐色のシルト層が60～90cmの厚さで認められる。層中には、腐植物や木片が極めて多く混入しており、埋没中州間の凹地は旧河道が形成されて以降、湿地になったと考えられる。シルト層には、厚さ2～5cmの薄い砂層が挟まれており、湿地に

は小規模な洪水がおよんでいたことが伺える。このような湿地堆積物によって、旧河道は完全に埋没し、当時の地表面はほぼ平坦になった。さらに、その上位には褐灰色を呈する砂質シルト層が認められる。砂質シルト層は、湿地の上を覆った洪水堆積物であり、この層の堆積によって湿地は消滅したと考えられる。

葛野川の現河道に近い発掘地域の西部では、以上の各層が侵食されている[4]。これは、深さ1.6m以上にわたってなされており、古葛野川によるものと考えられる。こうして形成された凹地の中には、褐灰色のシルト層および灰褐色の砂礫層[5]が堆積している。シルト層は、発掘地域において部分的に観察され、層中には腐植物が混入する。他方、砂礫層はその上位に位置し、径10cm以下の亜角礫を主体としている。

4．地形環境の変遷

犬岡遺跡の発掘地域付近における地形環境は、次の7つのステージに基づいて変遷してきた（第50図）。

〔ステージ1〕　弥生時代中期以前、氷上盆地の南部では主に砂礫が堆積し、扇状地が広い範囲にわたって発達してきた。これにともなって、扇状地上の微高地である中州が形成された。

〔ステージ2〕　中州が形成されて以降、湿地がつくられた。湿地は、中州間の凹地だけでなく中州上にも広がり、腐植質シルトが堆積した。弥生時代中期頃には湿地に間欠的な洪水がおよび、砂や砂礫などが薄く堆積したものの、これ以後も湿地は存続した。ここでは、腐植質シルトや腐植物を多量に含んだシルトが、洪水堆積物を挟んで厚く堆積していった。これによって、中州は埋没した。

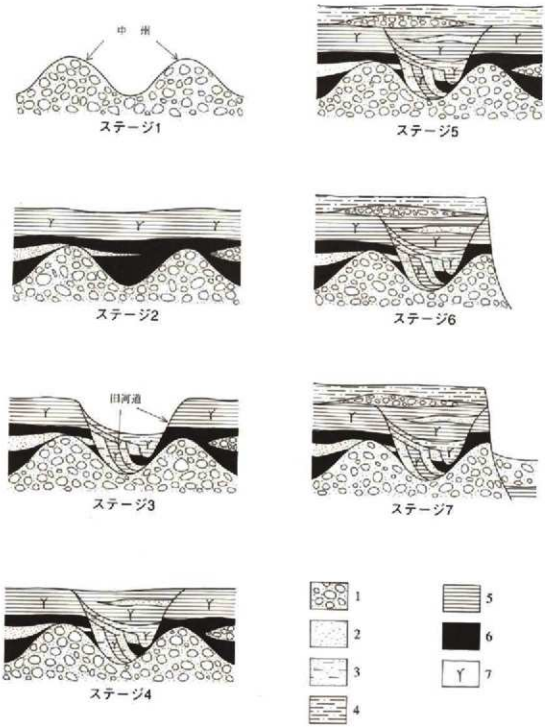
〔ステージ3〕　弥生時代の中期前後における湿地化の後、発掘地域にみられた埋没中州間には、古葛野川が比較的大きな規模で流下した。このため、埋没中州間にみられた湿地堆積物の大部分が侵食され、その後流路内の下部にはシルト質砂が堆積した。この時期以降古墳時代初頭までに、比較的大規模なこの旧河道内では、これより小規模な河川の流下と旧河道の埋積が、4回にわたって繰り返しなされた。当時、埋没中州間を流れる河川の規模は徐々に小さくなり、またこうした小規模な旧河道内は湿地化することが多かった。そのため、旧河道内は多くの場合、腐植質シルトや腐植物を多く含むシルトなどによって埋積された。このように、弥生時代後期頃から古墳時代初頭にかけては、発掘地域付近に古葛野川が頻繁に流下した時期であった。

〔ステージ4〕　古墳時代初頭以降になっても、埋没中州間では最初に形成された大規模な旧河道は完全に埋積されておらず、地表面が周辺に比してやや低かった。このため、ここには湿地が形成された。湿地には、ときおり河川の氾濫にともなって砂などが運ばれてきたものの、腐植物を多量に含むシルトが厚く堆積した。これによって、大規模な旧河道が埋積され、当時の地表面はほぼ平坦になった。

〔ステージ5〕　その後、河川の氾濫によって砂礫や砂質シルトなどが堆積した。これにともなって湿地は消滅した。

〔ステージ6〕　洪水堆積物が湿地を被覆した後、古葛野川が発掘地域の西部を流れるに至った。古葛野川は、これまでに堆積したシルトや砂などを下刻し、これによって深さ1.6m以上の凹地が形成された。

〔ステージ7〕　こうして形成された凹地の中に、その後シルトと砂礫が堆積し、ここは埋積されていった。



1.砂礫　2.砂　3.シルト質砂
4.砂質シルト　5.シルト　6.腐植質シルト
7.腐植物

第50図　地形環境の模式的な変遷

注

(1) 岡田篤正・高橋健一「由良川の大規模な流路変更」地学雑誌78-1，1969年.

(2) この理由としては，①これが氷上盆地の山麓付近における沖積層の特色であること，②柏原川流域が顕著な沈降地域であること，③氷上盆地南部の中央部と最下流部における沖積層がN値では判断できなく，より厚いものであることなどが考えられるが，現在のところ詳細は不明である。

(3) 第49図のパネルダイヤグラムでは，この砂礫層のすべてが描かれていない。

(4) この侵食によって，発掘地域の東部は段丘化したと推定される。すなわち，発掘地域東部に完新世段丘が，西部に現氾濫原が形成されたと考えられるのである。しかし，発掘地域が篠野川の堆外地にみられる河川敷に位置するため，微地形の観察が困難なことや，侵食によってできた崖が，発掘の対象地域外に延びていることなどの理由で，その詳細は明らかでない。

第6章　ま　と　め

第1節　土器について

1．はじめに

第1次～4次の4次にわたる調査において土器が比較的まとまって出土している。出土した土器は、弥生時代中期や古墳時代の土器も出土しているが、弥生時代後期の土器が大多数を占める。そこで、本節においては、当該期の土器に絞って検討を加えていくことにする。ただし、当節で検討する土器は、第3・4次調査出土土器を対象とする。

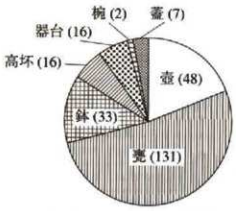
ところで、当遺跡出土の弥生時代後期の土器については、その出土状況から良好な一括資料とは言いがたいが、ある程度のまとまりをもっているものと考えている。そこでまず、これらの土器のについて、より具体的な時期の検討を行いたい。次に、第1章でも検討したように、当遺跡は加古川水系と由良川水系の接点、つまりいわゆる「加古川・由良川の道」[11]の中継点に位置する。そこで、当遺跡で出土した土器の地域性の検討を通して、上記の地理的特徴の反映が認められるのかについて検討を加えて行きたい。

なお、本節で対象とする土器は、統計処理も含めて、本報告に掲載した土器に限定する。

2．出土土器の量的特徴

具体的な時期の検討を行う前に、出土土器の量的分析を行っておきたい。

出土量を器種別にまとめたのが第51図である。これによると、甕が52％と過半数を占める。以下、壺（19％）・鉢（13％）・器台（6％）・高坏（6％）・蓋・椀の順となっている。



第51図　出土土器の器種構成

3．時期の検討

大岡遺跡の位置する永上盆地を中心とした地域における当該期の土器編年については、良好な資料を欠くため、全く手がつけられていない。旧丹波国の兵庫県側（以下、兵庫丹波）に対象範囲を広げてみても、当該期の資料は多いとはいえず、ましてや編年も確立していない。

そこで、一見したところ当遺跡と類似する土器が多く、加えて編年が比較的盛んに行われている京都丹波及び丹後地方の土器編年を参考に、当遺跡出土の土器の時期を検討していくことにしたい。当該地

城の土器編年については、青野西遺跡における編年[2]（以下「青野西編年」）、「弥生土器の様式と編年」における編年[13]（以下「様式編年」）、『京都府弥生土器集成』における編年[14]（以下「集成編年」）、古殿遺跡における編年[15]（以下「古殿編年」）・志高遺跡における編年[16]（以下「志高編年」）などがあり、これらの土器編年を参考に検討していくことにしたい。

ところで、当遺跡出土の土器をみると、丹後・京都丹波に一般的な丹後系土器[17]の他に畿内系および山陰系の土器が認められる。したがって、これらの土器を同じ土俵で検討するため、共通の段階設定を行い、この段階を基準に時期を検討していくことにしたい。段階設定にあたる前に、特に畿内を中心に細分化された編年案が出されているのに対して、丹波・丹後地方においては畿内のような細分化された編年案は出されていない。そこで、本論では、従来の第Ⅴ様式を前・中・後の3段階に分け、それに続く時期として庄内式の段階を位置付ける。報告者は庄内式を弥生時代の範疇で考える立場をとるため、結果として弥生後期を第1段階から第4段階の4段階に細分したい。そのおもな内容は以下の通りである。

第1段階　従来の第Ⅴ様式の前葉段階。短く直立する口縁部を有する高坏を基準とする。いわゆる西ノ辻Ⅰ式。

第2段階　従来の第Ⅴ様式の中葉段階。短く外反する口縁部を有する高坏を基準とする。また、長頸壺が出土する。いわゆる上六万寺式。

第3段階　従来の第Ⅴ様式の後葉段階。長く外反する口縁部を有する高坏を基準とする。広口長頸壺が出現する。いわゆる北島池下層式。

第4段階　従来の庄内式の段階。

第5段階　従来の布留式前葉段階。

また、山陰地方の土器編年については「青木編年」[18]を参考とする。以上3地域の編年と当遺跡における段階設定との対応関係をまとめたのが第19表である。この表をもとに、以下の検討を行っていくことにする。

具体的には、第3章で分類した各形式ごとに検討していくことにする。また、時期の検討にあたって、その前提として地域性についても考慮していきたい。

第19表　編年対象表

旧様式	段階	畿内	国	京都丹波			兵庫丹波		丹後
			青木	青野西	小西町田	志高	七日市	国領	古殿
第Ⅴ様式	1	西ノ辻Ⅰ式	青木Ⅱ			弥生Ⅴ期	Ⅴ		
	2	上六万寺式	青木Ⅲ(古)			弥生Ⅴ期		第1段階	Ⅰ
	3	北島池下層	青木Ⅲ(新)		Ⅰ	弥生Ⅴ期	Ⅵ	第2段階	Ⅱ
庄内	4	庄内式	青木Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ(古)	弥生Ⅴ期			Ⅲ
			青木Ⅴ・Ⅵ	Ⅱ 古 新	Ⅱ(新)			第3段階	
布留	5	古式	青木Ⅵ(古)			古式土師Ⅰ期	Ⅶ		Ⅳ

(1) 壺

壺A

壺A1については、上記の諸編年においてはその位置付けがなされていない。類例として、西木ノ部遺跡[19]、古殿遺跡、裏除遺跡[20]、および但馬の多田地小谷遺跡[21]で出土している。古殿遺跡では、古殿編年のⅢ－Ⅴ期に位置付けられる遺構から出土している。よって、壺A1については、第4段階から第5段階にかけての時期に位置付けられる。

壺A2は、志高遺跡、裏除遺跡、多田地小谷遺跡、および播磨の鍛冶屋・下川遺跡[22]で出土している。裏除遺跡、多田地小谷遺跡では包含層から出土しているため時期を特定できないが、志高遺跡では志高編年の古式土師器Ⅰ期に位置付けられる遺構から出土しており、第5段階に位置付けられる。

壺A3は、古殿遺跡SX－11出土資料に類例が認められ、古殿Ⅲ期に位置付けられている。他に類例として、七日市遺跡[23]、国領遺跡[24]、上板井遺跡[25]、裏除遺跡、林遺跡[26]、小西町田遺跡[27]で出土している。小西町田遺跡では、小西町田遺跡Ⅰ期の土壙SK03から出土している。以上から、当タイプは第3～5段階に位置付けられる。

壺B

壺B1は、畿内を中心に分布が認められる形式である。このため、丹後・丹波地域には類例は認められない。ただし畿内においても、口縁端部まで同じ特徴を有する資料は管見の限り認められない。口縁端部の形態は異なるが他の形態的特徴が一致するものとして、第3段階に位置付けられる安満遺跡9地区土壙3出土資料[28]が挙げられる。この他、裏除遺跡において、口縁部のみであるが類似する資料が認められる。包含層出土のため時期は特定できないが、第3－4段階の土器が共伴している。よって、第3－4段階に位置付けられる。

壺B2は、上板井遺跡、北金岐遺跡[29]、志高遺跡、および播磨の下三草・諏訪ノ下遺跡[30]など多くの遺跡で出土が認められる。志高遺跡出土資料につても、体部内面をヘラ削りにより仕上げるものが認められる。同遺跡編年において、志高弥生Ⅴ期、つまり第3段階に位置付けられている。よって、本タイプについては第3段階に位置付けたい。

壺B3は、七日市遺跡、北金岐遺跡、桑飼上遺跡[31]から出土している。七日市遺跡ではⅤ期に位置付けられている。桑飼上遺跡では竪穴住居跡から出土しており、第1～2段階に位置付けられている。北金岐遺跡においてはSD01から出土しており、第2段階の指標となる高杯B1と共伴していることから、第2段階に位置付けられる。以上から本タイプについては第1－2段階に位置付けたい。

壺C

本形式については、類例は認められない。ただし、口縁端部の特徴を除く基本的な形態は、畿内地域に一般的な直口壺に分類されるものである。寺沢薫氏の編年[32]によると、庄内式のなかでも新しい時期から出現するとされている。大岡遺跡出土の資料は底部を欠くため、時期を特定することはできないが、他の資料同様第4段階を中心とする時期に位置付けたい。なお、小西町田遺跡出土資料で壺E1に分類されている491（当該報告書　図版第54）が、口縁部のみしか残存しないため明確にできないが、本タイプになる可能性が考えられる。Ⅱ期（古）の土坑SK50から出土している。以上から、第4段階に位置付けたい。

第20表　遺跡別出土型式一覧表（1）

丹波（由良川）				南丹波		丹後													地域	
青野・西	三・宅	小西町田	志高	北金岐	南金岐	古殿	桑飼上	大山墳墓群	橋爪	林	裏陰	桑原口	三重	正垣	谷内	西谷墳墓群	帯城墳墓群	犬岡遺跡		
						■					■							A1	壺	
			■								■							A2		
		■	■			■				■	■		■	■				A3	A	
											■							B1	壺	
■			■	■		■	■			■				■			■	B2		
				■	■		■											B3	B	
■																		壺	C	
■	■						■		■									D1	壺	
		■																D2		
■			■	■	■	■	■		■	■	■		■					D3	D	
			■	■		■												E1	壺	
■				■				■				■						E2	E	
																		壺	F	
																		G1	壺	
																		G2	G	
■			■			■					■							H1	壺	
■			■			■					■							H2	H	
						■												壺	I	

壺D

壺D1は、青野西遺跡[23]、古殿遺跡、桑飼上遺跡、および但馬の立石墳墓群[24]等から出土している。青野西遺跡では第4段階に位置付けられるSH32から出土している。桑飼上遺跡では、竪穴住居跡13から出土しており、古式中段階に位置付けられているが、共伴資料から判断すると、第Ⅴ様式の範疇に収まるのではないかと考えられる。

第21表　遺跡別出土型式一覧表（2）

地域		但馬				播磨（加古川中流域）						兵庫丹波				
犬岡遺跡		宮内	立石	多田地	東山墳墓群	下三草・諏訪ノ下	家原	鍛冶屋・下川	森本・上島原	大垣内	井原至山	七日市	国領	上板井	口阪本	西木部
壺	A1			■				■								■
	A2			■												
A	A3									■		■	■	■		
壺	B1															
	B2					■				■		■	■	■		
B	B3						■					■				■
壺	C							■								■
壺	D1		■				■				■		■			■
	D2	■								■		■				■
D	D3	■	■	■			■			■		■	■	■		
壺	E1		■					■				■		■		
E	E2							■					■	■		
壺	F											■				
壺	G1															
G	G2				■							■				
壺	H1							■				■				
H	H2										■	■				■
壺	I															

壺Ｄ２は、七日市遺跡、および但馬の出石宮内遺跡[25]で類例が認められる。七日市遺跡では旧河道２から出土しており、Ⅵ～Ⅶ期に位置付けられている。出石宮内遺跡出土資料は、包含層からの出土であるため時期を特定できない。この他、小西町田遺跡からも類似する資料が出土しているが、頸部が犬岡遺跡出土資料より長い傾向にある。当該遺跡においては小西町田遺跡Ⅱ期（古）に位置付けられている。以上から、本タイプについては第４－５段階と位置付けたい。

壺Ｄ３は、七日市遺跡、青野西遺跡、古殿遺跡、志高遺跡等多くの遺跡で類例が認められる。国領遺跡では、竪穴住居２・竪穴住居３から出土している。前者は壺Ｄ３ａに、後者は壺Ｄ３ｂに分類され、それぞれ第１段階・第２段階に位置付けられている。ただし、壺Ｄ３ａ資料については、口縁部が犬岡遺跡例より長い傾向にある。青野西遺跡出土資料は、壺Ｄ３ａに分類されるものであるが、ＳＫ13から単独で出土しているため、時期を特定できない。古殿遺跡ではＳＤ303から出土している。壺Ｄ３ａに分類され、古殿Ⅱ・Ⅲ期に位置付けられている。志高遺跡出土資料は壺Ｄ３ａに対応するもので、志高弥生Ⅴ期に位置付けられている。以上から、第３段階を中心とする第２～４段階に位置付けられる。

壺Ｅ

壺Ｅ１は、体部が長胴形をなし体部内面にヘラ削りを施す点が特徴としてあげられる。このような土器は、上板井遺跡、国領遺跡、志高遺跡、東山墳墓群[24]、立石墳墓群、鍛冶屋・下川遺跡などに類例が認められる。特に立石墳墓群出土資料は、犬岡遺跡出土資料と形態・技法的特徴が酷似する。志高遺跡では志高弥生Ⅴ期に位置付けられている。よって、本タイプについては第３～４段階に位置付けられる。

壺Ｅ２については、国領遺跡、上板井遺跡、青野西遺跡、北金岐遺跡をはじめとして、丹後・丹波・但馬の各地域から出土している。第２段階の指標となる型式である。

壺Ｆ

類例は、七日市遺跡ＳＢ31出土資料（57）の１点に限られる。当該遺跡においては、Ⅴ期に位置付けられている。よって本型式は第１～２段階と考えたい。

壺Ｇ

当型式より口頸部が長いタイプは、七日市遺跡、林遺跡、橋爪遺跡[25]等で出土しているが、当型式と同じものは認められない。あえて類似例を指摘するなら、東山墳墓群出土例があげられる。この他、同墳墓群出土の73（同報告第76図）も比較的類似するが脚部の形態が異なる。これらの資料は、報告では後期前半に位置付けられていることから、犬岡遺跡出土資料についても、ほぼ同時期と考えたい。

壺Ｈ

壺Ｈ１は、畿内を中心に広範囲に分布するタイプで、七日市遺跡、青野西遺跡、古殿遺跡、志高遺跡などから出土している。七日市遺跡ではⅥ期～Ⅶ期とされる旧河道２から出土している。青野西遺跡では布留式に位置付けられる９号住居跡から、志高遺跡でも布留式に位置付けられている。よって本タイプについては第５段階を中心とする時期に位置付けたい。

壺Ｈ２は、七日市遺跡、古殿遺跡、裏除遺跡等に類例が認められる。七日市遺跡ではⅤ期の遺構から出土している。古殿遺跡、裏除遺跡出土資料は、包含層から出土しているため時期を特定できない。よって七日市遺跡出土例をもとに、第２段階を中心とした時期に位置付けたい。

壺Ｉ

古殿遺跡で出土しているが、包含層出土のため時期を特定できない。

(2) 意彩土器

壺A

壺A1は、七日市遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡、古殿遺跡等多くの遺跡から出土しており、第4段階の標準型式となっている。

壺A2は、古殿遺跡SK03で出土し、古殿Ⅰ～Ⅱ期に位置付けられている。

壺A3は、桑飼上遺跡、小西町田遺跡、および加古川中流域の家原遺跡[28]で類例が認められる。桑飼上遺跡では竪穴住居17で出土しており、第3～4段階に位置付けられている。また小西町田遺跡では、第4段階のⅡ期（古）のSK14にともなって出土している。よって第3～4段階に位置付けたい。

壺A4は、北金岐遺跡で第3～4段階の遺構にともなって出土している。

壺A5も、北金岐遺跡で第3～4段階に位置付けられるSK09から出土している。

壺A6は、七日市遺跡、北金岐遺跡、三宅遺跡[29]、小西町田遺跡に類例が認められる。北金岐遺跡出土資料は第3～4段階のSK09から出土している。小西町田遺跡では、小西町田Ⅰ期のSD19・SD20、同Ⅱ期（古）のSK04から出土している。以上から、第3～4段階に位置付けられる。

壺A7は、七日市遺跡、国領遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡、北金岐遺跡に類例が認められる。七日市遺跡では1期のSB26から出土している。小西町田遺跡ではⅡ期（古）のSK50、Ⅱ期（新）のSD21から出土している。以上から、第4段階を中心に第3～5段階に位置付けたい。

壺B

壺B1は、三宅遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡、北金岐遺跡で出土している。三宅遺跡では第4段階に位置付けられている。小西町田遺跡では、Ⅱ期（新）のSK14・Ⅰ期のSK02から出土している。以上から、第4段階を中心に第3～4段階に位置付けたい。

壺B2は宮内遺跡から出土しているが、包含層から出土しているため時期を特定することはできない。他の包含層出土土器から判断して第4～5段階と考えられる。

壺C

壺C1は、七日市遺跡、国領遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、古殿遺跡、志高遺跡など多くの遺跡で出土している。これらの類例のなかで、国領遺跡出土資料が同遺跡第2段階の竪穴住居7から出土している。他の遺跡出土資料については、第4段階を中心とする時期の遺構に伴って出土している。よって、第3～4段階に位置付けられる。

壺C2は、七日市遺跡、口酒本遺跡[30]、三宅遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡、北金岐遺跡、志高遺跡、桑飼上遺跡、橋爪遺跡など多くの遺跡で類例が出土している。七日市遺跡ではV期に位置付けられるSB31から、小西町田遺跡ではⅡ期（古）に位置付けられるSK08から、桑飼上遺跡では第5段階に位置付けられる土器溜まり3・土器溜まり4から出土している。ただし、土器溜まり3については、後述する壺C3が共伴していることから第4段階まで上がるのではないかと考えられる。よって本タイプについては第4段階を中心とした第3～5段階に位置付けたい。

壺C3は、七日市遺跡、三宅遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、志高遺跡、桑飼上遺跡、橋爪遺跡から出土が認められる。本タイプは北金岐遺跡SD01出土資料・桑飼上遺跡土器溜まり3出土資料に代表されるように、庄内式土器に類似するタイプあるいは庄内式土器が伴う。よって、本タイプは第4段階

第22表　遺跡別出土型式一覧表 (3)

丹波（由良川）				南丹波		丹後													地域	
青野西	三宅	小西町田	志高	北金岐	南金岐	古殿	桑飼上	大山墳墓群	橋爪	林	裏陰	桑原口	三重	正垣	谷内	西谷墳墓群	帯域墳墓群	大岡遺跡		
																		A1	甕	
																		A2		
																		A3		
																		A4		
																		A5		
																		A6		A
																		A7		
																		B1	甕	
																		B2		B
																		C1	甕	
																		C2		
																		C3		
																		C4		
																		C5		
																		C6		C
																		C7		
																		D1	甕	
																		D2		D
																		底部		A
																		底部		B
																		底部		C

第23表　遺跡別出土型式一覧表 (4)

地域		但馬				播磨（加古川中流域）						兵庫丹波				
大岡遺跡		宮内	立石	多田地	東山墳墓群	下三草・諏訪ノ下	家原	鍛冶屋・下川	森本・上島原	大垣内	井原至山	七日市	国領	上板井	口阪本	西木部
甕 A	A1	■	■									■		■		
	A2			■									■	■		
	A3						■									
	A4	■		■								■		■		■
	A5															
	A6											■			■	
	A7						■					■	■			■
甕 B	B1									■		■				
	B2	■														
甕 C	C1		■	■			■		■	■		■	■	■		■
	C2		■			■	■	■	■	■	■	■			■	■
	C3			■			■	■				■				■
	C4														■	
	C5															
	C6			■				■								■
	C7									■		■	■			
甕 D	D1			■												
	D2			■				■	■	■						■
底部 A		■		■			■		■	■	■		■	■		■
底部 B			■			■	■		■	■	■				■	■
底部 C												■	■		■	

に位置付けられる。

甕C4は、口阪本遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、橋爪遺跡から出土している。当タイプについては、小西町田遺跡、北金岐遺跡などで甕C3などと共伴しているように、甕C3と技法的に密接に関連すると考えられることから、甕C3と同じ時期、第4段階に位置付けたい。

甕C5は、管見の限り類例は認められない。ただし、口縁端部の形態的特徴及び本遺跡において土器群Cなどで甕C1等と共伴していることから、第4段階を中心とした時期に位置付けたい。

甕C6は、古殿遺跡、桑飼上遺跡に類例が限られる。古殿遺跡においては、古殿Ⅱ～Ⅴ期のSD10（第2次調査）、同Ⅲ－Ⅳ期のSD302（第3次調査）から出土している。よって、第3段階から第5段階を中心とした時期に位置付けられる。ただし、本タイプの口縁部の形態は布留式甕の影響と考えられることから、より新しい時期、つまり第5段階に位置付けられるのではないかと考えられる。桑飼上遺跡でも第5段階の土器溜まり4から出土している。

甕C7は、七日市遺跡、国領遺跡、青野西遺跡、大山墳墓群[32]、桑飼上遺跡、橋爪遺跡など多くの遺跡で類例が認められる。七日市遺跡ではⅤ期のSB31から、青野西遺跡では青野西Ⅰ式の6号住居跡から、桑飼上遺跡では3～4段階の竪穴式住居跡16から出土している。以上の例からは時期を特定できないが、第2～4段階に位置付けられ、特に第4段階にその中心があるのではないかと考えられる。

甕D

甕D1と甕D2の識別、特に甕D1の判断は困難であるが、甕D1については形態的に「青木編年」のⅤ・Ⅵ期に対応する。類例としては、七日市遺跡、三宅遺跡、青野西遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、古殿遺跡、林遺跡、橋爪遺跡、多田地小谷遺跡、宮内遺跡で認められる。甕D1と断定できる資料は少ない。多田地小谷遺跡のように第5段階まで下がる資料も認められるが、石井氏が指摘されだ[30]ように、第4段階の資料が多い。

甕D2については、甕D1の影響下にあることから、甕D1とほぼ同じ時期、もしくは後続する時期と考えられる。

(3) 底　　部

底部A

甕A1・A4の底部と考えられる。よって、両タイプの時期、つまり第3～4段階と考えられる。

底部B

口阪本遺跡、三宅遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、南金岐遺跡[33]、立石墳墓群に類例が認められる。小西町田遺跡のⅡ期（古）段階に位置付けられるSK08出土例、北金岐遺跡の第4段階のSD01出土例から、第4段階を中心とした時期に位置付けられる。

底部C

古殿遺跡、桑飼上遺跡、小西町田遺跡、青野西遺跡に類例が認められる。当タイプは、底部Bが丸底化したものと考えられ、底部Bより新しい傾向にあるものといえる。上記の類例においても、底部Bとほぼ同時期ないしそれより新しい時期を示している。したがって、第4～5段階と位置付けたい。

(4) 鉢

鉢A

A1は、管見の限り類例は認められない。あえてそれに近い例を挙げると、古殿遺跡において古殿Ⅱ－Ⅲ期のSD04（第2次調査）出土資料があげられる。大岡遺跡出土資料と大きく異なる点は、口縁部外面に擬凹線を施している点である。このような口縁部に擬凹線を施す特徴は、壺・甕・高坏・器台と丹波・丹後地方に共通する特徴で、第4段階を中心とした時期に認められ、その後擬凹線を施さなくなるようである。したがって、本型式についても、上記の流れのなかで捉え、第4段階～第5段階と位置付けたい。

A2は、七日市遺跡、古殿遺跡、小西町田遺跡、南金岐遺跡で類例が認められる。古殿遺跡ではⅡ－Ⅲ期のSD04（第2次調査）、小西町田遺跡では小西町田Ⅱ期（古）のSK50から、それぞれ出土している。以上から第3－4段階に位置付けられる。

鉢B

七日市遺跡、古殿遺跡、裏除遺跡に類例が認められる。七日市遺跡ではⅥ期のSB14から出土している。また、古殿遺跡出土資料は、形態的に若干異なるが、Ⅲ～Ⅴ期のSD02から出土している。また、2次口縁に擬凹線を施した例が内場山城跡2号土器棺に認められ、[24]庄内式後半に位置付けられている。2次口縁の擬凹線からナデ消しの段階への変化は庄内期（第4段階）のなかでおこるとされていることから、第4段階まで遡る可能性も考えられる。以上から、第4段階以降に位置付けられる。

鉢C

播磨の大垣内遺跡[29]に類例が認められる。同遺跡溝1から出土しているが、弥生時代中期・古墳時代中期～後期の土器と共伴している。このため時期を特定することは困難である。ただし、これらの資料の中に第4段階の土器がまとまって認められることから、この土器についても、当該期と位置付けられるのではないかと考えられる。

鉢D

類例は、七日市遺跡、上板井遺跡、国領遺跡、小西町田遺跡、北金岐遺跡、南金岐遺跡、青野西遺跡等多くの遺跡で認められる。七日市遺跡ではⅥ－Ⅶ期の旧河道2で、小西町田遺跡ではⅠ期のSK03・SD39でそれぞれ出土している。以上から、第3－4段階に位置付けられる。

鉢E

七日市遺跡、上板井遺跡、古殿遺跡、志高遺跡から出土している。志高遺跡古式土師器Ⅰ期のSK86126出土例、七日市遺跡Ⅵ～Ⅶ期の旧河道2出土例から、第4－5段階に位置付けられる。

鉢F

古殿遺跡、志高遺跡、三重遺跡、上板井遺跡、国領遺跡から出土している。国領遺跡では同遺跡第1段階の竪穴住居2から、古殿遺跡ではⅢ～Ⅴ期のSD02から出土している。よって、第2～5段階に位置付けられる。

第24表　遺跡別出土型式一覧表 (5)

地域	大岡遺跡	
北丹波	青野西	
	三宅	
	小西町田	
	志高	
南丹波	北金岐	
	南金岐	
丹後	古殿	
	桑飼上	
	大山墳墓群	
	備爪	
	林	
	表陰	
	桑原口	
	三重	
	正垣	
	谷内	
	西谷墳墓群	
	帯城墳墓群	
大岡遺跡	A1	鉢
	A2	A
	鉢	B
	鉢	C
	鉢	D
	鉢	E
	鉢	F
	鉢	G
	鉢	H
	椀	A
	椀	B
	A1	高
	A2	坏
	A3	A
	B1	高
	B2	坏
	B3	B
	C1	高
	C2	坏
	C3	C

第25表　遺跡別出土型式一覧表（6）

地域		但馬					播磨								摂津				
遺跡	型式	宮ノ内	立石	多田地	東山墳墓群		土井ノ内	下三草・諏訪ノ下	家原	鍛冶屋・下川	森本・上鳥羽	大垣内	井原至山		七日市	国領	上板井	口酒本	西求部
鉢	A1																		
A	A2							■				■			■	■	■		■
鉢	B									■					■				■
鉢	C											■			■				■
鉢	D							■				■			■	■	■	■	■
鉢	E														■		■		
鉢	F											■				■	■		
鉢	G																		
鉢	H						■	■					■		■		■		■
椀	A														■				
椀	B									■									
高坏	A1	■	■					■				■			■		■		■
	A2							■				■							■
A	A3																		■
高坏	B1							■				■	■		■	■	■		■
	B2								■									■	■
B	B3							■			■								
高坏	C1										■	■	■		■		■		■
	C2																		
C	C3										■								■

鉢G

類例は管見の限り認められない。類似する資料として、北金岐遺跡でⅠ期のＳＤ01から出土している。この資料をもとに、第４段階を中心とする時期を考えたい。

鉢H

七日市遺跡、上板井遺跡、古殿遺跡、志高遺跡、北金岐遺跡など多くの遺跡から出土している。七日市遺跡ではⅥ～Ⅶ期の旧河道２、古殿遺跡でⅢ・Ⅳ期のＳＤ303（第３次調査）出土例から、第３～５段階に位置付けられる。特に、底部の形態は甕Ｃの底部の形態と基本的に一致するものと考えられることから、第３～４段階に中心があるものと考えられる。

〔5〕 椀

椀A

形態的に若干異なるが、類例として七日市遺跡のⅤ～Ⅵ期のＳＢ49出土資料がある。当該資料のみでは時期を特定することは困難である。精製土器であることから、同様に精製土器である高坏Ｃ３・器台Ｆとほぼ同じ時期と考えたい。

椀B

類例として、古殿遺跡、裏除遺跡、鍛冶屋・下川遺跡から出土している。古殿遺跡出土資料はⅡ・Ⅲ期とされるＳＫ03（第２次調査）から出土していることから、本タイプについては第３～４段階と位置付けたい。また、鍛冶屋・下川遺跡では、竪穴住居跡６から出土しているが、その時期は第４～５段階と考えられる。以上から、第３～４段階と位置付けたい。

〔6〕 高　　坏

高坏A

高坏Ａ１は、丹後・丹波・但馬地方一帯に一般的で、第３～４段階を中心とする時期に位置付けられている。よって、本遺跡出土資料についても当該期に位置付けたい。

高坏Ａ２は、小西町田遺跡、大垣内遺跡、家原遺跡で類例が認められる。小西町田遺跡においてはⅡ期（新）のＳＫ14から出土している。また、大垣内遺跡では土壙内から出土しているが、共伴遺物から第４段階と考えられる。以上から、鉢Ａ１での検討結果を考慮に入れると、第４段階を中心とした時期に位置付けられる。

高坏Ａ３については、類例は認められない。ただし本タイプは、高坏Ａ２の口縁部のつくりと基本的に一致する。よって、本タイプの時期も高坏Ａ２と同時期あるいはそれより新しい時期と考えたい。

高坏B

高坏Ｂ１は、第２段階の指標とした墾式である。

高坏Ｂ２は、第３段階の指標とした墾式である。

高坏Ｂ３は、第５段階以降に位置付けられる。裏除遺跡で類例が認められるが、包含層出土のため時期を特定できない。ただし、共伴する土器から判断するとほぼ第５段階と考えられる。

高坏C

高坏C１は、脚裾部を欠くが、大垣内遺跡、加古川上流域の至山遺跡[06]に類例が認められる。大垣内遺跡では１号住居跡から出土しており、共伴する高坏から判断して第２段階に位置付けられる。また、至山遺跡では、包含層からの出土であるが、同層から大園遺跡高坏Ｂ１が出土している。

以上から、本型式については第２段階を中心とした時期に位置付けたい。

高坏Ｃ２は、青野西遺跡で類例が認められる。ＳＫ５から出土しているが、良好な共伴資料がないため時期を特定できない。この他、小西町田遺跡に類似する資料が認められ、小西町田Ⅱ（古）期のＳＫ10から出土している。よって当資料から第４段階を中心とする時期を考えたい。

高坏Ｃ３は、志高遺跡、古殿遺跡、裏筈遺跡で類例が認められる。志高遺跡では、第５段階のＳＫ86126から、古殿遺跡ではⅡ・Ⅲ期のＳＤ03から出土している。両資料から第４～５段階と考えられる。

(7) 器　　台

器台A

器台Ａ１・器台Ａ２ともに、丹波・丹後地方の多くの遺跡で出土している。

器台Ａ１については、古殿遺跡でのⅡ・Ⅲ期のＳＤ04出土例、志高遺跡での志高弥生Ⅵ期のＳＫ86256出土例から、第３～４段階と考えたい。

器台Ａ２についても、志高遺跡での志高弥生Ⅵ期のＳＫ86255出土例、古殿遺跡でのⅢ～Ⅴ期のＳＤ02出土例から、４～５段階と考えたい。

器台B

本型式については、管見の限り類例は認められない。ただし、類似資料が林遺跡４号住居跡出土資料に認められ、第５段階に位置付けられる。よって、本型式についても第５段階と位置付けたい。

器台C

上板井遺跡、国領遺跡、大山墳墓群、小西町田遺跡で類例が認められる。国領遺跡では同遺跡第２段階の竪穴住居３から、小西町田遺跡ではⅡ期（古）のＳＫ14から出土している。以上から、第３～４段階に位置付けたい。

器台D

七日市遺跡、南金岐遺跡、志高遺跡で出土している。七日市遺跡ではⅥ～Ⅶ期の旧河道２から出土している。金岐遺跡出土資料についても時期を特定できないが、共伴資料は２～３段階のものである。よって本型式についても当該期を考えたい。

器台E

本型式についてはすでに岸岡貴英氏によって丹波，丹後地方における集成がなされている[03]。これによると、古殿遺跡ＳＸ11出土資料・西谷２号墓出土資料が本型式に該当するものと考えられる。これらの資料は、第４段階に位置付けられている。よって本型式についても、より細かな時期差を内包するようであるが、第４段階を中心とした時期を考えたい。

第26表　遺跡別出土型式一覧表（7）

北丹波				南丹波		丹後												地域	
青野西	三宅	小西町田	志高	北金岐	南金岐	古殿	桑飼上	大山墳墓群	橋爪	林	裏陰	桑原口	三重	正垣	谷内	西谷墳墓群	帯城墳墓群	犬岡遺跡	
																		A1	器台A
■		■	■			■	■	■	■	■	■		■	■		■		A2	
										■								器台B	
		■				■	■	■	■		■							器台C	
			■		■													器台D	
■				■		■										■		器台E	
						■												器台F	
			■			■	■		■		■	■	■	■				A1	蓋A
■		■	■			■	■		■		■	■		■				A2	
							■				■							蓋B	

器台F

古殿遺跡に類例が認められ、Ⅰ・Ⅱ期のＳＫ03（第２次調査）から出土している。この他、類例として受部が坏形を呈するものが多くの遺跡で出土しており、第４～５段階に位置付けられている。以上から、第３～５段階に位置付けたい。

(8)　蓋

蓋A

蓋Ａ１は、丹波・丹後地域において一般的に認められる。国領遺跡では第２段階の竪穴住居３から、古殿遺跡ではⅢ～Ⅴ期のＳＤ02からそれぞれ出土している。よって、当遺跡出土資料についても第３～５段階に位置付けたい。蓋Ａ２については、蓋Ａ１とほぼ同様の分布状況を示す。また、各遺跡において蓋Ａ１との共伴例が多いことから、蓋Ａ１とほぼ同じ時期と考えたい。

蓋B

桑飼上遺跡竪穴住居跡17に類例が認められ、第３～４段階に位置付けられている。よって、本形式についてもほぼ同様の時期を考えたい。

第27表　遺跡別出土型式一覧表（8）

地域		但馬				播磨								摂津	丹波			
大岡遺跡		宮内	立石	多田地	東山墳墓群	土井ノ内	下三草・滝筋ノ下	家原	鍛冶屋・下川	森本・上鳥羽	大垣内	井原至山		七日市	国領	上板井	口酒本	西本部
器台A	A1	■	■	■										■				
	A2			■													■	■
器台B																		
器台C											■					■		■
器台D						■	■							■				
器台E														■				
器台F																		■
蓋A	A1			■										■	■	■	■	■
	A2			■										■		■	■	
蓋B																		

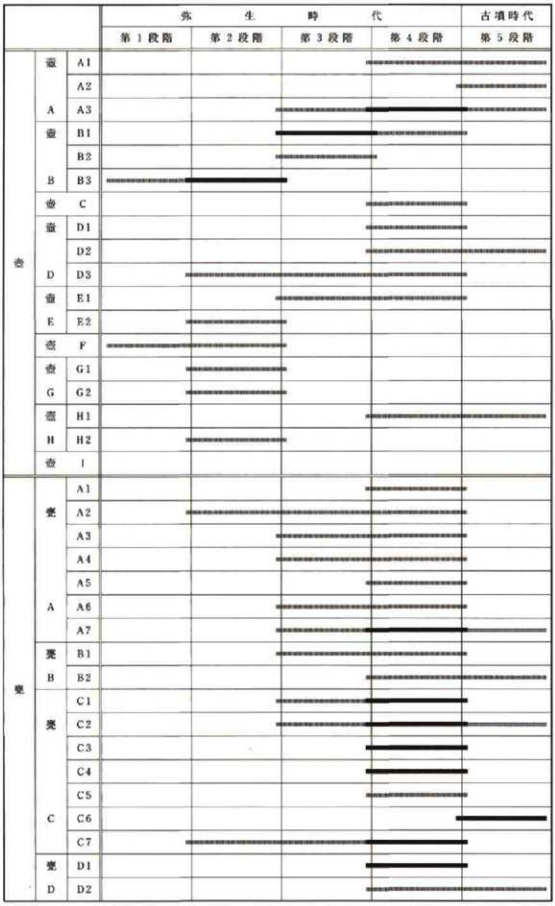
(9) 小　　結

以上の検討結果をまとめたのが、第28表と第29表である。太線で示した段階が各型式で考えられる時期幅の中でも特にその中心となる段階と考えている。これらの表から、当遺跡出土の弥生時代後期資料は第2段階から第5段階にかけてと、比較的時期幅をもつことがわかる。しかし、太線の集中する時期をみると第4段階にあるものが目立つ。また、他の網線についても、当段階にあるものが多い。よって、当段階に本遺跡出土資料の時期的中心があるものと考えられる。この他、第4段階とは連続しない第2段階にも太線が認められる。また網線も少なからず認められる。

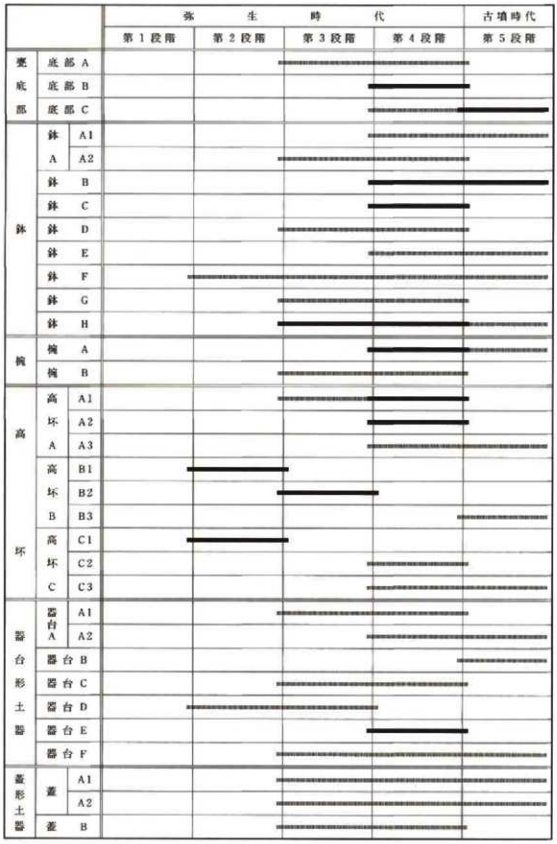
したがって、第2段階にももう一つの時期的な中心があるものと考えられる。そしてこの第2段階と第4段階の差は、個々の土器の出土層位から判断すると、溝状の落ち込みの土層断面（第11図）における5～8層と9層との差に対応するものと考えられる。第3段階については、当段階の示準となる高坏B2の存在等から、第2段階および第4段階の各型式のもつ時期幅が及ぶものとして理解するのではなく、第2段階に継続して当該期も存在したものと考えたい。第5段階についても同様である。

以上から、当遺跡出土資料は基本的に、第2～5段階と時期的に連続するものであり、特に第4段階にその中心があるものといえよう。

第28表　型式別消長表 (1)



第29表　型式別消長表 (2)



4．地域性の検討

ここでは、前項の検討結果をふまえ、量的に圧倒的に多い第4段階の資料を中心に検討を加えていくことにしたい。

対象とする資料には少なくとも丹波・丹後、畿内、山陰の三地域の地域的特徴をもつ土器が認められることは明らかである。また、個々の土器をみても、各部位に異なる地域の地域的特徴が折衷あるいは影響しあっているのではないかと考えられる例が認められる。そこでまず、上記の検討を行っていく上で、「丹後型」・「畿内型」・「山陰型」土器について各器種ごとに特徴をを挙げ、それをもとに検討していくことにしたい。

なお、これから検討していくにあたって、各地域性を明確に指摘できるものもあるが、大半はその可能性があるのではないかという程度のニュアンスの指摘にとどまることを断わっておく。

(1) 壺

「丹後型」古殿遺跡ＳＸ－11出土資料を典型例とする。口縁部は複合口縁をなし、二次口縁外面に擬凹線を施す。後出するものは擬凹線を施さずにナデ調整のみである。体部は、外面をヘラミガキで、内面をヘラ削りで仕上げる。内面をハケ調整により仕上げるのは一般的ではない。底部は甕の底部Ａタイプである。

「畿内型」いわゆる二重口縁壺・広口壺などを典型例とする。各タイプとも、体部内面にヘラ削りを施す例は一般的ではない。

「山陰型」いわゆる「鍵尾式」に代表される形式である。口縁部は複合口縁をなす。体部は、内面を横方向のヘラ削りにより成形する。底部は尖底傾向の丸底である。

壺Ａ　壺Ａ１・Ａ２については、口縁部から頸部にかけての特徴は「山陰型」の特徴を示す。ただし、胎土そのものは当該地位域からの搬入ではない。

壺Ａ３については、二次口縁に擬凹線を施すこと、類例が丹波・丹後地域の多くの遺跡に認められる（第20・21表）ことから、「丹後型」の範疇で捉えられるものと考えられる。ただし、体部内面をハケ調整で仕上げる点については「畿内型」の影響と考えたい。

壺Ｂ　壺Ｂ１については、口縁部外面に波状紋を施すこと、頸部から体部・底部の特徴から「畿内型」の範疇で捉えられるものと考えられる。

壺Ｂ２については、壺Ａ３と同様の理由から「丹後型」の範疇で理解したい。ただし体部内面のハケ調整については、「畿内型」の影響と考えられる。

壺Ｂ３については、丹波・丹後地域における類例は多いとはいえないが少なからず認められること、口縁部外面に擬凹線を施していることから、「丹後型」の範疇で捉えられるのではないかと考えられる。ただし84（第18図）のようなタイプについては、口縁部外面に波状紋を施していることなどから、「畿内型」の影響が考えられる。

壺Ｃ　基本的な特徴は「畿内型」の範疇で捉えることができる。しかし、口縁部をわずかにつまみ上げる点、および体部内面をヘラ削りで仕上げる点に「丹後型」の影響が認められるのではないかと考えられる。

第30表　壺形土器の地域性分析

		畿内的（Aタイプ）					丹波・丹後的（Bタイプ）					山陰的（Cタイプ）				
		口縁部	体部			底部脚部	口縁部	体部			底部脚部	口縁部	体部			底部脚部
			形態	外面	内面			形態	外面	内面			形態	外面	内面	
壺	A1				■	■	■					■				
	A2				■	■	■					■				
A	A3				■	■	■									
壺	B1	■	■	■	■	■										
	B2				■		■									
B	B3	■					■									
壺	C						■			■						
壺	D1	■								■						
	D2						■			■						
D	D3			■						■	■					
壺	E1						■	■		■	■					
E	E2	■														
壺	F	■														
壺	G1						■	■			■					
G	G2							■								
壺	H1	■	■	■		■										
H	H2	■	■	■		■				■						
壺	I															

壺D　壺Ｄ１については、形態的には後述する「畿内型」甕の特徴と一致するもので、本タイプについても「畿内型」の範疇で捉えたい。ただし、体部内面をヘラ削りにより仕上げる点は、「丹後型」の影響と考えられる。

壺Ｄ２については、口縁部を二重口縁を意識したナデによりつまみ出す点、体部内面にヘラ削りを施す点は丹後的である。

壺Ｄ３については、後述する「丹後型」甕の体部に口頸部を付けたものである。口頸部についても類例が丹波・丹後地域に多く認められ、口縁部の成形に二重口縁を意識している点が認められる。よって、本タイプについても「丹後型」の範疇で捉えることができる。ただし、体部外面に叩き成形痕が顕著に認められる点は、「畿内型」の影響と考えたい。

壺E　壺Ｅ１については、形態的に類似するものが丹波・丹後地域に少なからず認められることや、96のように体部内面にヘラ削り調整を施すことなどから「丹後型」の範疇で理解したい。

壺Ｅ２については、壺Ｅ１と同じく当該地域に少なからず分布が認められるが、「畿内型」壺の代表的壺式である。

壺F　当型式についても壺Ｅ２と同様に理解したい。

壺G　壺Ｇ１・壺Ｇ２ともに丹後・丹波地域に類例がわずかに認められる程度である。しかし、①壺Ｇ１に擬凹線が施されていること、②志高遺跡において「鉢Ｃ」と分類されている資料が当型式の体部と同タイプであること、③本型式より口縁部の長い脚付壺が但馬ではあるが若宮墳墓群４号墓出土資料[49]などに認められること、の３点から「丹後型」の範疇で捉えたい。

壺H　壺Ｈ１・壺Ｈ２ともに畿内に一般的な型式であり、壺Ｅ２・壺Ｆと同様に考えたい。ただし、壺Ｈ２の100については体部内面にヘラ削りが認められる。このような技法は、丹波・丹後地域に類例が認められ、丹後的特徴と判断される。

(2) 甕

「丹後型」いわゆる丹後型甕で、「様式編年」の「丹後・丹波Ⅴ－４様式」の甕を典型例とする。口縁部は複合口縁をなし、二次口縁外面に擬凹線が施される。もくしは、ナデ調整により仕上げる。体部内面にヘラ削りが施され、外面には叩き成形痕が認められない。底部は底部Ａの特徴を示す。

「畿内型」「庄内式甕」及び「伝統的Ⅴ様式甕」(以下「Ⅴ様式甕」) が該当する。

「山陰型」いわゆる「鍵尾式」に代表される甕である。「丹後型」甕に対して立ち上がりの長い二次口縁が特徴の複合口縁、体部外面のハケ調整、内面のヘラ削り、尖底を特徴とする。

甕Ａ　甕Ａ１・Ａ４は典型的な「丹後型」である。

甕Ａ２・Ａ３・Ａ５・Ａ６・Ａ７については、形態的特徴は「丹後型」の特徴を示すが、体部内面にヘラ削り痕が認められないか、ヘラ削り後ハケ調整もしくはナデ調整で一部ないし全体を消している。また外面にも叩き成形痕が比較的顕著に認められる。これらの特徴は「畿内型」の影響と考えたい。

甕Ｂ　甕Ｂ１については、基本形態は「畿内型」の特徴を示す。しかし、口縁部をわずかにに受け口状にする点は複合口縁を意識しており、「丹後型」の影響が認められる。また体部内面のヘラ削りおよび底部の形態が「底部Ａ」タイプであることについても、丹後的である。

甕Ｂ２については、口縁部の形態は「山陰型」の影響が認められる。ただし、体部の形態は山陰的ではなく、どちらかといえば「畿内型」に近い。また体部内面のヘラ削りについては、上半を斜め方向に施しており、「山陰型」というよりどちらかといえば「丹後型」に近い。よって、「丹後型」「畿内型」「山陰型」の折衷型と考えたい。

甕Ｃ　甕Ｃ１は基本的には「畿内型」甕の典型である。しかし、①体部内面のヘラ削り痕、②一部に「底部Ａ」タイプの底部が認められる、③体部外面のハケ調整がほぼ全面に施されている、の３点に「丹後型」の影響が認められる。

甕Ｃ２は典型的な「畿内型」甕と考えたい。ただし、191から底部Ａタイプの存在が認められ、一部「丹後型」の影響も認められる。

甕Ｃ３は、口縁部は「庄内式甕」の影響と考えたい。しかし、この口縁部と底部の形態とは共存しない。体部形態も同様である。よって、本タイプは、体部以下は「丹後型」、口縁部は「畿内型」の折衷型と考えたい。ただし、体部内面のハケ調整については甕Ａと同様「畿内型」の影響と考えたい。

甕Ｃ４も「畿内型」の範疇で捉えたい。

甕Ｃ５は、類例が認められないため、出土例からは地域性を明確にできない。口縁部の形態は「畿内型」の、体部内面のヘラ削りは「丹後型」の影響と考えたい。また、本タイプは大型の甕であるが、このような大型の甕は、当該期には畿内には認められない。

甕Ｃ６は、口縁部は「布留式甕」もしくは「Ⅴ様式甕」の影響と考えたい。体部外面の叩き成形痕については「布留式甕」には認められず、「Ⅴ様式甕」の影響によるものと理解したい。

甕Ｃ７は、口縁部をわずかにつまみ上げ外面に擬凹線を施す点に「丹後型」の影響が認められる。しかし、口縁部の基本的な形態および体部内外面の特徴は「畿内型」の特徴を示している。なお甕Ｃ７ｂのように体部内面にヘラ削りを施す点は「丹後型」の影響が考えられる。

甕Ｄ　甕Ｄ１は「山陰型」の典型例として、甕Ｄ２は「山陰型」の強い影響が認められるタイプとして理解しているものである。

第31表　壺形土器の地域性

		畿内的（Aタイプ）					丹波・丹後的（Bタイプ）					山陰的（Cタイプ）				
		口縁部	体部			底部脚部	口縁部	体部			底部裏部	口縁部	体部			底部脚部
			形態	外面	内面			形態	外面	内面			形態	外面	内面	
壺	A1						■	■			■					
	A2			■	■		■	■			■					
	A3						■	■			■					
	A4						■	■	■	■	■					
	A5			■	■		■	■			■					
A	A6			■	■		■	■			■					
	A7			■			■	■			■					
壺	B1			■			■			■	■					
B	B2			■			■			■		■				
壺	C1	■				■			■	■	■					
	C2	■	■	■	■						■					
	C3	■			■	■			■		■					
	C4	■	■	■	■	■										
	C5	■								■						
C	C6	■								■						
	C7	■		■	■		■			■						
壺	D1											■	■	■	■	■
D	D2											■	■			
底部 A											■					
底部 B																
底部 C						■										

(3) 底　　部

底部A　「丹後型甕」の底部に対応するものである。

底部B　「V様式甕」の特徴を示すものと考えられる。

底部C　底部に丸底化の傾向が認められる点に「庄内式甕」の影響が認められる。しかし、内面にハケ調整を施す点に「V様式甕」の影響が認められる。

(4) 鉢

「丹後型」　口縁部が甕Aと形態的・技法的に類似するものを基本とする。

「畿内型」　二段階成形による「V様式甕」の下半形態を基本とする。また第5段階になるといわゆる浅鉢が現れる。

鉢A　鉢A1については、類例が少ないため分布状況からは明確にできないが、口縁部の形態から「丹後型」として理解したい。鉢A2についても、鉢A1よりは丹後・丹波地域に分布が認められることも考慮に入れ、「丹後型」と判断したい。

鉢B　基本的な形態は「畿内型」の特徴を示すものである。しかし、口縁部の形態は「山陰型」の特徴を示すものである。よって、本型式については山陰型と畿内型の折衷型と理解したい。

鉢C　本型式は、「畿内型」の一類型として理解したい。

鉢D　本型式は、丹後・畿内両地域に認められ、地域を特定することはできない。

第32表　鉢形土器・高杯形土器の地域性

		畿内的（Aタイプ）					丹波・丹後的（Bタイプ）					山陰的（Cタイプ）				
		口縁部	体部			底部	口縁部	体部			底部	口縁部	体部			底部
			形態	外面	内面	脚部		形態	外面	内面	脚部		形態	外面	内面	脚部
鉢	A1						■	■	■	■	■					
A	A2						■	■	■	■	■					
鉢	B		■			■						■				
鉢	C	■	■	■	■	■										
鉢	D															
鉢	E						■									
鉢	F											■	■			
鉢	G						■	■								
鉢	H	■	■	■	■	■				■						
椀	A															
椀	B															
高	A1						■	■								
坏	A2						■	■			■					
A	A3						■	■								
高	B1	■	■													
坏	B2	■	■													
B	B3	■	■													
高	C1															
坏	C2						■	■								
C	C3						■	■			■					

鉢E　本型式は、類例が少ないため、出土例からは地域性を特定できない。ただし、口縁部の形態は複合口縁を意識しており、「丹後型」に近いものと考えられる。

鉢F　類例は少ないが丹後・丹波地域に出土例が集中する。また、体部形態については山陰地方の「甕脚坏」に類似する。以上のことから、「山陰型」と「丹後型」の折衷型と理解したい。

鉢G　本型式は、類例が全く認められないため出土例から判断することは困難である。ただし、畿内には全く認められない型式であること、北金岐遺跡に類似する形態があることから、どちらかといえば「丹後型」の範疇で理解できるのではないかと考えられる。

鉢H　丹後・丹波地域にも比較的多く分布が認められるが、形態的・技法的特徴から判断すると「畿内的」である。基本的には「畿内型」と理解したい。

(5) 高　　坏

「丹後型」　口縁部の形態が、甕A・鉢A同様の複合口縁をなすものを基本とする。二次口縁には甕・鉢同様擬凹線を施すものと、これをナデ消すものとがある。

「畿内型」　本遺跡で「高坏B」に分類したものと、比較的短く裾広がりな脚部に椀形の体部が付くものの2タイプがある。

高坏A　高坏A1・A2ともに「丹後型」の典型的なものである。高坏A3についても、高坏A1・A2の口縁部のひとつのバリエーションのなかで理解できるものと考えている。

高坏B　高坏B1・B2・B3とも、「畿内型」の典型的なものである。

高坏C　高坏C１については、加古川上流域から中流域にかけて類例の分布が認められる。したがって、分布状況から判断すると、上記３地域いずれかのタイプに特定することは困難である。

高坏C２については、類例が少ないため分布状況からは判断できない。ただし、口縁部形態にわずかに高坏Aの口縁部と類似した傾向が認められる。よって、「丹後型」に近いものと考えたい。

高坏C３については、形態からは「畿内型」と判断できる。しかし、本タイプは小型であり精製土器の部類に入るものであり、このようなものは畿内ではあまり認められない。よって「畿内型」と捉えることは危険である。そして類例をみると丹波地域に少ないながらも類例が認められることから、「丹後型」の範疇で理解したい。

(7) 器　　台

「丹後型」　口縁端部を拡張し、その外面に擬凹線を施すかそれをナデ消すもの。またいわゆる装飾器台についても、本節においては「丹後型」の範疇で考えたい。

「畿内型」　第２・３段階においては、筒形の体部に円孔を穿ち、口縁部と裾部がラッパ状に開くもの。第４・５段階においては、いわゆる小型器台が該当する。

「山陰型」　いわゆる鼓形器台を基本とする。

器台A　器台A１・２ともに「丹後型」の典型として理解できるものである。

器台B　類例がないため、分布状況から判断することはできない。ただし、形態的にみると、鼓形器台の影響がわずかながらも認められるのではないかと考えられる。

器台C　口縁部の形態は異なるが体部の形態は「丹後型」の範疇で理解したい。また類例についても、丹後・丹波地域に比較的多く認められる。しかし、体部に円孔を穿つことは「畿内型」の影響と考えたい。よって、本型式については「丹後型」と「畿内型」の折衷と理解したい。

器台D　本型式は第２・３段階の「畿内型」の典型例と考えるものである。

器台E　器台Aとともに「丹後型」の典型例と考えるものである。

器台F　本型式は第４・５段階の「畿内型」の典型例と考えるものである。

第33表　器台形土器・蓋形土器の地域性

		畿内的（Aタイプ）					丹波・丹後的（Bタイプ）					山陰的（Cタイプ）				
		口縁部	体部			底部脚部	口縁部	体部			底部脚部	口縁部	体部			底部脚部
			形態	外面	内面			形態	外面	内面			形態	外面	内面	
器台A	A1						■	■	■	■	■					
	A2						■	■	■	■	■					
器台B							■	■	■	■	■	■	■			■
器台C				■			■	■	■							
器台D			■	■	■	■	■	■	■	■						
器台E				■	■	■	■	■	■	■						
器台F		■	■				■	■	■	■	■					
蓋A	A1						■	■	■	■	■					
	A2						■	■	■	■	■					
蓋B							■	■	■	■	■					

(8) 蓋

本型式は椀形土器と同様、丹後・丹波地域以外ではあまり認められない。よって、本形式については「丹後型」の範疇で理解したい。類例についても、当該地域の大半の遺跡で出土例が認められる。

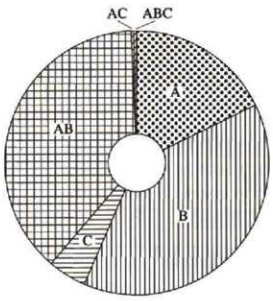
第34表　地域タイプ別型式一覧表

〔A タ イ プ〕	壺B1・壺E2・壺F・壺H1・甕C2・甕C4・底部B・底部C・鉢C 高坏B1・高坏B2・高坏B3・器台D・器台F
〔B タ イ プ〕	壺B3・壺C・壺D2・壺E1・壺G1・壺G2・甕A1・甕A4・底部A 鉢A1・鉢A2・鉢E・鉢G・高坏A1・高坏A2・高坏A3・高坏C1 高坏C2・高坏C3・器台A1・器台A2・器台E・蓋A1・蓋A2・蓋B
〔C タ イ プ〕	壺A1・壺A2・甕D1・甕D2・鉢F・器台B
〔A Bタイプ〕	壺A3・壺B2・壺D1・壺D3・壺H2・甕A2・甕A3・甕A5・甕A6 甕A7・甕B1・甕C1・甕C3・甕C5・甕C6・甕C7・鉢H・器台C
〔A Cタイプ〕	鉢B
〔ABCタイプ〕	甕B2

(9) 小　　結

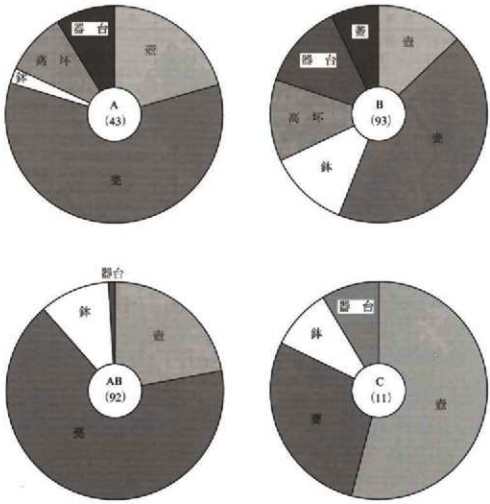
以上、第4・5段階の土器を中心に地域性についての分析をおこなってきた。この結果、本遺跡出土の土器には、「畿内型」「丹後型」「山陰型」の3地域の土器が認められた。加えて、これら3地域の相互の折衷型の土器、例えば「畿内型」と「丹後型」の折衷、「畿内型」と「山陰型」の折衷、「丹後型」と「山陰型」の折衷が少なからず認められる。なお以下の記述では、便宜上「畿内型」をAタイプ、「丹後型」をBタイプ、「山陰型」をCタイプと表現し、「畿内型」と「丹後型」の折衷様式をABタイプと表現する。

そこで上記の分析結果をもとに、数量的な分析を行ってみたい。分析の前提として、各タイプごとに分類される型式をまとめたのが第34表である。



第52図　地域タイプ別出土量

そして、第34表をもとに地域タイプ別の量的比率をまとめたのが第52図である。これによると、量的に最も多いのはBタイプとABタイプで、ほぼ同じである。ついでAタイプ、Cタイプの順である。次に各タイプの土器群を器種別にみると（第53図）、まずBタイプでは甕が43%と圧倒的に多く、次いで壺・鉢・高坏・器台がほぼ同数で約12%を占めている。次にABタイプについてみると、Bタイプ同様甕が66%と圧倒的に多く、ついで壺（21%）・鉢（10%）の順となっている。Aタイプは、甕（60%）・壺（20%）・高坏（9%）・器台（9%）の順となっている。最後にCタイプは、量的には少ないが、壺・甕の順になっている。



第53図　地域タイプ別器種構成

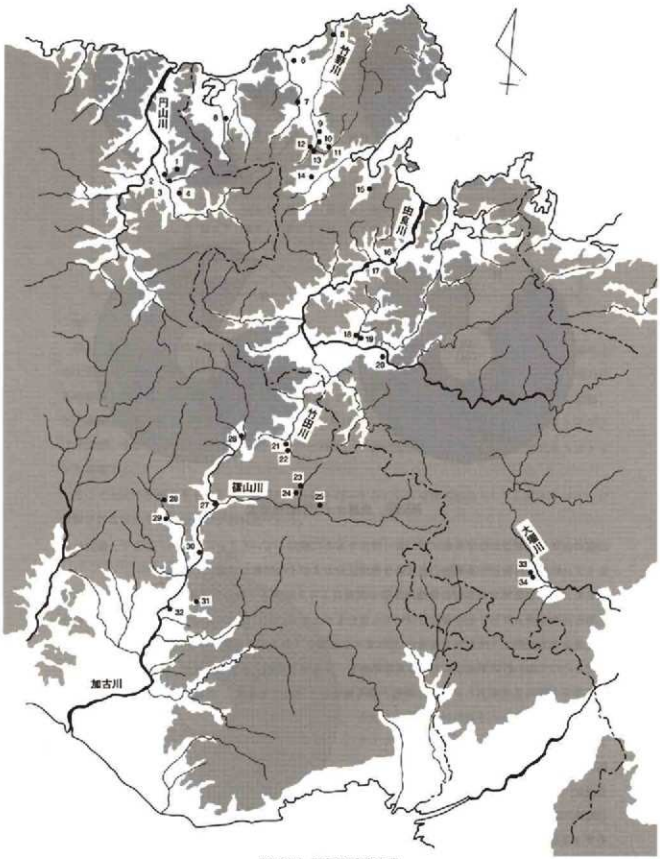
次に、各タイプごとの分布を、第20表～27表をもとに検討していくことにしたい。ここで、検討にあたって、検討の対象となる遺跡の便宜的な地域区分およびその呼称を明確にしておきたい。

まず、加古川流域であるが、篠山川との合流地点より上流側を「加古川上流域」、それより下流側を「加古川中流域」とし、その支流についても含むものとする。次に由良川流域であるが、土師川との合流地点より下流側を「由良川下流域」、それより上流側を「由良川中流域」とし、「由良川中流域」のなかでもその支流の竹田川流域にあたる兵庫県側を「由良川上流域」とする。次に、南丹波にあたる亀岡盆地を「大堰川上流域」とする。この他、但馬地域を「円山川上流域」、丹後地域を「丹後」と呼称していくことにする。

Bタイプ

〔壺〕

由良川流域と円山川上流域以外に分布するタイプ（壺Ｂ３・Ｅ１）、円山川上流域以外に分布するタイプ（壺C）、丹後・大堰川上流域以外に分布するタイプ（壺Ｄ２）、加古川上流域を中心に分布するタイプ（壺Ｇ１・Ｇ２）がある。



第54図　関係遺跡分布図

第35表　関係遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	立石墳墓群	兵庫県豊岡市	13	長隈	京都府中郡大宮町	24	西木ノ部	兵庫県多紀郡西紀町
2	東山墳墓群	兵庫県豊岡市	14	西谷墳墓群	京都府与謝郡野田川町	25	口坂本	兵庫県多紀郡篠山町
3	多田地	兵庫県出石郡出石町	15	金屋口	京都府宮津市	26	大岡	兵庫県氷上郡氷上町
4	宮内	兵庫県出石郡出石町	16	志高	京都府舞鶴市	27	笹山	兵庫県氷上郡山南町
5	大山墳墓群	京都府竹野郡丹後町	17	金屋上	京都府舞鶴市	28	鍛冶屋・下川	兵庫県多可郡中町
6	林	京都府竹野郡網野町	18	小西町田	京都府綾部市	29	森本・上島原	兵庫県多可郡中町
7	古殿	京都府中郡峰山町	19	三宅	京都府綾部市	30	大垣内	兵庫県西脇市
8	鏡呂	京都府熊野郡久美浜町	20	青野西	京都府綾部市	31	三草・御詣ノ下	兵庫県加東郡社町
9	菩城墳墓群	京都府中郡大宮町	21	七日市	兵庫県氷上郡春日町	32	家原	兵庫県加東郡社町
10	谷内	京都府中郡大宮町	22	国領	兵庫県氷上郡春日町	33	北金岐	京都府亀岡市
11	三重	京都府中郡大宮町	23	上板井	兵庫県多紀郡西紀町	34	南金岐	京都府亀岡市
12	正垣	京都府中郡大宮町						

〔甕〕

加古川中流域以外に濃密に分布するタイプ（甕A1・A4）、さらに加古川中流域を加えたBタイプ全地域に分布が認められるタイプ（底部A）がある。

〔鉢〕

円山川上流域を除く地域に分布するタイプ（鉢A2）、加古川上流域と由良川下流域のみに分布するタイプ（鉢E）、大堰川上流域のみに分布するタイプ（鉢G）がある。

〔高坏〕

Bタイプ全域に分布するタイプ（高坏A1）、加古川上・中流域と由良川下流域に分布するタイプ（高坏A2・高坏C3）、加古川上流域のみに分布するタイプ（高坏A3）、加古川上流域と中流域に分布するタイプ（高坏C1）、由良川中流域のみに分布するタイプ（高坏C2）がある。

〔器台〕

加古川上流域と円山川上流域に分布するタイプ（器台A1）、加古川上流域・由良川下流域・丹後に分布するタイプ（器台A2）、由良川中流域と大堰川上流域・丹後に分布するタイプ（器台E）がある。

〔蓋〕各型式とも加古川上流域、由良川中・下流域、丹後に認められる。

以上の検討結果から、「丹後型（Bタイプ）」とされる中にも、①大堰川上流域に分布が限定されるもの、②加古川上流域と由良川中・下流域に集中し丹後には認められないもの、加古川上流域のみあるいは由良川流域のみに分布するものなど、丹後に分布が認められない型式も少なくないことが明らかとなった。そして、各型式ごとにその分布範囲が異なる。

また、Bタイプとした型式は円山川上流域において分布が認められないことが明らかとなった。よって、今後、円山川上流域については別の地域として扱う必要も考えなければならない。特に器台A1については、その分布の中心が円山川上流域にある可能性が考えられる。

さらに、加古川中流域については、量的には上流域より多くはない。よって、上流域を仲介とした丹後地域からの影響と考えたい。

Aタイプ

〔壺〕

壺Ｂ１は、大岡遺跡と丹後に認められる程度である。逆に壺Ｅ２については、円山川上流域を除く各地域に均質な分布が認められる。壺Ｈ１についても同様である。また、壺Ｆについては、当遺跡の他竹田川流域の七日市遺跡でわずかに認められる程度である。

〔甕〕

甕Ｃ２・甕Ｃ４・底部Ｂ・底部Ｃの各型式とも、壺Ｅ２・壺Ｈ１と同様の分布が認められ、量的にも比較的まとまって出土している。

〔鉢〕

鉢Ｃの１型式のみであるが、加古川上流域に比較的多く分布が認められ、他に加古川中流域・由良川中流域・大堰川上流域・丹後にわずかに認められる。

〔高坏〕

高坏Ｂ１は、丹後と円山川上流域を除く地域に分布が認められる。高坏Ｂ２もほぼ同様の分布傾向が認められるが、由良川流域では認められない。高坏Ｂ３は、加古川中流域と丹後に認められる。

〔器台〕

器台Ｄは、加古川中・上流域に比較的多く認められ、由良川流域と大堰川上流域ではわずかである。器台Ｆは、加古川上流域と丹後に認められる程度である。

以上のように「畿内型（Ａタイプ）」と判断した型式のなかで、壺と甕については比較的広範囲に分布が認められる。これに対して、鉢・高坏・器台は加古川流域と由良川流域に限られる。いずれにしても「加古川・由良川の道」を通して南側からもたらされたものと考えられる。

Cタイプ

〔壺〕

壺Ａ１は、加古川上流域・中流域、丹後、但馬に限られる。特に但馬において量的に目立つ。壺Ａ２は、由良川流域と丹後にわずかに認められる。

〔甕〕

甕Ｄ１については、胎土分析が十分に行われていないため、その特徴を明確にできない。甕Ｄ２は、対象とする全地域に認められる。

〔鉢〕

鉢Ｆの１型式であるが、但馬を除く各地域で認められる。

〔器台〕

器台Ｂの１型式であるが、丹後でわずかに認められる程度である。

以上のように、壺と甕に関しては、比較的多くの地域で分布が認められるのに対して、鉢・器台はその分布が限られる。また、地理的位置から考えると、但馬において当タイプの分布が以外と少ない。

ＡＢタイプ

〔壺〕

壺Ａ３は、加古川上流域、由良川流域、丹後に分布する。壺Ｂ２・壺Ｈ２は、壺Ａ３の地域に加えて、

加古川中流域にも分布する。さらに、壺Ｄ３になると、円山川上流域を含めた各地域に分布する。

〔甕〕

甕Ａ２は加古川上流域、丹後、円山川上流域に、甕Ａ３・Ａ５は由良川流域、丹後、加古川中流域に、甕Ａ６は、加古川上流域と由良川流域に、甕Ａ７は、加古川中・上流域、由良川流域、丹後に分布する。

甕Ｂ１は加古川中・上流域と大堰川上流域に認められる。甕Ｃ１・Ｃ３・Ｃ６・Ｃ７は、加古川中・上流域、由良川流域、丹後、円山川上流域に分布が認められる。

〔鉢〕

鉢Ｈの１型式である。加古川中・上流域、大堰川上流域、丹後に分布が認められる。

〔器台〕

器台Ｃの１型式である。加古川上流域、由良川流域、丹後に分布が認められる。

以上のように、各タイプとも加古川流域と由良川流域とに分布が認められる。「加古川・由良川の道」を通して、当タイプの形成がなされたものと考えられる。また、南丹波に分布することについては、当地域の大堰川を通した山城地域などの影響によることも考えられる。

ＡＣタイプ

鉢Ｂの１型式のみである。加古川上流域に分布している他、岡中流域と丹後に類似資料が認められる。山陰型と畿内型の折衷型と考えていることから、加古川上流域がその中心的位置を占めるのではないかと考えられる。

ＡＢＣタイプ

甕Ｂ２の１型式である。円山川上流域に類例が認められるだけである。

5．ま と め

以上、本遺跡出土の弥生時代後期の土器を対象に時期と地域性について検討を加えてきた。そこで明らかとなったのは以下の点である。

① 本遺跡出土の弥生後期の土器は、後期のなかでも第２段階以降第５段階まで認められるが、第４段階、つまり庄内式を中心とする時期のものが圧倒的に多い。

② 本遺跡の土器は「丹後型」「畿内型」「山陰型」および各タイプ相互の折衷型が認められるが、量的には「丹後型」「丹後・畿内折衷型」の２タイプが多い。

③ 各タイプのなかでも各型式ごとにその分布域が異なる。

特に③から、６タイプに分類された地域性ごとに、各型式の分布域をみてきた。この結果、各型式ごとにその分布がわずかずつ異なることが明らかとなった。そしてこのような複雑な分布域をもつ各型式が大岡遺跡において認められるということは、当遺跡のおかれた地理的位置、つまり「加古川・由良川の道」の中間点に位置することと大いに関係するものと考えられる。したがって、当遺跡を中心とした地域における複雑な交流のあり方を反映しているのではなかと考えられる。

〔註〕

(1) 佐原　真「大和川と淀川」『古代の日本　近畿』　1969

(2) 小山雅人『京都府遺跡調査報告書　第4冊　青野西遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985

(3) 石井清司「各地域の様式編年－丹後・丹波地域」『弥生土器の様式と編年－近畿篇Ⅰ』　1989

(4) 石井清司他『京都府弥生土器集成』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

(5) 鍋田　勇他『京都府遺跡調査報告書　第9冊　古殿遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988　以下、古殿遺跡については当報告書による。

(6) 肥後弘幸「弥生土器の編年」『京都府遺跡調査報告書　第12冊　志高遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989　以下、志高遺跡については当報告書による。

(7) 石井清司「丹後・北丹波系土器について」『京都府遺跡調査報告書　第5冊　北金岐遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985

(8) 清水真一『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会　1978

(9) 村上泰樹他『西木ノ部遺跡－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告』(兵庫県文化財調査報告　第124冊) 兵庫県教育委員会　1992　以下、西木ノ部遺跡については当報告書による。

(10) 杉原和雄他『裏除遺跡発掘調査概報』(大宮町文化財調査報告　第1集) 大宮町教育委員会　1979　以下、裏除遺跡については当報告書による。

(11) 森内秀造『多田地小谷遺跡』(兵庫県文化財調査報告書　第17冊)　1983　以下、多田地小谷遺跡については当報告書による。

(12) 宮原文隆『鍛冶屋・下川遺跡－中町鍛冶屋線代替道路建設に伴う文化財発掘調査－』兵庫県多可郡中町教育委員会　1994

(13) 井守徳男・種定淳介他『七日市遺跡（Ⅰ）－第2分冊－（弥生・古墳時代遺跡の調査）』(兵庫県文化財調査報告書　第72－2冊) 兵庫県教育委員会　1990　以下、七日市遺跡については当報告書による。

(14) 村上泰樹『国領遺跡（Ⅱ）－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告－』(兵庫県文化財調査報告　第122冊) 兵庫県教育委員会　1993　以下、国領遺跡については当報告書による。

(15) 村上泰樹他『上板井遺跡発掘調査報告書』(兵庫県文化財調査報告　第76冊) 兵庫県教育委員会　1990　以下、上板井遺跡については当報告書による。

(16) 高橋美久二『林遺跡発掘調査報告書』(網野町文化財調査報告　第1集)　京都府網野町教育委員会　1977　以下、林遺跡に関しては当報告書による。

(17) 水谷壽克・竹原一彦・三好博喜『京都府遺跡調査報告書　第18冊　近畿自動車道敦賀線関係遺跡（8次区間）　三宅遺跡　小西町田遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993　以下、小西町田遺跡に関しては当報告書による。

(18) 森田克行他『安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』(高槻市文化財調査報告書　第10冊) 高槻市教育委員会　1977

(19) 石井清司・田代　弘・中坪　境『京都府遺跡調査報告書　第5冊　北金岐遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985　以下、北金岐遺跡に関しては当報告書による。

(20) 森下大輔『下三草・諏訪ノ下遺跡』加東郡教育委員会　1992

(21) 岸岡貴英他『京都府遺跡調査報告書　第19冊　桑飼上遺跡』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993　以下、桑飼上遺跡に関しては当報告書による。

(22) 寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡－国道24号バイパス建設に伴う遺跡調査報告（Ⅱ）－』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊）奈良県立橿原考古学研究所　1986

(23) 前掲(2)

近藤喬一「青野西遺跡」『京都府綾部市文化財調査報告　第16集』綾部市教育委員会　1989　以下、青野西遺跡に関しては両報告書による。

(24) 瀬崎　誠他「立石墳墓群編」『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会　1987　以下、立石墳墓群に関しては当報告書による。

(25) 池田正男『出石・宮内遺跡』（出石町文化財調査報告書　第1冊）出石町教育委員会　1984　以下、宮内遺跡に関しては当報告書による。

(26) 瀬戸谷晴『上鉢山・東山墳墓群－広域営農団地農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書－』（豊岡市文化財調査報告書　第26集）豊岡市教育委員会　1992　以下、東山墳墓群に関しては当報告書による。

(27) 石井清司「橋爪遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会　1981　以下、橋爪遺跡に関しては当報告書による。

(28) 吉識雅仁他『家原・堂ノ元遺跡－国道175号線社バイパス工事に伴う調査－』兵庫県加東郡教育委員会　1984

(29) 前掲06以下、三宅遺跡に関しては当報告書による。

(30) 松下　勝『丹波・口坂本遺跡－昭和53年度団体営圃場整備事業に伴う発掘調査概要－』多紀郡西紀丹南町教育委員会　1981　以下、口坂本遺跡に関しては当報告書による。

(31) 平良泰久他『丹後　大山墳墓群』（京都府丹後町文化財調査報告　第1集）丹後町教育委員会　1983　以下、大山墳墓群に関しては当報告書による。

(32) 石井清司「山陰系土器について」『京都府弥生土器集成』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989

(33) 石井清司他「資料編」『京都府弥生土器集成』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989　以下、南金岐遺跡に関しては当報告書による。

(34) 中川　渉他『内場山城跡－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XXI）』（兵庫県文化財調査報告　第126冊）兵庫県教育委員会　1993

(35) 山下史朗『大垣内遺跡－加古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（兵庫県文化財調査報告　第98冊）兵庫県教育委員会　1991

(36) 藤井祐介他『兵庫県氷上郡山南町井原至山遺跡』兵庫県氷上郡山南町　1974

(37) 岸岡貴英「京都府出土の装飾器台について」『京都府埋蔵文化財論集　第2集』財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991

(38) 松井敬代・宮村良雄『鎌田・若宮古墳群』（豊岡市文化財調査報告書　第20集）豊岡市教育委員会　1989

第２節　調査の成果

前節における検討結果、および自然科学による分析結果をとおして大岡遺跡について明らかとなった点は以下のことである。

① 大岡遺跡は加古川上流域の氷上盆地に位置し、扇状地に立地する。

② 調査で明らかとなった遺構は、杭列（第１次調査）と溝状の落ち込み（第４次調査）である。よって、４次にわたる調査で明らかとなったのは大岡遺跡の集落の縁辺部にあたると考えられる。

③ 第４次調査では、溝状の落ち込みから土器・木製品などが出土した。特に土器が量的にまとまって出土している。これらの土器および木製品の出土状況は、上記の集落の縁辺部の特徴を示すものと考えられる。

④ 出土した土器は、古くから弥生時代中期・弥生時代後期－古墳時代初頭・古墳時代後期の３時期からなるが、弥生時代後期－古墳時代初頭の土器が圧倒的に多い。

⑤ 弥生時代後期－古墳時代初頭の土器は、庄内式が時期的中心と考えられる。

⑥ これらの土器には、丹波・丹後、畿内、山陰の各地域の特徴が認められる。また、各地域の折衷型の土器も少なからず認められる。この状況は、本遺跡が「加古川・由良川の道」のほぼ中間点に位置することと大いに関係するものと考えられる。

⑦ 大岡遺跡の中心部については、今回の調査結果のみでは明らかにできない。ただし、第１－４次の調査を実施した地点の約100ｍ南を氷上町教育委員会が調査した結果では、弥生時代後期－古墳時代初頭にかけての住居跡などが検出されている。よって、当地にその中心があるものと考えられる。

図　　版

大岡遺跡遠景（南から）

犬岡遺跡近景（南東から）

犬岡遺跡近景（北東から）

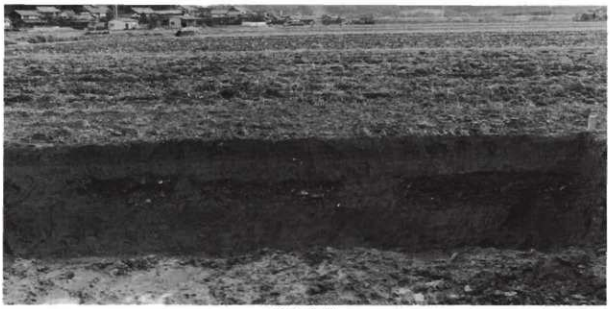
犬岡遺跡近景（西から）

犬岡遺跡近景（南西から）

調査地全景（南から）

G４東壁

G５杭列



G 6 東壁

G 6 北壁

G 6 杭列

全　　景（南から）

落ち込み断面（南から）

土器出土状況

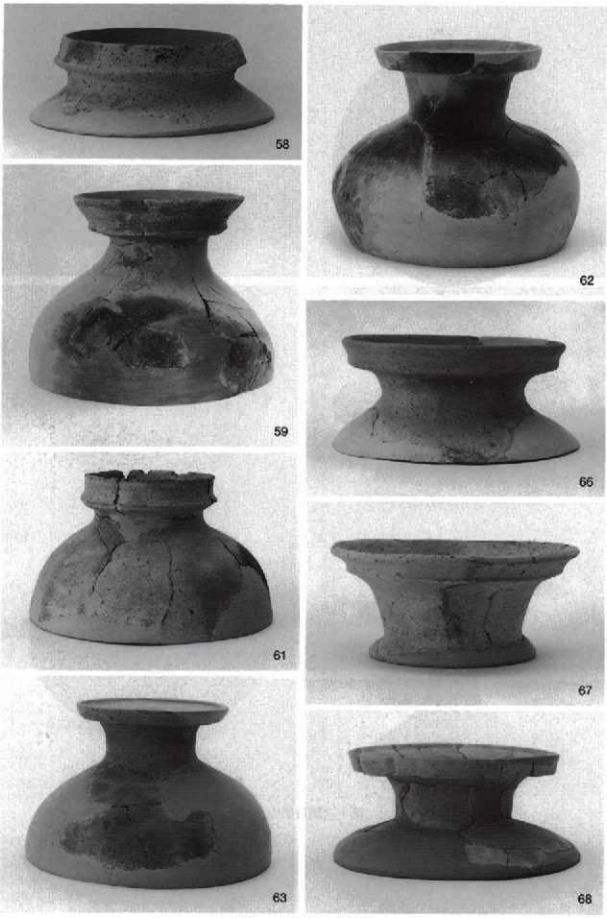
土器出土状況

土器出土状況

土器出土状況

土器出土状況　木製品出土状況

第1次調査出土土器



第3・4次調査出土土器

69

72

71

73

80

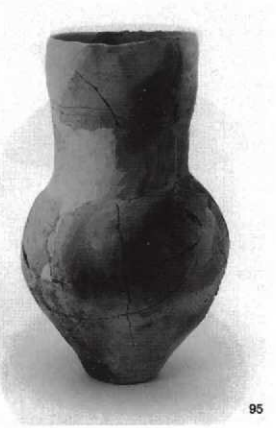
81

第3・4次調査出土土器

85

90

94


95

96

第3・4次調査出土土器

98

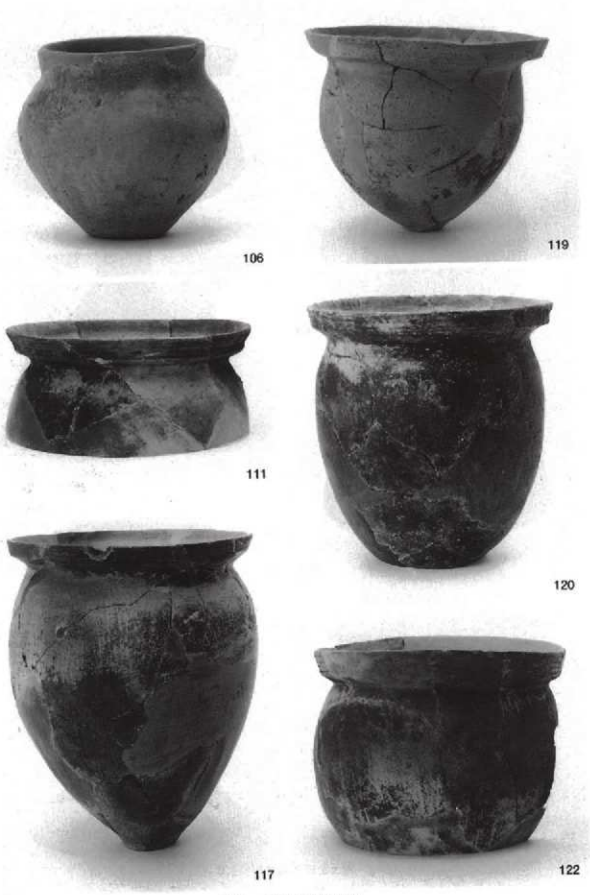
105

102

101

103

第3・4次調査出土土器



第3・4次調査出土土器

124

133

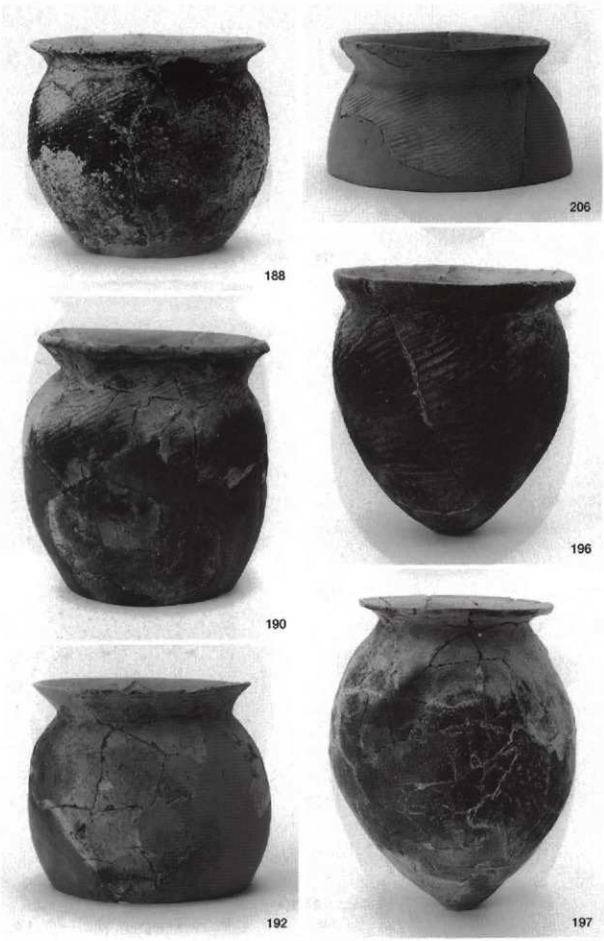
127

134

135

132

第３・４次調査出土土器



第3・4次調査出土土器

170

185

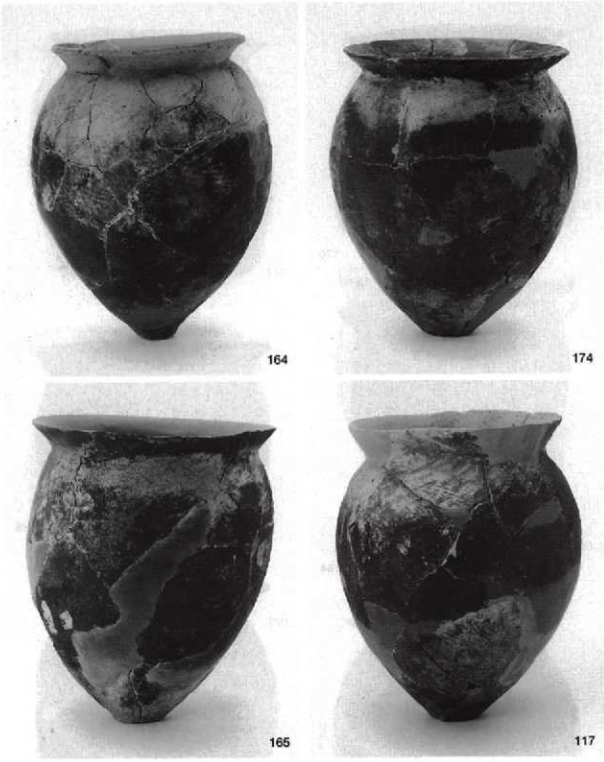
184

189

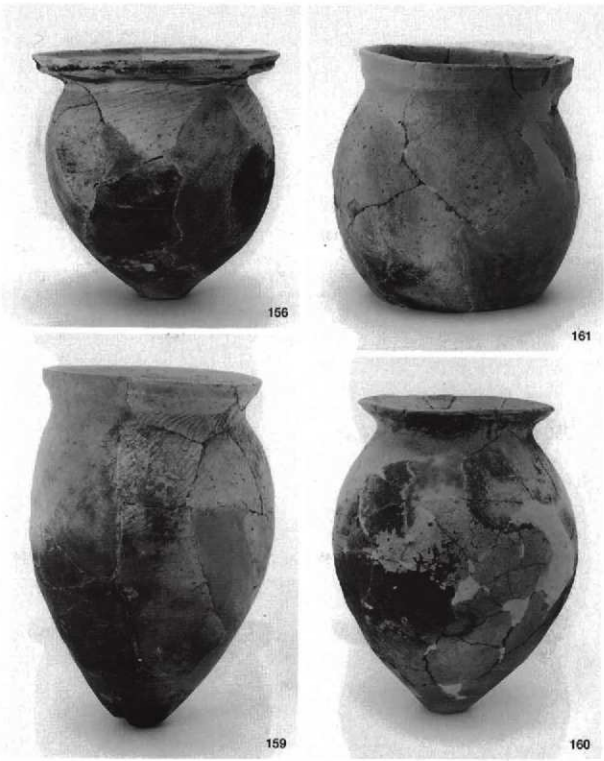
181

182

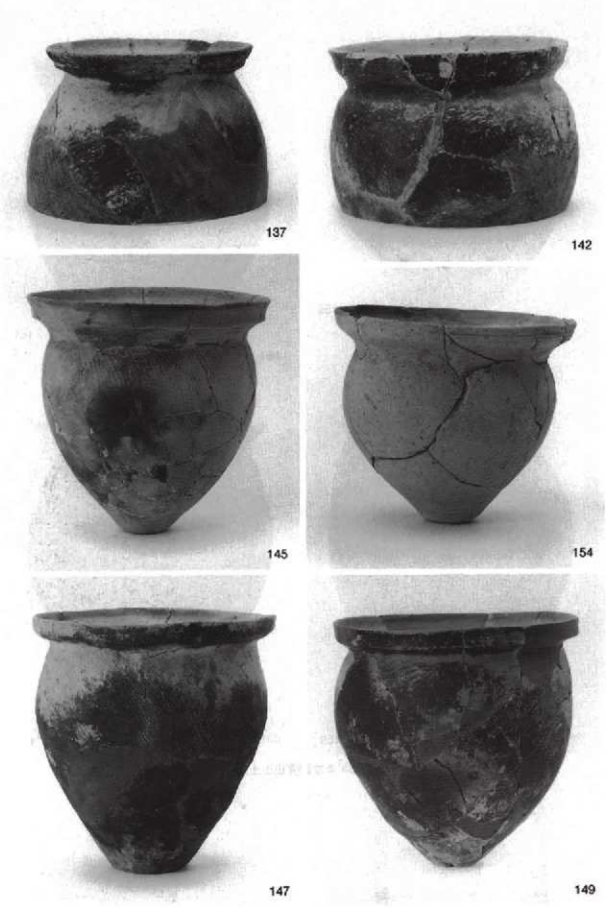
第３・４次調査出土土器



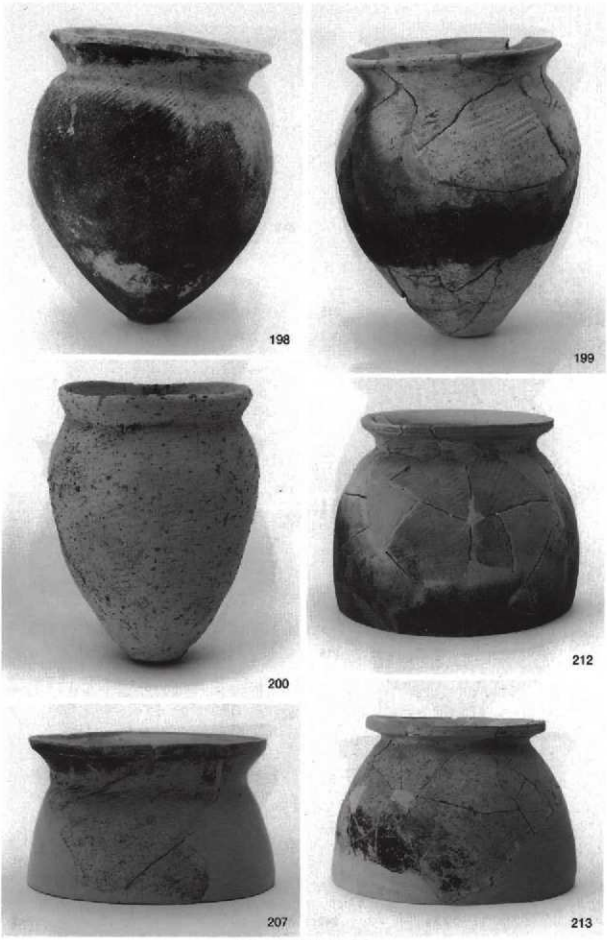
第3・4次調査出土土器



第3・4次調査出土土器



第3・4次調査出土土器



第3・4次調査出土土器

215

217

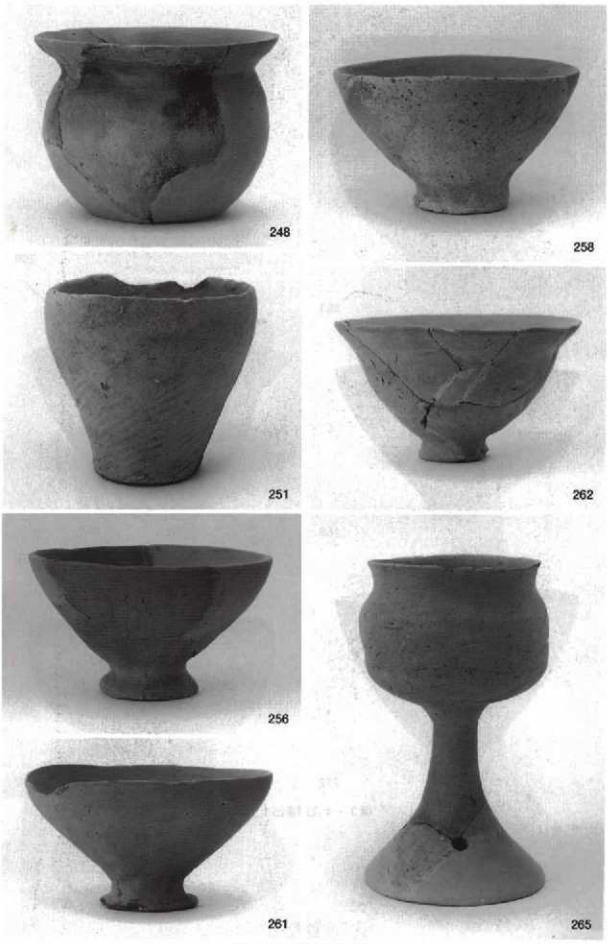
216

218

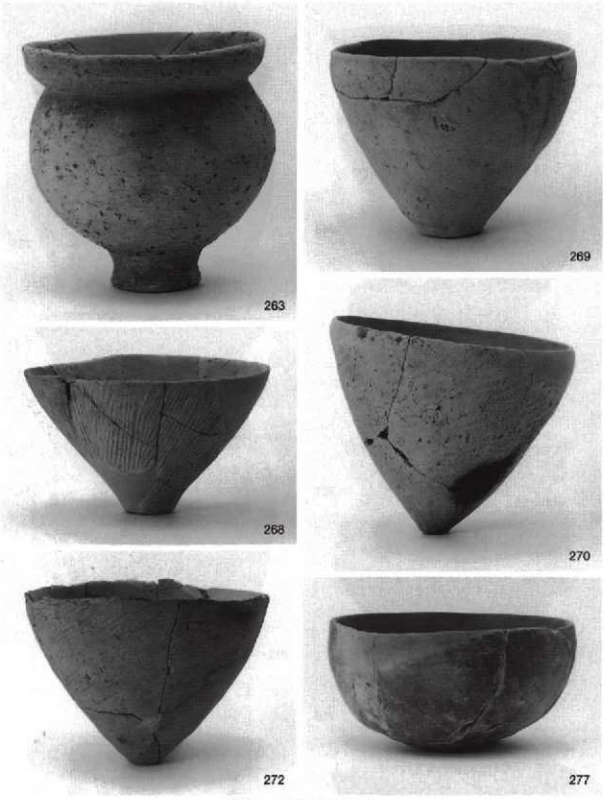
242

243

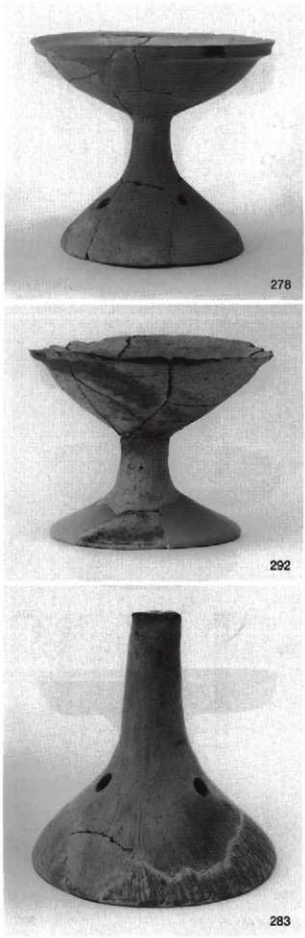
第3・4次調査出土土器



第３・４次調査出土土器



第3・4次調査出土土器



第３・４次調査出土土器

293

303

294

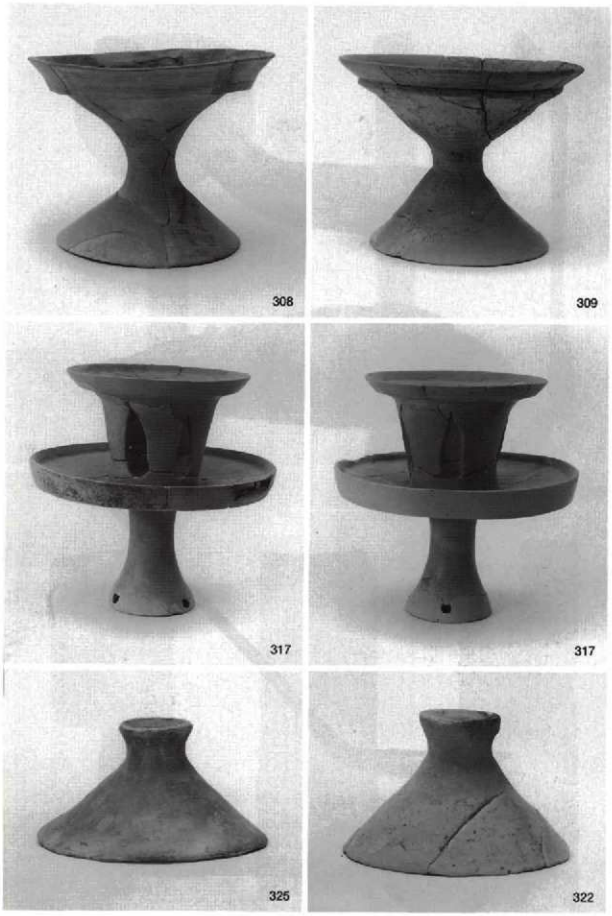
304

295

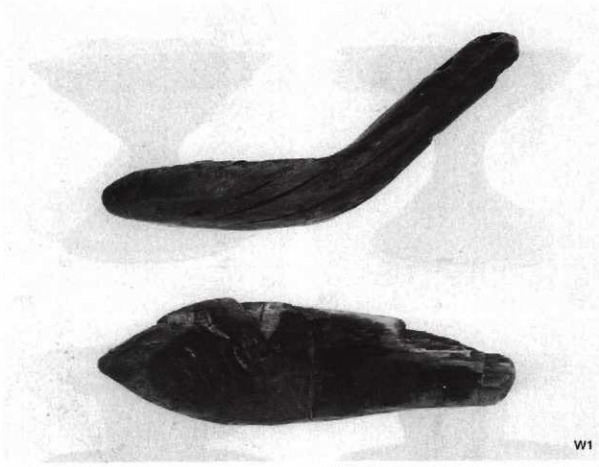
276

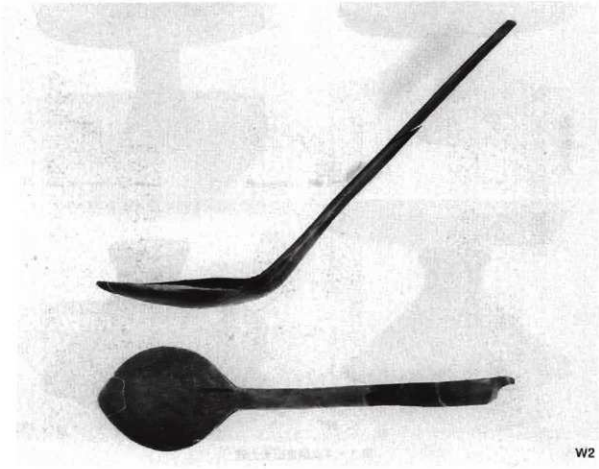
305

第3・4次調査出土土器

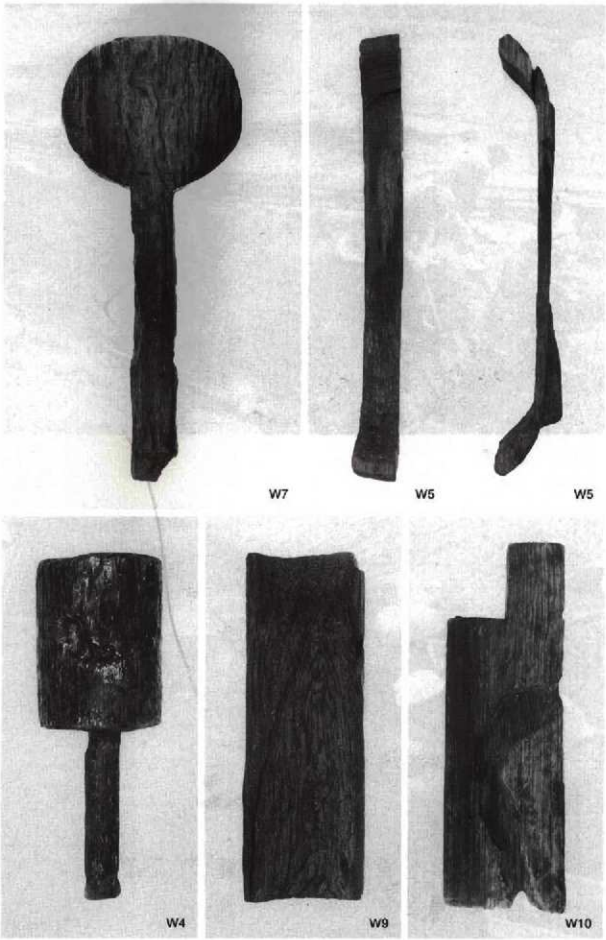


第3・4次調査出土土器





第4次調査出土木製品



第4次調査出土木製品

兵庫県文化財調査報告書　第147冊

犬　岡　遺　跡

平成7年3月25日　印刷
平成7年3月31日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5号
TEL（078）531-7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒652　神戸市中央区下山手5丁目10番地1号
TEL（078）341-7711

印　刷　水山産業株式会社
〒652　神戸市長田区二番町3丁目4-1
TEL（078）577-3757